

侮蔑を以てスペラアンスキイを見るやうにさせたその事實——が、公爵アンドレーエをして、スペラアンスキイに對する自分の感情を取扱かふのに非常に注意せしめた、そして、知らず知らずの間に、さういふ感情を彼の心の裡に強めたのであつた。

ホルコオンスキイがスペラアンスキイと一緒に送つた最初の晩、二人は、法典改正の委員會のことを話し合つた、そして、スペラアンスキイは、公爵アンドレーエに向つて、その委員會は最早百五十年前から設けられて居り、何百萬といふ金銭を費したに拘はらず、何にも爲無かつたことや、ロゼンカムフが有らゆる法典に札を貼り付けたばかりであつたことを、皮肉に話した。

『で、國家が數百萬を費して得たこと、云つては唯それ切りでしたからなア』と、彼は云つた。『吾々は元老院に新たな司法權を與へ度いと思ふのです、けれども、法律が一つも無いのです。貴下のやうな人が、公爵、政府へ入ら無いのが罪だといふのは其所なんですぞ』

公爵アンドレーエは、さういふ爲事には幾干かの法學上の教育を持つて居ることが必要であつて、自分はそれが少しも無いといふことを、注意した。

『けれども、誰もそれを持つて居無いんだ、何う爲るもんですか？。それは、何うにか爲て破つて出なきやアならん運命圈なんです』

一週間経ぬうちに、公爵アンドレーエは、軍規改正委員會の一員であつた、そして——彼に取つては全く意外にも——又法典改正委員會の一部の委員長であつた。スペラアンスキイの要求に依つて、彼は民法の始の部分の調査に着手した、そして、ナポレオン法典とジャスティニヤン法典を参照して、人權の部の改正案を作らうとして居た。

## (七)

二年前、即ち千八百〇八年の始には、ビエールは、自分の領地への旅行から彼得堡へ歸つて居た、そして、自分の意向からでは無く、彼得堡の共濟組合員の間で領袖的地位を取つた。彼は、食事や、葬禮の會所を造り、新會員を入れ、さまざまの會所を作ることや、信頼すべき書類を手に入れることに盡力した。彼は、禮拜堂の建築に金銭を出した、そして、自分の力で能き限り、組合員の大多數がその拂ひ込みに吝で不規則であつた慈善金の拂ひ後れを埋め合せた。殆んど他の援助を借らずに、自分の金だけで、彼は、彼得堡で組合が立てた貧民院を維持した。それと同時に、彼の生活は、往時と同一な誘惑、往時と同一な放縱に打ち負けて、往時と同一な風に續いて行つた。彼は、善い食事を好み、強い飲料を好んだ、そして、さういふ欲

に負けるのは不道徳で、卑しいことだとは思ひながらも、自分がそのなかに動いて居る獨身者の社交界の誘惑に抵抗することが能き無かつた。

それでも、彼の活動や、放蕩の渦中でさへ、ビエールは、一年経つといふと、彼が立脚した共済組合といふ地面が、その上に確乎踏み堪へやうとすればする程、自分の足下から滑り去つて行くかのやうに、だん／＼感じ始めた。それと同時に、彼は、地面が自分の足下から遠く滑つて行けば行く程、組合に對する彼の羈絆はますます強くなるのを感じた。彼は、組合に入つた時に、泥沼の滑かな面へ平氣で足を置いた人のやうに感じたのであつた。隻足下すと、彼は沈んだ、で、自分の立つて居る地面は確なものだと自分に承知させる爲めに、彼は又今一つの足を其所へ入れた、と、尙一層潜つて、泥の裡で動け無くなつて、そして、今は、我にもあらず、泥沼の裡へ膝まで潜つて、掘いて居るのであつた。

オーシップ・アレキセエヴィチは彼得堡に居無かつた。(彼は、彼得堡の會所の事務とは一切關係を斷つてしまつて、此頃は決して莫斯科を出無かつた)。彼得堡の會所の連中は、皆なビエールが日常生活に於て知つて居る人々であつた、で、さういふ人々を、彼が私生活に於ては弱い無價値な品性の人々として知つ居る公爵B……だの、イヴァン・ヴァシイリエヴィチ・デイイ

……として見ずに、唯共済組合での同胞としてののみ見ることは、彼に取つては、困難であつた。彼等の組合の胸掛や、其他の表章の下に、彼は、彼等が浮世の生活に於て得やうと骨折つて居た制服や勳章を見無い譯には行か無かつた。慈善金を集め、十人程の組合員——その半分はビエール自身に劣らぬ好い生活の人々——から約束された——而も、大抵はその儘になつてしまふ——二三十留を勘定した後で、ビエールは屢々、有らゆる組合員が、自分々々の隣人の爲めに、各々自分の總ての持ち物を捐てやうと約束した共済組合の誓言のことを考へた、と、疑惑が彼の心で動いた、彼は、その疑惑から遁れやうと骨折つた。

彼は、自分が知つて居る總ての組合員を四種に別けた。第一種には、彼は、會所の事務や、人間の利益を計ることなどには何等活動的の興味を持たずに、唯だ組合の科學的秘密や、神の三重の意味とか、物の最初の三元素——硫黄、水銀、鹽——とか、正方形や、ソロモンの宮の總ての象形の意義などに關する問題ばかりに、身を入れて居る組合員を、數へ込んだ。ビエールはこの種類の組合員——その裡に古參の組合員は大抵入つて居た——ビエールはその裡へ、オーシップ・アレキセエヴィチも數へ込んだ——を尊敬した、が、彼はさういふ人々と興味を同じく爲無かつた。彼の心は、共済組合の神秘的な方面には向いて居無かつた。

第二種には、ビエールは彼自身や、彼と同年じやうに、漂ひながら、自分等自身の行くべき眞直な善く解つた道を共済組合の主義の裡で究めながら、未だそれは見出さ無いが、それでも、何時か見出せるだらうといふ希望を持つて居る組合員を入れて居た。

第三種には、彼は、大多数であつた組合員、即ち、共済組合の裡で、外形上の形式や、儀式ばかりを見て、その主意とか意義には一向構はずに、その外形上の形式を守ることはかりを大切だとして居る人々を數へ込んだ。ヴァラルスキイは固より、管長さへさういふ連中であつた。

第四種も亦、組合員の大數、殊に近頃組合に入つた人々の裡の大數を含んで居た。それ等はビエールが觀察した所では、何も信せず、何も望ま無いのだが、唯、會所には多かつた、いろいろな縁故や、官位などの爲めに非常に有力であつた金持の若者と、交際し度い爲めばかりに組合に入つた人々であつた。

ビエールは、自分が爲て居ることに就て不満足に感じ始めた。共済組合は、少くとも彼が此所で知つて居る限りでは、唯だ形式を守ることにばかりに據つて居るやうに、時々、彼には見えなかつた。彼は、決して、共済組合その者を疑はうとは思は無かつた、が、露西亞の共済組

合は邪路へ入つて了まつて、元の路からだん／＼離れつゝあるのでは無いかと思ひ始めた。その年の暮頃に、ビエールは、組合のもつと高い秘密に身を委ねる爲めに外國へ行つた。

ビエールが彼得堡へ歸つたのは千八百〇九年の夏であつた。露西亞と外國の共済組合員の間通信から、ベスウホフが外國の高い位地に居る多くの人々の信任を得るに至つたことや、彼が多くくの神秘を教えられ、高い位に擧げられ、そして、露西亞の共済組合の進歩に貢献するだらうと思はれる多くの物を持ち歸りつゝあるといふことが、知れた。彼得堡の共済組合員たちは皆な彼に逢ひに来て、彼に取り入らうと骨折れ、そして、誰も彼も、彼等の爲めに用意して居る何物かを彼が持つて居るやうに思つたのであつた。

第二級の會所の嚴肅な會合が催された、その會で、ビエールは、外國の組合の主動者たちから彼得堡の組合員たちに向つてビエールに托して送つた通牒を傳へやうと約束したのであつた。集會は十分な出席者であつた。常例の儀式が済むと、ビエールは起つて、話し始めた。

「親愛なる兄弟たちよ」と、彼は、手に草稿を持つて、顔を赤くして、躊躇しながら、始めた。會所の裡から吾々の秘密が外へ出無いやうにして居るばかりでは、足り無い——吾々のや

ら無ければならんことは、活動だ……活動だ……。吾々は睡むらうとして居る、で、吾々は活動し無ければならん』

ビエールは草稿を開けて、読み始めた。

『純正なる真理を傳播し、徳に達することを得んが爲めには』と、彼は讀んで、『吾々は、人の心より僻見を除き、時代精神と調和せる主義を廣め、青年の教育を企て、最も進んだる聰明の人々と決して解けざる結び目に依つて吾々自身同盟し、大膽に且同時に用心深く、迷信、不實、愚劣に打勝ち、而して、吾々に信頼し居る人々より、共通の目的に於て共に連結し、権力及び權威を有する人々を造ら無ければならぬ。』

この目的を達せんが爲めには、吾々は徳行をして惡徳を壓倒せしむるやうにし無ければならぬ、吾々は、正直なる人が、この世に於てすら永遠の褒美を得ることを得るやう、努力し無ければならぬ。けれども、斯の如き大企畫を實行せんとするに當り、吾々は、現存の政治上の制度に甚だしく妨害せらるゝ。現存の事態をば何うすべきだらうか？ 吾々は、革命を歓迎し、有らゆる物を顛覆し、暴力に依つて暴力を擊退すべきであらうか？……いな、吾々は斯の如きことは決して爲無い。暴力に依る有らゆる改革は排け無ければならぬ、何となれば、人間

が今日のまゝである限り、暴力に依る改革は害惡を除くには何の働をも爲さ無いからである、又智慧は更に暴力を要せざるものであるからである。

吾が組合の計畫全體は、確信と目的の一致に依つて——惡徳や愚舉を何處でも有らゆる手段を以て鎮壓すると共に、價值ある人々を塵の裡より引き上げて、吾が組合に加はらせて、才能と徳を保護する目的に依つて——結合したる、品性あり徳ある人々を訓練することの上に建てられ無ければならぬ。其所に至つて、始めて、吾が組合が、紊亂の主動物等の手を動かさるやう縛り上げ、彼等をして知らしめずに彼等を制御する力を得るに至るのである。要するに、吾々は社會上の義務を侵害すること無しに全世界に波及すべき世界的權能を有する一種の政府を建てやうと思ふのである、而して、その政府の下にあつては、他の一切の政府は、それらの普通の行路を續け、吾が組合の大目的即ち惡徳に對する徳の勝利を妨げるものを除き、其他の總てのことを爲し得るのである。この目的は基督教そのもの、目的である。それは、聖くあり且善くあるやうに、又彼等の利益の爲めに善き賢き人々の教訓及び模範に従がうやうに、人間を教へ來つたのである。

有らゆる物が暗黒裡に沈み居る時にありては、勿論勸勵のみにて足りた、真理の斬新なるこ

とが特異の力をそれに與へたのだが、今日では、眞に強き手段が吾々には必要である。今は自己の感覺に依つて導かるゝ人は、徳の裡に感覺に觸れ得べき魅力を見出さなければならぬ。欲情は根絶させることは能きぬ、吾々は、唯それを高尚な目的に向けるやうに試み得るのみである、故に何人も、徳の範圍内に於て欲情の満足を見出すことが能き無ければならぬ、而して、吾々が組合は、その目的に對する手段を供さなければならぬ。

吾々が、何れの國も有爲の士の或る數を持ち、その各人が二人宛を訓練し、全體が密接なる協働を爲すに至るや否や、その時始めて、既に人間の爲めに、秘密に於て、多くを爲し來りたる吾々が組合に取つては、何事と雖ども爲し得べきに至るであらう」

この演説は、非常に印象を與へたばかりで無く、會所に於て、昂奮の戰慄を起させた。組合員の大多數は、この演説に於て、「啓發派」の危険な計畫を見たので、ビエールに取つては意外にも、それを冷然と受け取つた。

管 長がそれに對して反對を唱へ始めた、ビエールはだん／＼烈しくなる熱心を以て、自分の意見を説明し始めた。それ程烈しい會合は暫時無かつたことであつた。會衆は二派に割れた、一つの派は、ビエールを「啓發派」だと批難して、彼に反對した、他の派は、彼に賛成

した。ビエールはこの集會で始めて人間の心の限り無くさま／＼に違つて居るのに驚かされた、その結果に依れば、二人の人に同なじに見られる眞理は世に無いといふことになるのであつた。

ビエールの身方であるやうに見えた組合員たちさへ、ビエールが同意することの能き無い制限や差違を持ちだして、それ／＼勝手な風にビエールを遮ぎつた。ビエールが重に欲したのは何時も、自分の思想をば、自分が考へた全くその儘に他の人へ傳へることであつたのだ。

會議の終末に、管 長は悪意と皮肉でベズツホフの性急を責めた、そして、議論に於て彼を導びいたのは、徳を愛する心ばかりでは無くつて、喧嘩好きな心であつたのだと注意した。

ビエールはそれには何の返答も爲無かつた、が、簡單に、彼の提議は容れられるか如何か尋づねた。彼は、さうはなるまいと話された、で、常例の儀式を待たずに、會所を出て、家へ行つた。

## (八)

再ビエールは、彼が非常に恐れて居た陰鬱に襲はれた。會所で演説を爲てから三日の間、彼

は、誰にも逢はず、何處へも行かずに、家で長椅子の上に臥て居た。

その時、彼は、妻からの手紙を受け取つた、妻は、何うか逢ひに来て呉れと頼み、彼と離れて居る自分の不幸であることや、彼の爲めに生涯を獻じて了まひ度いことなどを書いて來た。

手紙の終末に、妻は、一二日の裡に、外國から彼得堡に着く筈であると、彼に知らせた。

その手紙の來た直ぐ後で、ビエールが少しも尊敬して居無い共済組合員の一人が、彼の閑居の裡へ飛び込んで來た。ビエールの夫婦間の問題に談話を向けて、その男は、兄弟の忠告として、妻に對する彼が嚴酷であるのは悪いことで、ビエールは、後悔して居る者を宥さぬことに於て、共済組合の第一の主義に違つて居るのだといふ説を出した。

それと同時に、彼の姑、公爵ヴァシリの妻が、重要な相談があるから、ホンの五六分でも宜いから、逢ひに来て呉れと頼んで來た。ビエールは、彼を妻と和協を爲せやうといふ云ひ合はせがあるのだと見た、が、彼は、彼が其の時居た気分では、それを厭だとは思は無かつた。彼には、何事も何うでも宜かつた、ビエールは、人生の何事をも、重大なことは思は無かつた、そして、彼の心を領して居た陰鬱の勢力の下では、彼は、自分自身の自由にも、妻を罰して自分の勝手なことを爲ることに、何の意義をも附さ無かつた。

「誰も正しくは無く、誰にも咎は無い、だから、彼女にも咎は無い」と、彼は思つた。ビエールが妻と再一緒になることに直ぐ承諾を與へ無かつたとすれば、それは、單に、彼が陥つて居た陰鬱な心持の裡では、彼は何ういふ行動をも執ることが能き無かつたからであつたのだ。若し、彼の妻が彼の所へ來たのであつたら、彼は今それを追ひ出すことは能き無かつたに違ひ無い。その時ビエールの心を占め切つて居た問題に比らべては、彼が妻と一緒に暮すとか、暮さ無いとかいふやうなことが、何であつたらうか？

妻にも 姑にも返事を遣らずに、ビエールは、直ぐ、その晩遅く出發して、オーシップ・アレキセヴィイチに逢ひに莫斯科へと馬車を驅つた。

これが、ビエールが彼の日記に書いた所のものだ。

「莫斯科、十一月十七日——恩人に逢つて、今歸つたばかりの所だ、で、私が感じつゝあつた總てを、急いで書き留めて置く。オーシップ・アレキセヴィイチは、貧窮に暮すのが好きだ、そして、この三年以來、膀胱の痛い病氣を病んで居る。誰も、彼から、呻吟とか、不平を聞いたことは無い。朝から、夜遅くまで、彼が最も手輕な食事を爲る時の外、始終、科學の研究をやつて居る。彼は、私を親切に迎へて、私を、彼が臥て居る寢臺の上に坐らせた。私は、彼に向

つて、東洋及びエルサレムの騎士の合圖を爲た、彼も同なじことをやつた、そして、穏かな笑顔で私が普魯西や蘇格蘭の會所で覺えたり得たりした事柄を尋いた。私は能きただけ善く、何も彼も話し、私が吾が彼得堡の會所で提議した活動の主義を彼に向つて繰り返し、私に與へられた面白く無い待遇や、私と組合員たちとの仲違のことを彼に話した。オーシップ・アレキセエヴィイチは少時黙まつて考へてから、その問題に對する彼の意見を悉く私の前に置いた、それは、直ぐ私の過去全體や、私の前に横たはつて居る有らゆる進路を明かにしたのであつた。彼は意外にも、私が、組合の三重の目的、即ち――

(一) 神聖なる神祕の保存及び研究。

(二) それを受ける爲めに、自己を清め、改良すること。

(三) 斯の如き潔めることを通して、人類の進歩を計ること。

を記憶えて居るか何うか、私に尋いた。

何れが、この三つの目的のうちの一番大切なものか？と、彼は尋いた。疑ひも無く、自己を改良すること、自己を潔めることだ。吾々が何時も如何なる境遇にも拘らず努力することが能きるのは、唯だその目的に向かつてのみであるのだ。が、それと同時に、吾々から大努力を

求めるのは、その目的であつて、それが爲めに、慢心の爲めに迷はされて、吾々はその目的を捨て、了まひ、吾々の不淨な状態で受ける資格の無い神祕を覺らうと努めたり、或は、吾々自身は、悪徳や、怪しからん事の例を出して居ながら、人類の改良を求めたりするやうになるのだ。「啓發派」は、世間的活動に誘惑され、慢心で膨れて居るのだから、全然純正な宗派とは云へ無い。斯ういふ論據で、オーシップ・アレキセエヴィイチは、私の演説及び私が爲て居る一切の事を非難した。心の底では、私は彼に同意した。

私の家内の事状を話すと、彼は、「共済組合員の第一の義務は、貴下にお話したやうに、自身を完全にすることでありませう。が、吾々は往々、吾々の生活の總ての難件を除いて了まへば、その目的にもつと善く達することが能きと想像するのです。然し、それは、全く反對で、すぞ、貴下」と、私に云つた。「吾々は、この世の煩の真中にあつて、始めて、三つの大いなる目的、即ち――

(一) 自己を知ること――人は比較することに依つてのみ自己を知ることが能きからです――

(二) 層完全になること――これは、奮闘に依つてのみ得られるもの――

(三) 主要なる徳――即ち、死の愛に達することに――達することが能きなのです。

人生の腐敗のみが吾々に人生の虚榮を悉く見せて呉れ、死に對する吾々本然の愛を強め、若くは、寧ろ吾々を新生に復活させて呉れるのです」

オーシップ・アレキセエヴィチは、肉體の苦しい病氣に拘らず、決して人生に倦きて居無かつたので、斯ういふ言語が一層印象の深いものであつた。彼は、死を愛して居たけれども、彼の内部的人格のあれ程純潔で高尚であるに拘はらず、未だ死を受けるだけの準備が整つて居無い、と自分では感じて居るのだ。

それから、吾が恩人は、創造の大正方形の意義を十分に私に説明して呉れ、第三と第七の戒が有らゆる物の基礎であることを指し示めて呉れた。彼は、私に、彼得堡の組合員たちから離れずに、會所の第二級のみの義務を行なつて居ながら、慢心の誘惑から兄弟たちを救つて自己を知ること及び自己を完全に爲ることの眞の路へ彼等に向けるやうに努めろと、忠告して呉れた。その上に、私だけの事として、彼は、第一に私自身に對して絶えず善く注意を爲て居ると、忠告して呉れ、その爲めだと云つて、私に、物を書く帳面を呉れて、これから將來の私の有らゆる行爲を書き留めろ、と云つた。私は今、その帳面にこれを書いて居るのだ」

「彼得堡——十一月二十三日——私は妻と協和を爲て了まつた。私の姑は、私の所へ泣き

込んで来た、そして、エレンは彼得堡に居て、何卒逢つて願ひを聞いて貰ひ度いと云つて居ることや、彼女が無事であることや、私に捨てられて悲しんで居ることや、其他種々なことを云つた。私は、若し一たび彼女を見ることに爲たらば、彼女の願を聞入すに居ることは私には能き無いに違ひ無いことを知つて居た。さういふ不確な状態で、私は誰の援助、助言を頼んだら宜いか分ら無かつた。若し、吾が恩人が彼得堡に居たらば、彼は、私の爲べきことを教へて呉れたらう。私は部屋へ引籠つた、そして、オーシップ・アレキセエヴィチの手紙を読み、彼の談話を憶ひだし、そして、さういふものから、私は、懇願者を拒むべきでは無く、誰に向つても援助の手をさしだすべきであつて、殊に、私とこれほど密接な關係のある人間に對しては尙更さうで無ければならぬ、私は私の十字架を負はなければならぬといふ結論に達したのであつた。が、私が正しいことを爲んが爲めに彼女を宥るすのだとすれば、責めて彼女との再結合に精神的の目的ばかりを持たせることにし度いと思つた。さう私は決した、で、さう、オーシップ・アレキセエヴィチへ書いて遣つた。私は、妻に、過ぎ去つたことは全然忘れるやうに頼むといふことや、何んな悪い事を私が妻に爲たことがあつたに爲ても、それは悉皆忘れて呉れといふことや、私の方では妻を宥すことは何にも無いことを、云つた。彼女にさういふことを云ふの



は、私に取つては嬉しいことであつた。再び彼女を見るのが私に取つて何れほど苦しいことであつたかを、彼女が知るやうなことの無いのを、私は此に祈つて置く。私は、この大きい家の、上の部屋に住まうことに爲た、私は、新しく始めることの幸福な感情を覺えるのだ」

(一九)

その時分——尤も何時ものことであるが——宮中や、大きい舞踏會で出會ふ上流社會が、幾つもの團體に割れて了まつた、そして、その各がそれ／＼特別の調子を持つて居た。そのうちが一番大きいのが、佛蘭西團——ナポレオン同盟の賛助者——伯爵ルミヤンツエフ及びコオランクウルの團體であつた。この團體で、エレンは、彼得堡の夫の家に落着くや否や、主要な位地を取つた。エレンは、佛蘭西の大使館員や、その政治系に屬する、頓才と、禮儀正しいのとで名高い人々の多數を迎へたのであつた。

エレンは、兩皇帝の名高い會見の時に、エルフルトに居た、そして、其所で、ナポレオン黨に屬する歐羅巴の總ての有名な人物と密接な交誼を結んだ。エルフルトでは、エレンは華々しい成功を得たのであつた。ナポレオンその人さへ、劇場でエレンを見て、誰であるか尋

き、そして、その美しさに感服した。

美しい立派な女としてのエレンの大成は、ビエールを驚かさ無かつた、それは、年と共に、エレンは前より尙一層奇麗になつたからであつた。が、彼を驚かしたのは、この二年間に、彼の妻が「美しさも頓才も共に優れた善い女」と云はる、評判を得るに至つたことであつた。

名高い公爵ド・リイニが八頁の手紙をエレンによこした。ビライビンは、伯爵夫人ベズウホフの前で封切を爲る爲めに、自分の警句を大切に貯へて置いた。伯爵夫人ベズウホフの客室へ入ることが能きるのが、才人の證明状と見られて居た。若い人々は、エレンの夜會の前には、その客室で何か談話が能きるやうにと、さまざまの問題を研究するのであつた、そして、大使館の書記官たちは勿論、大使でさへも、エレンに外交上の秘密を打ち明けた、で、エレンは宛然一つの國であつた。

エレンが極く間拔けな女だといふことを知つて居たビエールは、家の宴會や夜會で、政治や、詩や、哲學の談話が出るのを聞く度に、當惑と心配の不思議な感が爲た。さういふ夜會では、彼は、自分の種が見顯はされはしまひかと、刻々ハラ／＼して居る手品師が感じるに違ひ無いと思ふやうな感覺を経験するのであつた。が、間拔なことが、さういふ客室の取り賄なひには丁

度無ければならぬものであつた爲めに、それとも、欺まされた人々が、その欺まされるのを喜こんだ爲めであつたのか、虚欺は見顯はされ無かつた、そして『善い女』といふ評判がエレエナ・ヴァジイリエツナ・ベズツホフに確乎と引つ着いて了まつて、エレンは何様な野卑な、何様な間拔けなことでも云ひ放題で、尙且誰も彼も、エレンの一言一句に感服して、エレン自身は夢みもし無かつた深い意味を熱心にその裡で見出したのであつた。

ビエールは、この華々しい社交的婦人には全く打て着けの夫であつた。彼は、誰の邪魔にも爲ら無い、妻の客室の最高の調子の全般的印象を破すどころでは無く、妻の立派さと伎倆に向つての對照となつて、妻に取つて、都合の好い引き立て役になるといふやうな、放心した、偏人の大貴族の夫であつた。

この二年以來、ビエールが何時も物質外の事柄に心を集中させて居たことや、其他の何でも心をから侮蔑して居たことが、彼が一向興味を持つて居無かつた妻の社交團に於て、故意とでは得ることが能き無いやうな、それ故に、人をして知らずく尊敬せしめるやうな、誰に對しても同なじな、平氣、無頓着、仁慈の調子を彼に與へた。彼は、劇場へでも入るやうに、妻の客室へ入つたが、誰とも心安かつた、誰にも、同なじに愛想が好かつたと同時に、誰に對しても

同なじに無關心であつた。時々、自分に興味のある問題では、談話に加はつた、で、さうなると、『大使館の方たち』が居やうが、居まいが、一向お構ひ無しに、なか／＼何時も當時流行の警句と調和するといふ譯には行か無い彼の意見をポツリ／＼云ひ出すのであつた。が、彼得保で一番傑い女の偏人の夫に對する、公の評價は、誰も彼の頓狂な議論を眞面目に取るものは無かつた位に、確乎定まつて居た。

エレンの家で毎日見ることの能きた多數の若者の中で、今では官途で著るしい成功を收めて居たポリイス・ツルベエツコイが、エレンがエルフウルトから歸つた後では、ベズツホフ家の一番親しい友であつた。エレンは、彼を何時も『我が扈從』と呼んだ、そして、彼を小兒扱ひに爲た。彼に對するエレンの笑顔は、エレンが總ての人に向けるのと同なじ笑顔であつた、が、ビエールは、時々、その笑顔を見るのが可厭なことがあつた。

ポリイスは、眼に立つ、威嚴のある、悲しさうな、恭やしい舉作で、ビエールに對するものであつた。この恭やしさの陰が又、何と無くビエールの氣に入ら無かつた。彼は、妻の爲めに起させられた心痛で三年前随分苦しめられたので、今では、第一には自分の妻の名のみの夫であるといふこと、第二には、何を疑うやうに自分を容さぬといふことで以つて、同なじ心痛

が起る氣遣は何うしても無いと安心して居る位であつた。

『いや、最早彼女は女學者に爲つたんだから、前のやうな過失は全然止めて了まつたらうよ』と、彼は、一人で云つた『女學者が優しい欲情に負けて了まつた例は一つも無い』と、彼は、一人で繰り返した、この格言は何處かで見付けたもので、彼はそれを一も二も無く信じて居た。

が、不思議にも妻の客室にポリイヌが居ることが（彼は殆んど何時も其所に居たのだが）、ビエールに肉體上の影響を與へた、それが、彼の手脚を收縮させるやうに思はれた、そして、彼の擧作の平氣と自由を、破壊した。

『實に不思議な嫌忌方だ』と、ビエールは思つた、『先には、實際彼の男が非常に好きだつたのに』

世間の眼には、ビエールは、大貴族で、傑い妻の少し旨な途方も無い所のある夫であると共に、何にも爲無い、併し誰の邪魔にもならぬ偏人で、人の好い、面白い男であつた。その間始終ビエールの心の裡では、内部的發達の複雑な骨の折れる進行が行はれて居て、それが、彼に多量の啓示を與へると同時に、多くの精神的の疑惑や喜悅に彼を導いたのであつた。

(十)

彼は、日記を續けた、これが、その時分彼がその中に書いた所のものであつた――

『十一月二十四日――八時に起き、聖書を読んだ、それから、勤務に出た（ビエールは、オリシップ・アレキセエヴィイチの忠告で、政府の調査會の一つに勤て居たのであつた）、晝飯に歸つて來、一人で食事を爲た（伯爵夫人は、私の逢ひ度くも無い多數の客を得て居た）、程好く、食ひ、飲んだ、それから、食事後に、兄弟たちに對する書類を寫した。晩は、伯爵夫人の部屋へ行つて、B……に就て可笑しい談話を爲た、そして、誰もかそれを聲高く笑つて居た時になつて始めて、さう爲てはいけ無かつたのだと氣が付いた。静かな、幸福な心持で寢床へ入つた。大いなる主よ、爾の路に於て歩み得るやう私を助け給へ――』

(一) 温和と熟考に依つて、怒ることを遁れ得るやう。

(二) 自制と嫌忌を以て、淫欲を遁れ得るやう。

(三) (一) 吾が政治上の事務、(二) 家内の世話、(三) 朋友との關係、(四) 吾が財政の處分

から、私自身を切り放さずに、世間の混雑から遁れ得るやう」

「十一月二十七日——遅く起き、怠け癖に負けて、眼が覺めてからも長いこと寢床に臥て居た。神よ、爾の路を歩み得るやう私を助け、私を強め給へ。聖書を讀んだ、が、相當な感情は無かつた。兄弟ウルツフが来た、此の世の心配のことを話した。彼は、皇帝の新計畫のことを私に話した。私はそれを批評し始めて居た、が、私の主義と、それから、眞の組合員は、自分の助力が求められる時に、國家の爲めに働くのに熱心で無ければならぬのだが、然し、助力を求められ無い時には静に傍觀すべきものだ」と云つた吾が恩人の言語とを憶ひだした。吾が吾が吾が敵だ。兄弟G・V及びOが訪ねて来た、新しい兄弟を受け入れる事に關する談話があつた。二人は、教辭者の義務を私の前に置いた。私は弱く、その役目には適は無いと感じた。それから、禮拜堂の七つの柱、七つの段々、七つの學問、七つの徳、七つの惡癖、及び聖靈の七つの賜物の談話があつた。兄弟Oは極く雄辯であつた。

晩に、その入會式があつた。建物の新しい裝飾が、光景の壯觀に多くを加へた。ポリオス・ツルベユツコイが加入を許された。私は彼を推薦した、そして、私が教辭者であつた。暗い禮拜堂の裡で彼と一緒に居る開始終、不思議な感が私を苦しめた。私は、私の心の裡で憎惡の感

情を發見したので、一生懸命にそれに打ち勝たうと骨折つた。そして、私は、惡から彼を救ひ、眞理の路へ彼を導かうと願うべきであつた、が、彼に對する悪い考想が何うしても私を離れ無かつた。組合に入る彼の目的は、唯だ吾々の會所の人々の交誼と眷顧を得るのにあるのだといふ考想が起つて来た。彼が幾度か、NやSが會所の組合員では無いか（私の答へることの能き無い問）と私に尋たといふ事實を離れても、彼は、私の觀察の及ぶ限りでは、吾が神聖な宗團に對して、崇敬を感ずることなどは能き無い人間であり、且、精神的人格の進歩を渴望するには、餘り多く、外部的人格に心を傾され、それに餘りに善く満足し過ぎて居たのだ。私は、彼を疑ふべき根據を少しも持つて居無かつた、が、彼は私には不誠實に見えた、そして、暗い禮拜堂で彼と相對して立つて居た開始終、私は、彼が私の言語に對して輕蔑むやうに笑つて居るのだといふ氣が爲續けた、で、私は、裸の胸に突き付けて居た劍で、彼の裸の胸を實際刺し通し度いと思つたのであつた。私は雄辯であることが能き無い、で、誠實に兄弟たちや、管長に私の疑念を通じることが能き無かつた。あゝ、自然の大いなる建造者よ、虚偽の迷路より出て行く眞の路を見出し得るやう私を助け給へ」

この後、日記の三頁が空白になつて居て、それから、斯う書いてあつた。

「兄弟Aを見捨てる勿と私に忠告して呉れた兄弟Vと長い有益な談話を爲た。私はその資格が無いのに、多くの啓示を得た。アドオネエといふのが、世界の創造者の名だ。エロヒムといふのが、有らゆる物の支配者の名だ。第三の名、發音することの能き無い名が「全」の意義を持つて居る。兄弟Vとの談話は、私を強め、私を勢付け、そして、徳の路に於て私を確なものとした。彼の前では、疑念の餘地は少しも無い。私は世間的科學の哀れな教理と、吾が神聖な、有らゆる物を包含する教との間の區別を瞭乎と見るのだ。人間の科學は、それを理解する爲めに有らゆる物を解剖する、そして、それを分析する爲めに有らゆる物を破壊するのだ。吾が宗派の神聖なる學問に於ては、總ての物が一つである、總ての物がその結合と生命に依つて知られるのだ。三位一體——物の三原素——は、硫黄、水銀、鹽であるのだ。硫黄は油のやうな火のやうな性質の物だ、その火のやうな性質で鹽と結合すると、その裡に欲求を起し、それに依つて、水銀を引き寄せ、それに結び付き、それを保ち、そして、それと結合して、種々な實質を造るのだ。水銀は、實質的で無い、漂ふ、精神的な要素だ——基督、聖靈、及び神だ」

「十二月三日——遅く起きた、聖書を読んだ、が、それに動かされ無かつた。それから、下へ行つて、大きい廣室の裡を彼方へ行つたり此方へ行つたりした。黙想しやうと試みた、が、その代りに、私の想像が、四年前に起つた一事件を私の前に置いた。ドロオホフが、莫斯科での決闘の後私に逢ふと、私が最早妻の居無いに拘らず、精神上の全くの平和を得つゝあることを彼は希望すると、私に云つた。その時には、私は何の返答も彼に爲無かつた。今、私は、その會見の總ての様子を憶ひだした、そして、心の裡で、最も怨の深い、意地の悪い口返答を彼に向つて爲た。私は、自分が憤怒の情に驅られて居るのに氣が付いた時に、始めて、自分を恢復し、そして、その考想を追ひ退けて、了まつた、が、未だ十分それを後悔し無かつた。

その後で、ポリイス・ズルベエツコイが來た、そして、さまざまの事件を話し始めた。彼が入つて來た刹那に、私は、彼の訪問に吃驚した、そして、彼に恐しいことを云つた。彼は云ひ返した。私はカツと爲つた、そして、不愉快で、而も無禮なことを多量彼に云つた。彼は答へ無かつた、そして、私は最早追つ付か無い時に爲つて、艱然自分を制した。あゝ、私は彼と少しも仲好く爲ては行け無いのだ。悪いのは又私自身であるのだ。私は自分を彼より上に置いて居た、而るに、私が彼に對して侮蔑を養なつて居るのに、彼の方では、私の無禮に對して寛大で

あつたのだから、私の方が彼より賢い者になつて了まつた。吾が神よ、彼の前で私自身、私自身の悪い事をもつと瞭然と見ることができ、そして、彼に取つては又有益なやうに働くことが能きやうに爲さしめ給へ。食事後、私は睡た、丁度就眠かけて居た時に、左の耳で「爾の日」と云ふ聲を亮然と聞いた。

私は、斯ういふ夢を見た——暗闇を歩いて行くと、不意に何匹もの犬に取り圍かれた、が、平気で歩いて行つた、忽ち、一匹の小さい犬が、私の腰に噛み付いて、放さぬ。私は手で絞め殺さうと爲た。で、それを振りもぎるや否や、他の、大きい奴が私を噛み始めた。私はそれを持ち上げたが、それを高く持ち上げれば上げる程、ますます大きく、ますます重くなるのであつた。と、不意に、兄弟A……がやつて来た、そして、私の腕を引いて、私を伴れて、或る建物の所へ行つた、それに入るには、狭い板の上を通らなければなら無かつた。私は、その上を歩いた、と、板が曲がつて折れた、で、私は、その時艱然捉まへることができた扉へ登り始めた。非常な骨折の後、私は、脚が此方側に垂ら下がり、身體が彼方側にあるといふ風に、身體を引き上げた。私は見廻した、と、兄弟A……が扉の上に立つて、大きい路と、庭園を私に指し示めて居るのを見た、庭園には大きい美しい建物があつた。

目が覺めた。

主よ、自然の大建造者よ、これ等の犬——私の悪い情——を、殊に、それ自身に於て總ての前者の烈しさを含有して居る最後の犬を、振り放し得るやう、私を助け給へ、そして、私の睡眠の裡に於て幻影として與へられた徳のその宮に入り得るやう私を助け給へ。

「十二月七日——私は、オーシップ・アレキセエヴィイチが私の家に坐つて居る夢を見た、私は彼に逢つたのが非常に嬉しかつた、そして、是非彼を虐待し度いと思つた。

が、夢の裡では、私は始終他の人々と饒舌り續けた、と、不意に、これは彼の嫌らひな事に違ひ無いと気が付いた、で、彼の傍へ行つて、彼を擁護しやうと思つた。が、彼に近づくや否や、私は、彼の顔が全然變り、若くなつたのを見た、そして、彼は、低い聲で、何か吾が宗派の或る教理らしいことを、云つた、が、その聲は餘り低くつて、聞き取れ無かつた。それから、私たちは皆な部室を出たやうであつた、と、奇異な事が起つた。

私たちは、坐はつて居るか、床に臥て居るか、爲て居た。アレキセエヴィイチは、私に何か話して居た。が、夢の裡で、私は、自分の敬虔な感情を彼に知らせ度くつて堪まら無かつた、で、彼の言語は聞かずに、私は、自分で、自分の内部的人格の状態と、私を神聖にして呉れる神の

恩寵を、想像し始めた。と、涙が出て来た、そして、それが彼の眼に入つたのが、嬉しかった。が、彼は、癩に觸つたらしい態で、ジロ／＼私を見た、そして、跳び上つて、私との談話を断つて了まつた。私は、耻ぢ入つた、そして、彼が云つて居た事柄は、私に關する事なのか、何うか、彼に尋いた。が、彼は返答を爲すに、親し氣な顔で私を見た、するうちに、何時の間にか、私は、自分の寢室に入つて居た、其所には、比翼寢室が立つて居た。彼はその縁に臥て居た、私は、彼を抱擁して、又臥度いといふ欲望が胸に一杯になつたやうであつた。と、夢の裡で、彼は私に尋いた。「眞實のことを云ひなさい、貴下の一歩強い誘惑は何ですか？。貴下知つて居ますか？。貴下は確にそれを知つて居る」

この間に耻ぢ入つて、私は、懶惰が私の何時もの誘惑だと答へた。彼は、疑はさうに頭を振つた。で、一層耻ぢ入つて、私は、妻と一緒に暮して居るもの、自分は夫として一緒に居るのでは無いことを、彼に話した。これに對して、彼は、私には、妻から私の抱擁を奪つて了まう権利は更に無いのだと答へた、そして抱擁するのが私の義務だといふことを、私に理解させた。が、私は、それが私に取つて耻ぢ入ることなのだと答へた、と、不意に、何も彼も、消えて了まつた。

で、私は、目が覺めた、と、私の心の裡に、聖書の言語があつた、「此生は人の光なり、光は暗に照り、暗は之を曉らざりき」

オーシップ・アレキセエヴィチの顔は、若くつて、晴やかであつた。その日、私は、吾が恩人からの手紙を受取つた、その裡で、彼は私の夫としての義務のことを書いてよこしたのであつた

『十二月九日——私は夢を見た、胸を轟かして、目が覺めた。その夢は斯うであつた、私は、莫斯科の、私の大きい喫煙室に居た、と、オーシップ・アレキセエヴィチが、客室から出て来た。私は直ぐに、新生の進行が彼の裡に始まつて居るのを見た、で、跳び出して彼を迎へた。私は、彼の顔と手に接吻した、と、その間に、彼は、——

「私の顔が異つて居るのに氣が付きませんか」と、云つた。私は、尙且、彼の手を握つて居ながら、彼を見た、が、彼の頭には髪が一本も無く、彼の顔貌が全く異つて居た。で、私は、彼に「偶然と貴下に逢つたとしても、私は貴下を見違へ無い」と、云つた、そして、さう云ひながら、「俺は眞實を云つて居るのか知ら？」と、思つた。と、不意に、死人のやうに彼が臥て

居るのを見た、それから、彼はだん／＼と自分に歸つた、そして、大きい一つ折の寫本を抱へて私と一緒に、大きい書齋へ行つた。で、私は「私がそれを書きました」と云つた。

彼は、頭を下げて、私に答へた。「私は書を開けた、と、何の頁にも奇麗な繪があつた。私は、さういふ繪が戀人との心の戀の冒險を書いたものであることを知つた。私は、透明な着物を着た、透明な身體の處女が、雲へと飛び上つて行く奇麗な繪を見た。私は、この處女が「雅歌」の姿に外ならぬことを知つたやうであつた。で、夢の裡で、私は、さういふ繪を見て居るうちに、何か悪い事を爲て居るやうな氣が爲て來た、それで居て、私は、繪から私自身を引離すことが能き無かつた。主よ、我を助け給へ。吾が神よ、若し爾の私を捨て給ふことが爾の所業であるならば、爾の御意のまゝなれ、が、若しその原因が私自身であるのならば、何を爲すべきかを私に教へ給へ。私は、爾が全く私を捨て給ふかのやうに、私の悪いことの爲めに死ぬのだ」

## (十一)

ロストオフ家の財政は、彼等が田舎で費した二年間に、少しも好く爲ら無かつた。ニコライアイ・ロストオフは、彼の決心を固く守つて、餘まり名の知れ無い聯隊で、割り合ひに

金錢を費はすに、質素に暮して居たけれども、オツラアドノエでの生活方も、その上に、ミイテンカの整理振りも、負債がド／＼増して、毎年大きく爲つて行くといふやうな風のものであつた。老伯爵に、當然のこととして見えた唯一つの方法は、仕官を爲るといふことであつた、彼は位地を求める爲めと、それから、同時に、彼の所謂感然な阿魔たちに最後の面白い事をさせてやる爲めに、彼得堡へやつて來た。

ロストオフ家が彼得堡へ着た後間も無く、ベルグがヴェーラに結婚を云ひ込んだ、そして、それが承諾された。

莫斯科でこそ、ロストオフ家は——彼等自身はそれを知らず、又、何ういふ社會に入つて居やうか構は無かつたが——極く上流の社會に入つて居たけれども、彼得堡では、その位地は不確な極まら無いものであつた。彼得堡では、彼等は地方人であつた、で、莫斯科では、ロストオフ家が何ういふ社會に入つて居るかを尋ねずに、ロストオフ家で馳走に爲つたその人々にさへ訪問され無かつた。

ロストオフ家は、莫斯科でやつて居たのと丁度同なじに、彼得堡でも始終客を爲て居た。で、彼等の晚餐には、最もさまざまの種類の人々が集まつて居た——田舎での隣人、娘たちを



伴れた年取つた餘り生計の好く無い田舎紳士たち、年取つた宮女、マダム・ベエロンスキイ、ピエール・ベズウホフ、それから、彼得堡で役に就て居た、田舎の驛長の息子など。彼得堡のロストオフ家に始終出入りつた人々のうちで、直きに、家族の最も親しい友達になつたのは、ポリイストと、老伯爵に街であつて、家へ引摺り込まれたピエールと、それから、ロストオフ家で終日費し、結婚を云ひ込まうと思ふ若い男が拂ひ得る有らゆる注意を、若い伯爵嬢の一番年長のグエーラに向つて、拂つて居たベルグであつた。

ベルグが、アウステルリッツで負傷した右の手や、少しもそれに及ばぬのに左に持つて居た劔を誰彼無しに見せるのは、無益で無かつた。彼が餘まり一生懸命に、且如何にも傑さうな顔容で、その物語を爲るものだから、誰も彼も、彼の勳を、有益なもので、價値のあるのだと信じるやうになつた、そして、彼はアウステルリッツに對して勳章を二つ貰つた。

フィンランド戦争でも、又彼は名を顯はすことに成功した。彼は、總司令官の直ぐ傍の副官を殺した榴弾の破片を拾ひあげた、そして、それを、自分の司令官の所へ持つて行つた。で、再、アウステルリッツの後でのやうに、彼は、誰にも彼にもこの事件を長々と倦ます携ます話したので、到頭人々が、これも可なりな勳であつたと信じるやうになつた、そして、ベルグはフィン

ランド戦争に對しても亦勳章を二つ貰つた。千八百〇九年には、彼は勳章を幾つも胸に懸けた近衛の大尉であつた、そして、彼得堡で、非常に都合の好い役に就いて居た。

ベルグの價値の話が出るといふと、ニヤリとする幾人かの懷疑者が有るには有つたが、ベルグが、任務を盡くすことの正確な、そして、上官の間には非常に評判の宜い勇敢な將校であると共に、彼の前途に華々しい立身を控へた、而も、社交界に於て確な位地を占めた方正な若者であることは、拒め無かつた。

四年前、莫斯科の劇場の平土間で、獨逸人の同僚に出會うと、ベルグは、グエーラ・ロストオフを彼に指し示めた、そして、獨逸語で『あの娘は僕の女房になる』と云つた。その時から、彼はグエーラと結婚しやうと決心したのであつた。今、彼得堡で、ロストオフ家の位地と自分の位地とを十分に考へてから、彼は、時が來たと斷じた、そして、申し込みを爲た。

ベルグの申し込みは、最初は、彼に取つては少しも嬉しく無い躊躇を以つて、受取られた。何だか知れ無いリポニヤの紳士の息子が伯爵ロストオフ家の令嬢に結婚を申し込むなど、いふのは、最初のうちは餘程異様な考想だと思はれた。が、ベルグの主な特質は、ロストオフ家の人々が、ベルグ自身で、それが宜い事、而も極く宜い事だと彼れまで固く信じて居る以上は、

宜い事に違ひ無いのだと、知らず／＼考へるやうになつた程それ程、率直な氣の好い自我主義であつた。その上に、ロストオフ家は、財政に於て甚く不如意であつた、これは、結婚申込者が知ら無いでは居られ無いことであつた、そして、主な考量になつたことは、ヴェーラは、最早二十四歳で、これまで何處へも見せに出したのであつたが、確に好い縹緞の利巧な娘なのに、誰も申し込みを爲無かつたといふ事實であつた。申し込みは受け納れられた。

「何うだい」と、彼は——唯だ誰でも朋友を持つて居るのだと知つて居るばかりで——自分の朋友と呼んで居た同僚に、ベルグは云つて、「何うだい、僕は、何も彼も考量したんだせ。僕は善く考へて見た上で、少しでも面白く無い所があれば、何うしたつて結婚し無いんだせ。けれども、今は、僕の両親も、可なりに物を充てがつてあるんだ、僕は、オストゼー地方で其所の借地権を得て遣つたんだ、で、僕は、僕の月給と、女房の財産と、僕の注意深い習慣で、暮して行けるんだ。吾々は巧くやつて行ける。僕は、金錢の爲めに結婚するんぢやア無いよ、それは紳士的で無いからね、けれども、妻は妻の分を持つて來、夫は夫の分を持つて來るのが本當なんだ。僕は官途の位地を持ち、妻は、良い縁類と、少しの財産を持つてゐるんだ。さういふものが、今日では、可なり役に立つよ、さうだらう、君？。所で、主な考へ所は、彼女が綺麗

な尊敬すべき娘であること、彼女が僕を愛してることなんだ……」

ベルグは顔を赤くして、微笑んだ。

「で、僕は、彼女がチャンとした極く好い性格を持つてゐるんで、彼女を愛してゐるんだ。彼女の妹は、所が——同なじ家族のものでありながら——全然異つて居る、妹の性格は不愉快だ、姉のやうな才智が寸毫も無いね、が、何か知ら、ねえ、君……僕は好かん……けれども、僕の約婚者は……。是非吾々を訪ねて來て呉れ給へ、來て呉れ給へ……」と、ベルグは、言語を續けて、「食事に」と、云ひ掛けたが、考へ直して、「茶に」と、云つた、そして、舌を突き出して、彼に取つては幸福の有らゆる夢を具體にした烟草の煙の小さい圈を吹いた。

ベルグの申し込で両親の心に起された最初の躊躇の感情は、さういふ機會には何時もある家内の祝宴會や喜悅で續がれた、けれども、喜悅は表面だけで、眞實のものでは無かつた。

何と無く當惑して、耻ぢた態様が、この結婚に對する親族の感情の裡に見出された。彼等がヴェーラを餘まり可愛がらずに居て、今自分たちの手から餘まり早くオインレと捨て過ぎるのが、彼等の良心で苦しかつたかのやうであつた。老伯爵が、誰よりも一番、その點を氣に爲て居た。彼は、何が彼をして左様感じさせるのか、それを云ふことは大抵能き無かつたらう、け

れども、彼の財政上の困難が、その底にあつたのだ。彼は、自分の物が何れだけあるのか、自分の負債が何れだけあるのか、自分が何れだけヴェーラに嫁資として與へ得べき位地に居るのか、其様なことは寸毫も知ら無かつた。何の娘も生れた時には、皆それ〴〵三百人の耕奴の附いた領地を、持参分として充てられて居た。が、さういふ領地の一つは今賣られてしまひ、今一つは抵當になつて居て、その利子が、それを賣らなければならぬ程多額溜まつて居た、だから、その領地を遣ふことは不可能であつた。と云つて、金銭も無かつた。

ベルグは最早一月の餘、約婚であつた、そして、結婚式を擧げると極めてある日までは最早一週間限りであつた、が、伯爵は、未だ持参の問題に就いて、決定することができ無かつた、で、彼は妻にその話を爲無かつた。伯爵は或る時は、リヤザンの領地をヴェーラに遣らうと思ひ、次ぎには森を賣らうとも思ひ、それから、又約束手形で金銭を借りやうとも思つた。

結婚式の二三日前、ベルグは朝早く伯爵の書齋へ行つた、そして、心持の好い笑顔で、何れだけの財産がヴェーラに附けられるか知らして呉れと、丁寧にも頼んだ。伯爵は、この長い間豫期されて居た尋問の爲めに非常に狼狽して、考へずに、自分の頭へ来た最初の事を云つた位であつた。

「私は、君のさういふ事務的なところが好きだ、私は好きだ、十分君の満足するやう爲るよ……」

で、ベルグの肩を叩いて、彼は、談話をそれ限り断つてしまふ積りで、起ちあがつた。が、ベルグは、ニヤ／＼微笑みながら、若し、何れだけヴェーラに附けて呉れるか確に分からず、そして、責めて持参金の一部でも前に受け取ることができなければ、已を得ず、この縁談は止めて了まは無ければならぬ、と云つた。

「と申しますのは、貴下お考へください、伯爵、若し私が妻の生計に對する確實な保證無しに結婚するやうなことを爲れば、私の所業は悪漢ですからなア……」

談話は、伯爵が、大氣であつて、その上の要求を避け度いといふ心配で、八萬留の約束手形をベルグに遣らうと云つたので、終局を告げた。ベルグは優しく微笑んで、伯爵の肩に接吻して、そして、非常に有り難いが、然し、現金で三萬だけ受け取らなければ、新生活の準備が能き無いのだと云つた。「責めて、二萬だけ、伯爵」と、彼は云ひ添へた、「さうすれば、手形は六萬で宜いんです」

「左様、左様、宜しいとも」と、伯爵は急いで云つた。「まあ、君、二萬と、手形で八萬あげ

ることにするから、それで不承して呉れ給へ。それは宜しい、さア、接吻し給へ」

## (十二)

ナタアシャは十六歳であつた、そして、それは、千八百〇九年、即ち、四年前に、ナタアシャがポリイスに接吻した後で、ポリイスと一緒に指を折つて勘定したその年であつた。それ以來、ナタアシャは、一度もポリイスを見無かつた。ポリイスの話が出るといふと、ポリイスと自分との間に有つた總ての事が、話だけの價値の無い、そして、長く忘れられて了まつたやうな、小兒らしい愚劣しいことであるのは、最早極まり切つて居るといふ風に、それを取り扱かつて、ソオニヤや母親の前で、その話を全く自由に話すのであつた。が、ナタアシャの心の最も秘密な奥では、ポリイスとの自分の約婚は、實際唯の冗談であつたのか、或は、嚴肅な動かし難い約束であつたのかといふ疑問が、ナタアシャを苦しめた。

軍隊に入る爲めに、千八百〇五年に莫斯科を出て以來、ポリイスは一度もロストオフ家の人に逢は無かつた。幾度も、彼は莫斯科へ行つた、そして、旅行では、オツラアドノエから遠く無い所を通つた、が、彼は、一度もロストオフ家へ行か無かつた。

ポリイスは自分に逢ひ度く思は無いのだと、ナタアシャには時々思はれた、そして、その推量は、自分の家の長上がポリイスの話を爲るその調子で、確められた。

「古い朋友は、今日日は、直きに忘れられる」と、伯爵夫人は、ポリイスの話が出た後では、云ひ云ひした。

アンナ・ミハアロヅナは、此頃では、ロストオフ家へ餘り度々來無くなつて居た。彼等に對するミハアロヅナの態様にも、著るしい威嚴があつた、そして、ミハアロヅナは、何に付け彼に付け、自分の息子の才能と、華々しい出世を、有り難がつて、熱心に話すのであつた。ロストオフ家が彼得堡に着くといふと、ポリイスは訪ねて來た。

彼がロストオフ家の人々に逢ひに來たのは感慨無しでは無かつた。ナタアシャに關する追憶はポリイスの最も詩的な記憶であつた。が、それと同時に、彼は、ナタアシャと自分との間の小兒らしい誓約は、ナタアシャに取つても、自分に取つても、決して動かし難い力を有つて居べきものではないといふことを、ナタアシャや、その親族に感じさせやうと固く決心して、ロストオフ家を訪問しに來たのであつた。彼は、伯爵夫人ベズウホフと別懇なお陰で、社交界で華々しい地位を有ち、さる傑い人の信用を全然得て居たので、その保護に因つて、官途で華々

しい地位を有つて居た、で、彼は彼得堡の最も金持の娘の一人と結婚する計畫、極く容易に實現せられさうな計畫、を立て始めて居た。

ポリイスがロストオフ家の客室へ入つて行つた時に、ナタアシャは自分の部室に居た。彼が來たと聞いて、ナタアシャは、親いといふより以上の微笑みで晴々とした赤くなつた顔で、殆ど駆けるやうに爲て、客室へ入つて來た。

ポリイスは、ナタアシャは、彼が四年前に知つて居た通りの、短かい小兒服の、巻髪の下からシロく見る黒い眼の、小兒らしく、烈しく忍び笑を爲る小さい娘だと思つて居た、で、それとは全然異つたナタアシャが入つて來るといふと、彼は瞠若として、彼の顔が驚愕と感嘆とを表はした。彼の顔容がナタアシャを喜ばした。

「何うです、貴下の悪戯な小さい遊友達がこれなんですが？」と、伯爵夫人が云つた。ポリイスはナタアシャの手に接吻した、そして、さう變つて居るのに驚いたと云つた。

「いや、實に奇麗に爲りましたね」

「まあ、さうでせう」が、ナタアシャの笑つて居る眼の裡にあつた返答であつた。

「父上様は年取つて見えて？」と、ナタアシャが尋いた。

ナタアシャは、ポリイスと母親との間の談話には寸毫も加はらずに、靜に坐つて居た。黙まつて、ツクトくと、ナタアシャは、自分の小兒の時分の戀人であつたその若者を吟味した。彼は、その側目も振らぬ、親し氣な凝視の爲めに物苦しく感じた、そして、一二度、ナタアシャを一寸々々見た。

制服、拍車、襟飾、ポリイスの髪の梳き方——それが悉皆流行通りで、キチンと爲て居た。それをナタアシャは直ぐ認めた。彼は、伯爵夫人の側の低椅子に少し横さまに坐つて、左の手に箱めた非常に清潔な、ピッタリ適つた手袋を、右の手で叩いて居た。彼は、特異な、上品な唇の閉ぢ方を爲て、彼得堡の最高の社交界の區分の物語を爲た、それから、微弱な皮肉な調子で、往時の莫斯科時分のことや、往時の莫斯科の知人たちのことを話した。ナタアシャの感じたのでは、彼は、不用意では無いらしく、最高の貴族の幾人かの名を擧げ、自分が出席した大使の舞踏會や、N・NとかS・Sからの招待のことを、云つた。

ナタアシャは、その間始終、何にも言はずに坐つて、眉の下からポリイスを見上げて居た。ナタアシャの眼は、だんく強くポリイスを不安に爲且モヂくさせた。彼は、度々ナタアシャを見返るやうに爲つた、そして、言語を幾度も斷つた。十分とは居ずに、彼は起つて、そして、

暇を告げた。尙且、同なじ好奇心の強い、挑戦するやうな、少し皮肉な眼が、彼を見て居た。その最初の訪問後、ポリイスは、ナタアシヤは往時と同なじやうに自分には好ましく見えるのだと一人で言つた、が、その娘——財産の無い娘——と結婚するのは、自分の前途の破滅であらうし、又、結婚する積りが少しも無しに、往時の關係を復活させるのは、卑劣なことであるのだから、彼は自分の感情に負けてはなら無いと思つた。ポリイスはナタアシヤに出會ふことを避けやうと決心した、が、その決心に拘らず、彼は二三日後に、又来た、それから、度々来るやうに爲つた、終日ロストオフ家に居るやうに爲り始めた。彼は、ナタアシヤと率直な打明け話を爲、往時のことは何も彼も忘れ無ければなら無いことや、何うしても……ナタアシヤは自分の妻になることの能き無いことや、彼は少しも資産の無いことや、ロストオフ家の人々はナタアシヤが彼と結婚することを決して承諾し無いといふことを、ナタアシヤに話すのが、彼に取つて切要だといふ氣が爲た。が、彼は、何時もさう爲損なつた、そして、その問題に近寄るのが極まりが悪くつて爲方が無かつた。

日毎にだん／＼捲き込まれて行つた。ナタアシヤは——母親やソオニヤの判断では——往時と同なじに、ポリイスを戀して居たやうに見えた。ナタアシヤは、彼に自分の好きな歌を諷つて聞かし、自分の詩文帖を彼に見せ、彼にその中へ書かせ、彼をして、過去のことは一切言はせぬやうに爲て、ナタアシヤ自身は何れ程現在を嬉しく思つて居るかを彼に感じさせた、そして、毎日彼は、自分が云はうと思ふことも云はず、自分が何ういふことを爲て居るか知らず、何故来るのか、それが何ういふ結末になるか、それも知らずに、渦に卷かれたやうに爲つて歸つて行くのであつた。ポリイスは、エレンを訪ねることを止めた、エレンから毎日怨みの手紙を受けた、けれども、尙且、ロストオフ家で、引續いて、終日遊んで居た。

## (十三)

或る晩、老伯爵夫人は、寢室の短上衣で、附髪無しで、白い木綿の夜帽の下から、髪の毛の哀れな唯だ一束を覗き出させたまゝで、床敷物の上に平れ伏して、溜息したり、呻いたりして、晩の祈禱を繰り返して居た。部室の戸が軋つた、と、又寢室の短上衣を着たナタアシヤが、裸脚で、上靴を穿て、捲髪紙で髪を包んで、駆け込んで来た。

伯爵夫人は見返つて、顔を顰めた。夫人は、一番終ひの祈禱を繰り返して居た。「この臥椅子が私の屍架になるやうなことがございますでせうか？」伯爵夫人の敬虔な氣分が散らされた。

顔を赤くして、一生懸命になつて居たナターシャは、母親が祈禱を爲て居るのを見ると自分の急いだ舉作を不意に止めた。ナターシャは、半ば坐つて、我知らず、自分に向つて舌を出した。母親が未だ祈つて居るのを見て、ナターシャは、足を爪立て、寢臺へ行つた、そして、速く小さい片方の足を今一つの足へ擦り附けて、上靴を脱ぎ、伯爵夫人が自分の祈禱の中で自分の屍架になりはしまいかと恐れたその寢椅子へ跳びあがつた。その寢椅子は、上ほどだんたく小くなつて居る五つの枕のある、高い羽毛の寢臺であつた。ナターシャは跳び込み、羽毛床の裡へ潜ぐり、側の方へ反側を爲、蒲團の下へ潜ぐり始め、身體を縮こめ、顎の方へと膝を曲げ、脚を蹴り、蒲團の下に顔を隠したり、顔を出して母親を覗いたり爲ながら、微弱な、聞える忍び笑を漏した。

伯爵夫人は祈禱を終つた、で、嚴ぶかしい顔をして寢臺へ近寄つて居た、が、ナターシャが自分に向つて、居無いく／＼バアをやつて居るのを見て、伯爵夫人は、人の善い、弱い笑顔を見せた。

『これ、これ、これ』と、母親は云つた。

『母上様、物を云つて宜い、さう？』と、ナターシャは云つた。『さア、顎の下よ、一つ、今

一つ、これで宜いわ』で、ナターシャは、母親の頸を攫み、顎の上の自分の好きな所に接吻した。母親に對するナターシャの舉作には、表面は如何にも手暴な態があつた、が、ナターシャは何ういふ風に自分の腕で母親を捉まへても、何時も、母親が痛がるとか、心持が悪いとか、怒るとかいふことの無いやうな案配にする、生來の掛引と、事を爲る巧妙とを有つて居た。

『もし、今夜は何ですな？』と、母親は、枕に頭を落ち付けて云つて、そして、夜具の下で母親の側で臥やうと思つて、最早二度反側を爲たナターシャが腕を出して、眞面目な顔になるのを待つて居た。

夜、伯爵が倶楽部から歸つて来る前に、斯ういふ風にナターシャが母親の所へ來るのが、ナターシャに取つても、母親に取つても、甚く嬉しいことなのであつた。

『今夜は何ですな？』私母上様にお話し爲度い事があるのよ……』と、ナターシャは、母親の唇を手で閉いだ。

『ポリイスの事よ……眞個よ』と、ナターシャは、眞面目に云つた、『私の來たのは、その事でのよ。云は無いで居てね、私知つてるんですから。いゝえ、云つてください』。ナターシャは手を放した。『云つてください、母上様。彼の人は好か無くつて、え？』

「ナタアシャ、貴女は十六ですよ。貴女の年齢に私は結婚しましたよ。貴女はポリイスが好いと云ふんですね。彼の人は眞個に好い人です、私は自分の息子のやうに彼の人を愛して居ます。けれども、貴女は何う爲やうと云ふんですの？……何う思つてお居でなにかい？。貴女は、彼の人を全然有頂天に爲て了ましましたね、確に左様でせう……」

さう云ひながら、伯爵夫人は、娘を見返つた。ナタアシャは、自分の前を眞直に、凝平と、寢臺の隅に彫つてある桃花心木の獅身女面怪の一つを見て居たので、伯爵夫人には娘の横顔しか見え無かつた。ナタアシャの顔は、その非常に本氣な集中した表情で、伯爵夫人を感動させた。

ナタアシャは、聞入りながら、いろ／＼と考へて居た。

「で、それから、何うなのよ？」と、ナタアシャが云つた。

「貴女は、全然彼の人を有頂天にして了まつたんですね、さうしたら何うなると云ふんですね？。貴女は彼の人を何う爲やうと云ふんです？。彼の人と結婚することの能き無いことは貴女も知つてお居でちやありませんか？」

「何故なの？」と、ナタアシャは、身體の位地を寸毫も變へ無いで居て、云つた。

「それはね、彼の人は未だ若過ぎるし、彼の人は貧乏だし、親類だしするからなんです……それに、貴女は自分でも彼の人をさう深く思ひ込んで居無いちやありませんか？」

「何うして、それが、母上様に分かるのよ？」

「私は知つて居ます。それは不可せんよ、私の可愛い子」

「だけど、私がさう爲度かつたら……」

「愚劣なことを云ふものではありません」

「でも、私がさう爲度かつたら……」

「ナタアシャ、私は眞面目なんですよ……」

ナタアシャは、母親に言語を終らせ無かつた、伯爵夫人の大きい手を自分の方へ引き寄せ、表側に接吻し、それから、掌に接吻し、それから又、それを引つくり返して、指の上節に接吻し、節と節の間に接吻し、此度は又、節に接吻して、「一月、二月、三月、四月、五月」と、叫いた。

「さ、云つてください、母上様、何故黙まつてらつしやるの？。云つてください」と、ナタアシャは、母親を見返つて、云つた、母親は、娘を優しく凝視して居て、そして、さう凝視して居



るうちに、自分が云ふ積りであつた事柄を悉皆忘れて了まつたやうらしい態であつた。

「これでは不可ませんよ、お前。貴女たちの小兒らしい感情が、誰にも彼にも解かるといふものではありませんよ、ですから、彼の人貴女と彼れほど親密になつて居るのを見たら、家へ来る若い人たちは、貴女を異様に思ひますよ、それに、もつと大變なことには、さういふことが、彼の人を何の益も無く不幸に爲て了まうんですよ。彼人は、多分最早、自分に丁度宜いお嫁さん、何處かの金持の娘を見付たんですよ、で、今は、半狂氣になつて居るんですから」

「半狂氣つて？」と、ナタアシャが繰り返した。

「私は自分に有つたことを話させよう。私は従兄がりました……」

「私知つてゐるわ——キリイラ・マトウエーチよ、だけど、彼人は老人ぢやア無いの」

「往時から老人では無かつたわね。けども、斯う爲ませう、ナタアシャ、私がポリイスに話させようよ。さう度々来ては不可……」

「來度いと思へば、来て何故不可いの？」

「別に善いことになら無いのが、私には分つて居るんですからさ」

「何うして分かるの？。いゝえ、母上様、彼の人に話ちやア厭よ。何て愚劣なことだらう」

と、ナタアシャは、自分の財産を盗まれた人の調子で、云つた。「では、私彼の人と結婚し無いわ、だから、彼の人面白がり、私も面白いだから、彼の人を來させといてくださいなね」

ナタアシャは、微笑みながら、母親を見た。「結婚は爲無いわ、だけど——唯だ一寸……」と、ナタアシャは、繰り返した。

「唯だ一寸とは、何う一寸なのかい、お前」

「え、唯だ一寸よ。私何うしても彼の人と結婚し無いで居無きやアなら無いことは分かつてよ、だけど……唯だ一寸」

「唯だ一寸、唯だ一寸」と、伯爵夫人は繰り返した、そして、身體ぢうを震はして、唐突の、人の好い、老人の哄笑やうを爲た。

「笑は無いでよ、止して頂戴よ」と、ナタアシャは叫んだ。「寢臺ぢうが揺ぶれてよ、母上様は眞個に私と同じね、私と丁度同なじの笑者ね……お止しなさいよ……」

ナタアシャは、伯爵夫人の兩手を引つ攫んだ、六月と云つて、小指の節に接吻し、それから、尙續けて——七月、八月と——他の手に接吻した。「母上様、彼人は私を非常に戀して居るでせうか？ 貴女何う思つて？。貴女人に彼様なに戀されたことがあつて？。彼人は眞個に好いの

よ、それはく好いのよ。唯だ少し好きで無い所があるのよ——彼の人は、何だか、壁の時計のやうに、狭いのよ……母上様、解つて？……狭いんでせう、ねえ、灰色で、薄い色よ……」

「何だつてまア愚劣なことばかし云ふ子だらうねえ」と、伯爵夫人が云つた。

ナタアシヤは續けた。

「母上様、眞實に解から無いの？。ニコオレンカには解かるんだけど……それから、ベズウホフ——彼の人は、青くつて、濃い青で、赤いの、彼の人は四角だわ」

「貴女は、彼の人も巫山戯てるんですね」と、伯爵夫人が、笑ひながら、云つた。

「いゝえ、彼の人は共済組合員よ、私聞いてよ。彼の人は、面白い人、濃い青で、赤で、私何う云つたら母上様に解かるんだらう……」

「小さい伯爵夫人」と、二人は戸越しに伯爵の聲を聞いた。「未だ睡無いかい？」。ナタアシヤは跳びあがつた、上靴を履んで、跣足で自分の部室へと駆け出した。長い間、ナタアシヤは睡られ無かつた。誰もが、自分に解かつて居ることや、自分の心の裡にあることを、悉皆解すること能き無いことを、シクシクと考へたのであつた。

「ソオニヤは？」と、ナタアシヤは、髪の大い圓塊を持つて、仔猫のやうに圓くなつて睡

て居る朋友を見ながら、怪しんだ。「いゝえ、何うしてこの女が。この女はチャンとした女ですもの。ニコオレンカと戀を爲て、それから上何にも知らうとは爲無いんだもの。母上様、母上様だつて解から無いんだもの、私不思議に惻巧なのね、眞個に……彼女は美しい」と、ナタアシヤは、自分のことを三人稱で云つて、そして、自分のことをさう云つて居るのは、誰か極く惻巧な、人間の中の一、一番惻巧な、一番好い人なのだと想像しながら、言語を續け……「彼女には、何も彼も、有らゆるものが備はつて居る」と、その男が續けて、「非常に惻巧で、好い、それから、美しい、非常に美しい、上品な娘だ。泳げも爲るし、馬も上手に乗るし、それに聲だ——驚くべき聲だ、と云つて宜からう」

ナタアシヤは、チエルビニの歌劇の中の自分の大好きな樂節を小聲で謡つて、寢床へ跳び込み、直きに睡て了まうといふ考で、嬉しがつて笑ひ、蠟燭を消して呉れと、ヅウニヤシヤに聲を掛けた、そして、ヅウニヤシヤが部室を出る前に、ナタアシヤは、最早、有らゆる物が、現實と同一じやうな、容易で、美しい、そして、何も彼も此の世とは異つて居るので、一層好い、この世よりは尙一層幸福な夢の世へと行つて居た。

次の日、伯爵夫人はポリイスを喚んで来て、彼に話を爲た、そして、その日から、彼はロス  
トオフ家を訪ねることを止めて了つた。

## (十四)

十二月の三十一日、千八百十年の新年を迎へる除夜に、舞踏會が、カザリンの宮中の明星  
であつた傑い人の家で催された。皇帝と外交團が、この舞踏會には臨席する筈であつた。

英吉利河岸の、其大身の人の、善く知られた邸宅は、無数の燈火で、照された。巡査が赤い粗羅  
紗を敷いた、火の明るい入口に立つて居た、そして、巡査ばかりで無く、警務長や、十二人ほどの  
警部が玄關に居た。幾つもの馬車が、間斷無く駆け歸り、新なのが、赤い法被を着たのや、羽毛  
着の帽子を着た、馬丁が附いて、間斷無く駆け込んで来るのであつた。馬車からは、制服を着た、  
勳章や、綬を着けた人々が出て來、又、八絲や、貂の皮を着た貴婦人たちが、バタリと下される馬  
車の踏段へそろ／＼と踏出し、それから、入口の粗羅紗の上を、急いで音無く、歩くのであつた。  
新な馬車が乗り附けて來ると、殆どその度毎に、呟語が群集の裡を走つて、幾つもの帽子が  
脱られた。「皇帝かね。いや、大臣……公爵……大使……君にやア羽毛が見え無いかい？」

といふのが、群集の裡で聞えた。

中で一番善い服装を爲て居た一人の男が、誰をも知つて居るやうであつた、そして、その時  
代の最も名高い人々を、残らず名を擧げて、指し示めた。

客の三分の一は、最早、この舞踏會に到着して居た、それなのに、それに出る筈であつたロ  
ストオフ家の人々は、未だ大急ぎで支度を爲て居た。

ロストオフ家では、その舞踏會に對しては、さまざまの議論や支度があつた、その外、招待  
が來無からうとか、衣服が間に合ふまいとか、差支の無いやうに萬事が整ふまいとか、いふや  
うな多くの危慮があつた。

ロストオフ家の人々は、彼得堡の上流社交界で、地方人のロストオフ家の人々の案内者を爲  
て居た、伯爵夫人の朋友で、親類の、往時の宮女の、瘡せた黄色い女の、マリイヤ・イグナアティ  
エヅナ・ベエロンスキイに伴れて行つて貰う筈であつた。

ロストオフ家の人々は、十時に、タヅリチエスキイ園へ馬車で行つて、その宮女を誘ふこと  
になつて居た。それなのに、最早十時に五分前であつた、そして、若い婦人たちは未だ衣服を  
着て居無かつた。

ナタアシャは、生れてから初めての大きな舞踏會へ行くのであつた。ナタアシャは、その朝八時に起きた、そして、いら／＼としたソワ／＼しさと、活動とで、終日費やして了まつた。ナタアシャの全精力が、朝以來、自分や、母親や、ソオニヤに、能きるだけ善く衣服着せやうといふ一つの目的へと向けられて居た。ソオニヤと母親は、全然身體をナタアシャの手に委ねて居た。伯爵夫人は濃い赤の天鵝絨の衣服を着る筈であり、二人の娘は、桃色絹の袴の上に、白い絹網附の衣服で、胸に薔薇飾を着ける筈であつた。髪は希臘結びにすることに爲つて居た。必要なことは悉皆支度が出来た。足、腕、頸、耳が、舞踏會の支度として、特別な入念で、洗はれ、香料を附けられ、裝粉を撒られた。目編みの絹の靴足袋と、組紐の附いた白八絲の靴が穿かれた。髪も殆ど結びあがつて居た。ソオニヤは衣服を着て了まつた、伯爵夫人もさうであつた、が、他人のことにばかり氣を付けて居たナタアシャは後れて居た。ナタアシャは、瘡せた肩の上へ化粧着を引つ掛けて、鏡の前に未だ坐つて居た。最早衣服を着て了まつたソオニヤは、部室の真中に立つて、絹ヘキユウといふ音を爲せて留針を刺し込まうとして、小さい指に怪我を爲ながら、最後の組紐を結び付けやうと骨折つて居た。

「さうぢや無くつてよ、ソオニヤ、さうぢや無くつてよ」と、ナタアシャは、頭を振り向け、髪を結つて居た女中が直ぐ手を放さ無かつたので、兩手で自分の頭を攫みながら、云つた。「組紐がさう爲るんぢや無いのよ、おいでなさいよ」

ソオニヤは踞んだ。ナタアシャは、自分の思ひ通りに、組紐を留針で留めた。

「まあ、お嬢様、さう爲すつちやア不可ませんよ」と、女中は、ナタアシャの髪をおさへて居ながら、云つた。

「あゝ、さうだわね。後で。ほうら、それで宜いのよ、ソオニヤ」

「支度は最早直きですか？」と、二人は伯爵夫人の聲を聞いた。「今一分で十時ですよ」

「唯今、唯今……貴女は宜いんですか、母上様？」

「帽子を冠るばかり」

「私の行か無いうちに、爲ては不可なくつてよ」と、ナタアシャが叫んだ、「貴女には分らない無くつてよ」

「けども、最早十時なんですよ」

十時半に舞踏會に行くことに爲つて居た、が、ナタアシャは未だこれから衣服を着るのであつたし、それに、未だ、タヴリチエスキ園へ寄ら無ければなら無かつたのだ。

髪が出来るといふと、ナタアシヤは、母親の化粧服と、下から舞踏靴の見える短い袴のまゝ、で、ソオニヤの側へ駈けて行つて、ソオニヤの身体を上から下まで見渡し、それから、母親の所へ駈けて行つた。頭を廻して、母親の帽子を留針で留め、母親の白髪に接吻して、自分の袴を詰めて居た女中たちの所へ駈け戻つた。

有らゆる注意が、今、長過ぎたナタアシヤの袴の上に集中された。二人の女中が、大急ぎで糸を噛み切りながら、縁を縫ひ上げて居た。第三の女中が、齒と唇の間に留針を持つて、伯爵夫人からソオニヤへと駈けて居た、第四の者が、腕で、絹網の衣服全體を持ち上げて居た。

『マヅルウシカ、早く、お前』

『その指貫をくださいまし、お嬢様』

『早く爲んかい？』と、入らうとして、戸の外で、伯爵が云つた。『此所にお前たちの香料があるぞ。マダム・ベエロンスキイが待ち草臥て居るぢやろう』

『出来ました、お嬢様』と、女中が、二本指で、詰めた絹網附の袴を持ちあげ、それから何かを吹き飛ばし、自分の手に持つて居る物の透明と清淨さを自分が賞でて居るのを見せやうとそれを一つ揺りながら、云つた。

ナタアシヤは、衣服を着始めた。

『直ぐよ、直ぐよ、入つちやア嫌よ、父上様』と、ナタアシヤは、顔を全部隠して居る絹網附きの衣服の下から、戸口の父親に云つた。ソオニヤが戸をバタンと閉めた。直ぐその後で、伯爵は入らせられた。彼は青いフロツクコオトで、靴足袋を出し、舞踏靴を穿いて、香水と香油を塗つて居た。

『あら、父上様、眞個に好いわね、奇麗だわ』と、ナタアシヤは、部室の眞中に立つて、絹網の皺を延しながら、云つた。

『何卒、お嬢様、何卒……』と、女中が、袴を引き上げながら、口の一方の隅から他の隅へと舌で留針を動かして、云つた。

『何うしたつても』と、ソオニヤは、ナタアシヤの袴を見ながら、絶望した聲で云つて、『何うしたつても——未だ長過ぎるわ』

ナタアシヤは、照身鏡で自分を見る爲めに、少し側へ歩いた。袴は長過ぎた。

『いえ、お嬢様、寸毫も長過ぎは致しませんわ』と、マヅルウシカは、自分の若主人の後から床を蹠つて行きながら、云つた。

「では、お長いんなら、詰めますでせう、直ぐ詰めますでせう」と、テキパキした性質のツウニヤシヤが云つた。で、自分の胸の手中の裡から針を出して、床の上で再縫ひだした。その途端に、伯爵夫人は帽子を冠ふり、天鵝絨の長上衣を着て、耻かしさうに、徐かな歩き方で、部屋へ入つて来た。

「やア。俺の美人」と、伯爵は叫んだ。「これは、此所の誰よりも美しくぞ」……。彼は伯爵夫人を抱擁しやうと爲た、真赤になつて、伯爵夫人は、衣服を皺にされるのを避けやうと、後退さつた。

「母上様、帽子がもつと横で無い」と、ナタアシヤが云つた。「今一遍留め直してあげるわ」で、ナタアシヤは前へ跳び出した。袴を持ち上げて居た女中たちは、ナタアシヤの不意の動きに向つて用意して居無かつたので、絹網の断片を裂いて了まつた。

「あら、大變。何う爲たんでせう？。私が悪いんではございませんよ……」

「宜いわよ、私が縫うから、分かりは無いわ」と、ヅウニヤシヤが云つた。

「私の美しい方、私の女王さま」と、年取つた乳母が、戸口から入つて来ながら、云つた。「それから、ソオニウシカも、あゝ、美しいお方たち……」

十時十五分過ぎに、衆皆到頭馬車の裡に坐つて、出て行つた。が、未だタヅリチエスキイ園へと馬車を驅ら無ければなら無かつた。

マダム・ベエロンスキイは、支度を爲て、待つて居た。年齢と醜さに拘らず、この婦人の方も、ロストオフ家の人々と丁度同なじの行き方が行なはれて居た、が、其様なことは、ベエロンスキイに取つては、日常の事柄であつたので、さうアタフタしては無かつた。年取つた、見栄の無い身體も、又、洗はれ、香料を附けられ、装粉を掛けられて居た、ベエロンスキイは、耳の後ろを非常に入念に洗つた、そして、宮女の徽章で飾つた黄色い長上衣で、客室へ來ると、ベエロンスキイの年取つた女中が、丁度ロストオフ家の乳母と同なじやうに、自分の女主人の服装を熱心に賞めたのであつた。

マダム・ベエロンスキイは、ロストオフ家の人々の服装を賞めた、そして、ロストオフ家の人はベエロンスキイの服装や、趣味を賞めた。

それから、各自の髪や、衣服に氣を付けて、十一時に、衆皆、それ／＼の馬車に乗り込んで駆けさせて行つた。

## (十五)

ナタアシャは、その日一日片時の閑暇も無かつた、で、自分の前に在る事柄に就て考へる時を一度も持た無かつた。

濕つた、冷たい空氣の裡で、揺れる馬車の閉め切つた、薄暗い裡で、ナタアシャは始めて、舞踏會に於て、クツツと明るい大廣室で、自分が出會ふ筈である所のもの——音樂、花、舞踏、皇帝、彼得堡の總ての華々しい若者——を心の裡に描いたのであつた。ナタアシャの前の將來のことは、それが、來るのを信することさへ能き無いほどそれほど立派なものであり、馬車の裡の寒いこと、暗いこと、閉め込んで居ること、は、全然適應は無いものであつた。ナタアシャは、赤い布の上を通つて、玄關へ行き、外套を脱ぎ、明るい階段の花の間を、母親の前に立つて、ソオニヤと列んで歩いて居る時に、始めて、自分を待つて居る總てのことを覺ることができたのであつた。その時に、始めて、ナタアシャは、自分が何ういふ風に舞踏會では擧作は無ければなら無いもののかを憶ひだした、そして、舞踏會では娘に取つて何うしてもさう爲無ければなら無いものだと思つた通りの、如何にも氣高い様子を装らうと試みた。

が、運よく、ナタアシャは、自分の目の前に、霧があるやうに感じた、何にも瞭然と見ることが能き無かつた、脈は一分に百打つた、そして、血が心臟でドキ／＼した。ナタアシャは、自分を愚劣しく見せるやうな態様を装ることが能き無かつた、で、昂奮で胸を轟かし、自分の全力を擧げて唯それを隠すことばかり骨折りながら、進んで行つた。所で、ナタアシャが、一番好く見えたのは、丁度さういふ氣分の時であつたのだ。前にも、後にも、同なじやうな舞踏會で、同なじやうな潜めた調子で話を爲て居る客たちが歩いて居た。階段にある鏡が、裸の腕や頸へ金剛石や眞珠を附けた、白や、青や、桃色の衣服の貴婦人たちを寫した。

ナタアシャは、鏡を見た、が、他の人と自分を識別することが能き無かつた。何も彼も一つの華やかな行列の裡へませこせになつて居た。第一の部室の入口で、聲や、足音や、挨拶の實に騒がしい音が、ナタアシャの耳を聳した、燈光と燦爛が、尙一層瞬ゆかつた。最早半時間も戸口に立ち詰め、來る何の客にも、「有り難う、善うおいでくださいました」といふ全く同なじ言語を云つて居た亭主夫婦は、ロストオフ家の人々とマダム・ベエロンスキイにもそれと同なじ挨拶を爲た。

白い衣服の、黒い髪に同なじやうに薔薇を簪した二人の若い娘は、全く同なじやうに會釋を

爲た、が、女主人の眼は我知らずナタアシャの瘠せた姿の方により長く止つて居た。女主人はナタアシャを見た、そして、ナタアシャに向つて、その夫人が誰に對しても持った歡迎の微笑より以上の何物かであつた微笑みやうを爲た。ナタアシャを見ると、多分女主人は、最早決して返つて來無い、自分の娘時分の黄金時代、自分の最初の舞踏會のことを憶ひ出したのであらう、主人も亦ナタアシャを見送つた、そして、その娘の何方が彼の娘なのか、伯爵に尋いた。

「實に好い娘だ」と、彼は、自分の指先に接吻して、云つた。

舞踏室では、客たちは、皇帝を待ち設けて、入口に群れて立つて居た。伯爵夫人は、この群集の前列に於て位地を取つた。ナタアシャは、幾つかの聲が自分が誰なのか、尋ねて居るのや、幾對もの眼が自分の上に見据られて居るのを、聞いたり、感じたりした。ナタアシャは、自分が、自分を見付けた人々の上に好い印象を興へて居るのを知つた、そして、さう氣が付いたことが、幾くらか自分を落ち着かせた。

「私たちと同じな人も居るし、私たちほど好く無い人も居るわ」と、ナタアシャは思つた。マダム・ペエロンスキイは、舞踏會に來て居る最も名高い人々を、伯爵夫人に指し示めて居た。

「彼が和蘭の大使ですよ、それね、白髪の人」と、マダム・ペエロンスキイは、彼が話して居る物語で笑つて居る婦人たちに取り圍かれた、銀のやうに白い縮毛の多量ある老人を指しながら、云つて居た。「それから、あれ、彼が、彼得堡交際社會の女王、伯爵夫人ベズウホフ」と、マダム・ペエロンスキイは、丁度その時入つて來たエレンを指して、云つた。

「何て奇麗なんぞせう。彼の女はマリイ・アントオノヅナと全く同じですよ。若いのも年取つたのも、男は誰も彼も、まア彼の女に丁寧にするぢやありませんか。彼の女は奇麗な上に、精巧なんですよ……公爵誰某なんぞは、彼の女のことと云へば半狂人なんだといふ噂があるんですよ。それから、そら、彼の二人だつても、確な標緻でも無いのに、随分騒がれるのですからねえ」

マダム・ペエロンスキイは、極く不標緻な娘を伴れて部屋を横斷つて居た一人の婦人を指し示めした。

「大富豪の跡取り娘です」と、マダム・ペエロンスキイは云つた。「で、ご覧なさい、求婚者たちが來ましたよ……彼は、伯爵夫人ベズウホフの弟、アナトオル・クラアギンです」と、ペエロンスキイは、顔をすつと上げて、婦人たちの頭を超えて、彼方の方の何かを見ながら、自分



たちの傍を通つて行つた近衛騎兵の奇麗な將校を指さしながら、云つた。「奇麗ですね、さうでせう？。彼の人々が彼の跡取り娘に結婚すると云ふんですよ。それから、貴女方の従兄弟さんの、ブルベエツコイが、又彼の娘に非常に心を向けておいでなんです。彼の娘は何百萬といふ程持つてゐるさうなんですよ。あ、彼が佛蘭西の大使なんです」と、ベエロンスキイは、何れがコオランクウルなのだと言ふ伯爵夫人が尋ねたのに答へて、云つた。「一寸ご覧なさい、何處かの王様のやうでせう。けれども、彼の人たちは好うございますね、佛蘭西人は眞個に好いんですよ。彼れ程交際場裡で好い人民は他には有りませんね。あ、彼の女が来ましたよ。さう、誰よりも美しい、吾々のマリイア・アントオノヅナです。まあ、何て素潔した服装なんだらう。何とも云へ無いほど好い」

「それから、眼鏡の彼の肥つた男が、高名の共済組合員なんです」と、マダム・ベエロンスキイはベズウホフを指しながら、云つた。「彼の人々の夫人の傍に置いてご覧なさい、彼の人々は、宛然だんだらの衣服を着た道化者なんですわ」

肥つた體軀を揺々させながら、ビエールは、市場の雑沓の裡を歩いてでも居るかのやうに折折、人の好きさうに、右に左に、首肯くやうに挨拶して、群集の裡を拙態に歩いた。彼は確に

誰かを捜しながら、群集の裡を通つて居たらしかつた。

ナタアシヤは、マダム・ベエロンスキイの所謂、だんだらの衣服を着た道化者のビエールの見慣れた顔を見たのが嬉しかつた、そして、ビエールが群集の裡で捜して居たのは自分たち、殊に自分であつたのを知つた。ビエールは、その舞踏會に出て、ナタアシヤの舞踏の對手を見付てやらうと、約束したのであつた。が、ナタアシヤたちに達し無いうちに、ビエールは、勳章や綬を着けて居る背の高い人と窓の所で話しながら立つて居た白い制服の中背の甚く奇麗な陰色の男の側で、ビタリと立ち止まつた。

ナタアシヤは、白い制服のその奇麗な若者が誰であるか、直ぐ憶ひだした、それは、ボルコオンスキイであつた、が、ナタアシヤには、彼が、これまでより若く、より幸福に、より奇麗に爲つたやうに見えた。

「他にも吾々が知つて居る人が居てよ、ボルコオンスキイ、ほうらね、母上様」と、ナタアシヤは、公爵アンドレエーを指しながら、云つた。「ね、オツラアドノエで、家で一晩宿つてつたでせう？」

「あれ、貴女、彼の人をご存じですかい？」と、マダム・ベエロンスキイが云つた。「私は彼

の人は大嫌ひ。誰も彼も、彼の人のこと、云へば、狂人のやうに騒ぐんです。でも、彼の傲慢な態つたら。眞個に何とも云ひやうがありませんわね。彼の人の傑い親父さん其儘なんです。で、彼の人は、今、スベリアンスキイと大の親密で、何か改革を計畫んでるんですよ。まあ、婦人に向つての彼の應待振りをご覧なさい。彼の婦人が彼の人に話し掛けてるでせう、彼の人は、婦人に背中を向けて了まつたやありませんか」と、ベエロンスキイは、ボルコオンスキイを指して、云つた。「彼の婦人たちのやうに私に爲やうものなら、直ぐ私は懲りさしてやりますものを」

## (十六)

不意に動搖が起つた、群集は話を爲だした、前へ駆け出した、それから、再兩方へ別れた、そして、間の開いた所を、直ぐ奏しだした樂隊の調子に合せて、皇帝が歩いて来た。その後から、亭主夫婦が歩いた。皇帝は、最初の挨拶を手早く済まして了まはうと爲るかのやうに、右左に點頭を爲ながら、速歩に入つて来た。樂隊は、それに符めた言語の爲めに當時流行つて居た波蘭曲を奏した。言語は、「アレクサンドル、エリザベタ、汝等は吾等の心を歡喜せしむ」と

いふので始まるのであつた。

皇帝は、客室へ行つた、群集は戸口に向つて突進した、幾人もの人々が、昂奮した顔容で、急いで、戸口へ駆けて行つたり、駆け戻つたり爲た。群集は、皇帝が女主人と話を爲ながら出て来た戸口から、今一逼さつと駆け戻つた。取り逆上せたやうな若者が、婦人たちの所へ跳んで来て、側へ退いて呉れと頼んだ。幾人かは、禮儀を全然忘れたやうな顔容で、服装の崩れるのも構はずに、無理に前へ押し出た。男たちが、婦人たちに近寄り始めた、で、幾對もが、波蘭踊に向つて、造られた。

後退の全體の動きがあつた、そして、皇帝が、微笑みながら、家の夫人を導いて、音楽に歩を合せずに、客室の戸から出て来た。

彼の後には、マリイヤ・アントノヴナ・ナリイシキンを伴れた主人が續いた、それから大使たち、大臣たち、種々な將官たちが来た、さういふ人々の名をマダム・ベエロンスキイが飽きもせず、一々擧げた。

婦人たちの半分以上は對手を持つて居た、そして、波蘭踊に加はつて居たり、加はらうと爲て居るのであつた。

ナタアシャは、自分は、壁の方へと引退がつて、波蘭踊を踊るやうに誘はれ無いで居る少數の婦人の裡に、母親やソオニヤと一緒に取り残されるのだと感じた。ナタアシャは、兩側へ寄せた腕を垂下げ、殆ど形の見え無い胸を静に波立たせながら、立つて居た。呼吸を詰めて、最高の嬉しさにも、最高の悲しさにも、何方にでも直ぐ爲るやうな顔容で、輝いた、怖けた眼で自分の前を見詰めて居た。

ナタアシャは、皇帝に少しも心向け無かつた、マダム・ベエロンスキイが指さして居た何の傑い人に對しても興味が無かつた、心は、唯だ一つの考想で満たされて居た――

「眞個に誰も私の所へは來無いか知ら？。私は何うしても一番上手な人々の裡で踊れ無いか知ら？。私は、今私を見さへ爲す、又、見ても、いや、彼女では無い、見たつて爲方が無い」と云ひでもするやうな顔容で見る彼様な人々には、誰にも眼を付けられ無いで了まうのか知ら。「いや、そんな筈があるものか」と、ナタアシャは思つた。「私が何れだけ踊り度がつてるのか、何れだけ善く踊るのか、何様なに私と踊るのが面白いのか、何うしても、彼の人たちが知るやうにさせて遣ら無ければなら無いわ」

最早暫時續いて居た波蘭曲の調子は、ナタアシャの耳には悲哀な追憶のやうに響き始めて居

た。ナタアシャは泣き度く爲つた。マダム・ベエロンスキイは他所へ行つて了まつた。伯爵は舞踏室の他の側に居た。伯爵夫人と、ソオニヤと、ナタアシャとは、誰の注意も引かず、誰の役にも立たずに、知ら無い人々の群集の間で、森の裡にでも居るやうに、寂しく立つて居た。

公爵アンドレーは一人の婦人と一緒に、それと気が付か無い態で、彼等の傍を通つて行つた。綺麗なアナトオルは、自分の腕に縋つて居る婦人に微笑みながら何か云つた、彼は、人が壁を見る時のやうに、ナタアシャの顔をジロリと見た。ポリイスは彼等の傍を二度通つたが、何時も顔を背向けて居た。踊つて居無かつたベルグ夫婦が彼等の方へやつて來た。

舞踏室でのこの家族の會合が、此所の舞踏會でも無ければ、家族の話爲る場所が無かつたかのやうで、ナタアシャには、耻かしくつて堪まら無かつた。ナタアシャは、自分の緑の衣服のことを何か云つたヴェーラの言語も聞か無ければ、ヴェーラを見も爲無かつた。

到頭、皇帝はその對手の最後の者に列んで、ビタリと止つた（彼は三人と踊つたのであつた）、音楽が止んだ。心配さうな顔容の侍従武官がロストオフ家の人々の所へ驅けて來て、彼等は最早壁に殆んどビタリ附いて居たに拘らず、もつと後へ退つて呉れと頼んだ、そして、オオケ

ストラから、ウアルツの緩徐な、正確な、誘惑的な、壮大な音律が起つた。皇帝は笑顔で舞踏室を見渡した。世話役であつた侍従武官が、伯爵夫人ベズウホフの所へ行つて、踊ることを頼んだ。微笑みながら、伯爵夫人は手を挙げ、侍従武官を見ずに、その肩に手を置いた。舞踏の名人であつたその侍従武官は、自分の對手を確乎捉へた、そして、自信のある落着と滑かさで、伯爵夫人と一緒に、圈の縁を廻つて、最初の駈を始めた、それから、舞踏室の隅で、對手の左の手を取つて、ぐるりと廻らせた、で、音楽の速めた調子の裡で、侍従武官の急な上手な足の拍車の規則正しい音と、三番目の足踏毎に聞える、くるく廻る對手の翻る天鵝絨の袴の衣擦れの音の外、何にも聞え無かつた。

ナタアシャは、その二人を見た、そして、その最初のウアルツを踊るのが自分で無いのに、泣き度く爲つて居た。

騎兵佐官の白い制服で、靴足袋を出し、舞踏靴を穿いた公爵アンドレエーは、ロストオフ家の人々から餘り離れて居無い一團の先頭に立つて、熱心に、面白さうに見て居た。男爵フィルホフが、次の日開かれる筈の第一回国務會議の事を彼に話して居た。スベラアンスキイと入懇な爲めと、法典調査の事務に關係して居る爲めとで、公爵アンドレエーは、非常にさまぐな風

説の行はれて居たその會議に就て確な消息を漏すことの能きる位地に居た。が、彼は、フィルホフが彼に向つて云つて居たことは聞かずに、皇帝から、踊らうと爲ては居るが、未だ場へ出て行か無い紳士たちへと眺めやつて居た。

公爵アンドレエーは、皇帝の前で應じて居るさういふ紳士たちや、踊れと頼まれるのを待ち兼ねて居る婦人たちを見守つて居た。

ビエールが、公爵アンドレエーの所へ行つた、そして、腕を撃つた。

「君は何時も踊るぢや無いか。僕の被保護女が來て居るんだ、ロストオフの若い娘だ、彼女に頼み給へ」と、彼が云つた。

「何處に？」と、ボルコオンスキイが云つた。「失敬」と、彼は男爵に振り向いて云つて、「この談話は他所で爲ませう、舞踏會では踊ら無きやなりませんよ」

彼は、ビエールが指した方角へ行つた。忽ち、ナタアシャの絶望した、震へた顔が、公爵アンドレエーに見えた。彼は、ナタアシャを憶ひ出した、ナタアシャの感情を察した、それがナタアシャの初舞臺なのを見た、ナタアシャが窓の所で云つて居たことを憶ひ出した、で、顔に嬉しさうな表情を持つて、彼は伯爵夫人ロストオフに近寄つた。

「娘をお紹介せ致しませうか」と、伯爵夫人は、赤くなつて、云つた。

「最早お目に掛つて居ります、伯爵夫人はご記憶の筈ですが」と、公爵アンドレエーは、マダム・ペエロンスキイが彼は無禮な男だと云つたとは正反對のやうに見えた低い丁寧な點頭をして、云つた。彼はナターシャの傍へ行つた、そして、踊りに誘ふことを未だ十分云ひ切らぬうちに、手を舉げて、それをナターシャの腰の周圍に置いた。彼は、ナターシャに、ウァルツを踊らうと云つた。絶望にも、大喜悅にも、何方にも直ぐならうと爲て居たナターシャの震えた顔容が、乍ち幸福な、有り難かつた、小兒らしい微笑で晴々とした。

「私長いこと貴下を待つて居ましたのよ」と、その吃驚した幸福な若い娘は、公爵アンドレエーの肩へ手を舉げた時に、涙の裡から覗き出した微笑で、云つて居るやうに見えた。彼等は、場へ歩いて出た二番目の一對であつた。

公爵アンドレエーは、當時の極く上手な舞者の一人であつた。ナターシャは實に巧く踊つた。八絲の舞踏靴を穿いた小さい足が、軽るくと、持主から獨立して、自然に、その役を勤めた、そして、ナターシャの顔は、幸福の歡喜で輝いた。

その裸の頸も腕も瘠せて居て、エレンの肩に比べては美しくは無かつた。ナターシャの肩は

瘠せて居、胸は來だ形が出来ず、腕は細々として居た。が、エレンは、宛然、その身體をツクツク見た數千の眼の堅い塗料で蓋はれて居たやうなものであつたが、ナターシャの方は、肩を露きだしにするものだとも誰もから確められ無ければ、非常に耻づかしがるだらうと思はれるやうな、始めて夜會服を着て出た若い娘のやうに見えたのであつた。

公爵アンドレエーは舞踏が好きであつた。彼は、誰もが彼を引き込まうと骨折つて居た政治上及び思想上の談話から能きるだけ早く遁れ度かつた、そして、又、皇帝の前である爲めに生じて居る遠慮の重苦しい障礙を破ぶつて出度くつて堪まら無かつた、それで、彼は、踊るのを急いで、ピエールがナターシャを指したが爲めに、そして、ナターシャが、彼の眼に入つた最初の奇麗な娘であつたが爲めに、唯それだけで、ナターシャを對手に選んだのであつた。が、その細つそりした、撓やかな腰の周圍に自分の手を置き、ナターシャが自分にさう近々と動きさう近々と微笑んで居るのを感じるや否や、その美しさに對する醉が、彼の頭へカッと上つた。彼は、深い呼吸を吐いて、ナターシャを止まらせ、他の對ともを凝視め始めた時に、自分が再生と若さに満ちたやうに感じた。

## (十七)

公爵アンドレエーの後で、ポリイスがナタアシャに踊つて呉れと頼みに来た、その次ぎに、舞踏を始めた踊の上手な侍従武官が来た、それから、多くの若い男たちがやつて来た。顔を赤くして、嬉しさうであつたナタアシャは、餘まつた對手たちをソオニヤに譲つた、そして、その晩ちう一度も踊り止ま無かつた。ナタアシャは、その舞踏會で他の誰も心を領した事柄に寸毫も気が付かず、さういふ事柄を寸毫も見無かつた。ナタアシャは、皇帝が佛蘭西の大使と長い間話したことも、皇帝の擧作がさる婦人に對して殊に丁寧であつたことも、公爵某や、モシユウ某が斯う云つたとか、彼様したとかいふことも、エレンの成功が目覺しかつたこともそれから、何某くれがしがエレンに對して著るしく媚びたことも、其様なことは一つも見無かつた。ナタアシャは、皇帝をさへ見無かつた、そして、皇帝が去つた後で舞踏がはづんで来たのに氣が付いて、始めて皇帝が去つたことを知つたのであつた。

晩食前の、最も面白い八人舞踏の一つで、公爵アンドレエーは今一遍ナタアシャと一緒に踊つた。彼は、彼がオツラアドノエの大路で始めてナタアシャを見た時のことや、ナタアシャがそ

の月の夜睡られ無かつた時のことや、それから、彼が我知らずナタアシャの言語に聞き入つた時のことを、ナタアシャに話した。ナタアシャは、さういふ追懐に顔を赤くした、そして、公爵アンドレエーに我知らず立聞をされたその感情の裡に耻かしかるべき何事かがありでもしたかのやうに、宛然云ひ分けてもするかのやうに爲た。

交際場裡で生ひ立つた總ての人々のやうに、公爵アンドレエーは、何でも習俗的な交際場裡の特質を帯び無い物に出會ふのが好きであつた。所で、驚き易い、嬉しがり易い、羞かみ勝の、それに佛蘭西語を話すのに間違をやるナタアシャは正にさういふ物であつたのだ。

ナタアシャに話を爲て居る時の公爵アンドレエーの擧作は、非常に優しく、注意深いものであつた。ナタアシャの側に坐つて、最も單純な、最も瑣細な問題の話を爲ながら、公爵アンドレエーは、ナタアシャ自身の幸福にばかり關する物語の他、何にも心に懸け無い、ナタアシャの眼の晴々した輝と、その微笑とを賞で、居た。ナタアシャが再選ばれて、笑顔で起つて、踊つて居る時に、公爵は、特にナタアシャの羞かんだ上品さを賞でた。八人舞踏の最中で、一順の終局に息を切らして、ナタアシャは自分の席へ返つて来た。他の對手が再ナタアシャを選んだ。ナタアシャは慥れて息だわしかつた、で、寸時は斷らうと思つたらしかつた、が、直きに

相手の肩に手を置いた、そして、公爵アンドレエーに向つて微笑んで、勢好く、再踊り始めた。『私貴下の傍に坐つて憩んで居度いよ。私草臥れるのよ、だけど、衆皆がこの通り放さ無いんですもの、でも、私これが嬉しいわ、私幸福なのよ、私誰もを愛するの、貴下と私は何でも全然解つてるんですわねえ』それより多くが、それよりすつと多くが、ナタアシャのその微笑の裡で云はれて居た。對手が離れるといふと、ナタアシャは、次の踊の爲めに二人婦人を選ばうと、部室を横断つて飛んだ。

『若し、彼の娘が、最初に彼の娘の従姉の所へ行き、それから、他の婦人の所へ行くのだつたら、彼の娘は俺の妻になる』と、公爵アンドレエーは——自分ながら甚く驚いたことに——ナタアシャを凝視めながら、心の裡で云つて居るのに氣が付いた。ナタアシャは、眞個に従ふの所へ行つた。

『實に愚劣しいことが、時々人の頭には出て来るものだな』と、公爵アンドレエーは思つた、『けれども、これだけは確かだ、この娘は、一月と此所で踊ら無いうちに、誰か結婚する人があるだらうと思はれる位、美しくつて、自然な娘だ……この娘は此所では珍品だ』と、彼は、ナタアシャが、胸から落ち懸つて居た薔薇を挿し込みながら、彼の傍へ身を落ち着けた時に、

思つた。

八人舞踏の終末に、青いフロクコオトの老伯爵が、その晩踊つた若い人々の所へ行つた。彼は、公爵アンドレエーに自分たちを訪ねて来て呉れと招き、自分の娘に、面白かつたかと尋いた。ナタアシャは、直ぐには答へ無かつた、唯だ、『何うして貴下は其様なことが尋けるんですよ』と、たしなめるやうに云ふ笑顔で爲たばかりであつた。

『生れてから一度も無い程面白かつてよ』と、ナタアシャは云つた、公爵アンドレエーは、ナタアシャの細い兩腕が、父親を抱擁しやうとするかのやうに、速く舉がつて、再直ぐ落ちたのを認めた。ナタアシャは、生れてから一度も覺え無いほど幸福であつた。ナタアシャは、人が、全く善く、親切になつて、悪や、不幸や、悲哀の有り得ることさへ信じ無いといふやうな、幸福のさういふ最高度に達して居た。

その舞踏會では、ビエールは、始めて彼の妻が最高の宮中社會に於いて有つて居る位地の爲めに屈辱を感じさせられた。彼は、不機嫌で放心して居た。彼が、眼鏡越しに誰をも見ずに、唯だ前を見詰めながら、窓の所に立つて居た時に、彼の額をすつと横断つて、幅の廣い皺が有つた。

ナタアシヤは、晩食に行く途すがら、彼の直ぐ傍を通つた。

ビエールの陰鬱な不幸な顔がナタアシヤを驚かした。ナタアシヤは、彼に向いて、止まつた。ナタアシヤは彼の助力を爲に行き、自分の溢れて居る幸福の幾分を彼に與へ度くつて堪まら無かつた。

「眞個に面白かつたことねえ、伯爵」と、ナタアシヤは云つた。「さうぢやア無くつて？」

「ビエールは、自分に云はれた事柄は聞取れ無かつたらしい態で、放心した笑顔を爲た。」

「左様、私も非常に面白かつた」と、彼は云つた。

「何うして、人が何に向つてだつて不満足なんかになれるんだらう」と、ナタアシヤは思つた。「まして、ベズウホフぐらゐに彼様なに好い人が、誰だつても」

(十八)

次の日、公爵アンドレーが舞踏會のことを考へた時に、それは長く彼の心を傾して居無かつた。

「左様、極く成功した舞踏會だつたな。それに、左様だ、若いロストオフはなかく、好い娘だ。彼の娘には、彼得堡らしく無い、自然な、新鮮な何物かある。」彼が、前日の舞踏會のことを考へたのは、唯それだけであつた、そして、朝の茶の後で、彼は爲事に掛つた。

が、疲憊やら、睡眠の不足やらで、彼は爲事には餘り氣が向いて居無かつた、そして、何にも出来上から無かつた。彼は、絶えず自分の爲事を批評して居た——これが彼に普通な習慣であつた——そして、客が來たのを聞くと嬉しかつた。

客は、種々の委員會の議員で、彼得堡の有らゆる交際場裡へ出る男のグイツキイであつた、この男は、新思想の、そして、スペラアンスキイの熱烈な味方で、彼得堡での最も勉強な風説を取り次ぐ男で、自分の意見を衣服のやうに——流行に随つて——變へるのだが、然し、全くそれが爲めに、最も猛烈な黨人らしく見えるといふやうな人々の一人であつた。

帽子を取る間も殆ど待たずに、彼は忙はしく公爵アンドレーの傍へ駆け寄つて、直ぐ談し始めた。彼は、皇帝が開いた、その朝の國務會議の議事の詳報を今得たばかりの所であつた、



で、その問題に就いて熱心に話し始めた。皇帝の演説は、ドイツキイの云ふのでは、非常なものであつた。それは、立憲國の君主のみが爲るやうな演説であつた。

「皇帝は直ちに、國務會議と元老院が帝國の基礎であると主張せられたですよ、陛下は、政府は、專制の權威の上には無く、確固とした基礎の上に建てられるべきものだと言せられたです。皇帝は、財政制度が改造されなければならず、計算が公表されなければならんと仰せられたです」と、ヴィツキイは、或る言語に力を入れ、意味あり氣に眼を開けて、告げ知らせた。「左様、今日の會議は、時代、吾が國の最も大なる時代を劃するものですわい」と、彼は結論した。

公爵アンドレーエは、彼が非常な熱心を以て待ち設け、非常に重きを置いて居た國務會議の開會の物語を聞いた、そして、それがいよ／＼開けた今になつて、この事件が、彼を感動させるどころでは無く、彼には無意義よりも以下のことのやうに思はれたのに、呆れたのであつた。物靜かな皮肉で、彼は、ヴィツキイの熱心な物語に聞き入つた。彼の心の裡の考想は最も單純なものであつた。「俺やヴィツキイに取つて、それが何だ？」と、彼は思つて、「皇帝が國務會議で何を仰せられやうとも、それが吾々に取つて何だ？。其様な事が、俺を寸毫でも幸福に

し、寸毫でも善くし得るだらうか？」

で、この單純な回想が、その時行はれつゝあつた改革に對して公爵アンドレーエが此まで持つて居た有らゆる利害の觀念を、破壊して了まつた。

その日、公爵アンドレーエは、スベラアンスキイの所で、亭主が彼を招く時に云つた通り「少しばかりの友達」と一緒に食事を爲る筈であつた。彼をさうまで盪惑して居た人の家へ親しく出入する連中の裡に加はるその食事が、公爵アンドレーエに取つてその時までは非常に樂しみであつた、それに、彼は、家内に於けるスベラアンスキイをこれまで見たことが無かつたので、殊にさうであつたのだ。が、今は彼はそれへ行氣が寸毫も無かつた。

けれども、極めた時刻には、公爵アンドレーエは、タヅリチエスキイ園の小さい家へ入りつゝあつた。スベラアンスキイの持物であつたその小さい家は、尼寺の清潔さを憶はせる非常な清潔さで名高かつた。寄木細工の食堂で、少し遅れた公爵アンドレーエは、既に五時に集まつたスベラアンスキイの入懇な朋友の一團を見出した。スベラアンスキイの小さい娘（父親と同じ長い顔の）と、その家庭教師の外、婦人は一人も居無かつた。客はゼルヅエーと、マグニイツキイと、それから、ストロイビンであつた。

女關でも、公爵アンドレーは、高い聲々の響と、舞臺で聞くやうな、勢の好い、斷音の哄笑を聞いた。誰か——スベラアンスキイの聲のやうであつたが——斷音で「は……は……は……」と嘖飯して居た。公爵アンドレーは未だ一度もスベラアンスキイの笑ふのを聞いたことが無かつた、そして、最も傑い政治家のこの甲走つた、高調子の哄笑は、公爵アンドレーに奇異な印象を與へた。

公爵アンドレーは食堂へ行つた。連中全體が、副食を置いた小さい卓子の傍で、二つの窓の間に立つて居た。スベラアンスキイは、勳章を附けた鼠色フロックコートで、白い直衣を着、高い白襟——彼が國務會議の名高い開會の時に着た服装——で、大陽氣の顔容で、卓子の所に立つて居た。彼の客たちは、彼の周圍に圈を造つて居た。彼の方に向いて、マグニイツキイが、何か物語を爲て居た。スベラアンスキイは、マグニイツキイが云はうと爲て居たことに對して、前以つて笑ひながら、聞いて居た。丁度公爵アンドレーが部屋へ入つて行つた時に、マグニイツキイの言語は再哄笑の裡へ溺らされて了まつた。ストロイビンは、麵麩と乾酪の斷片を噛みながら、濁み聲の哄笑で嘖飯した。ゼルヴェーは、低くクス／＼笑を漏した、スベラアンスキイは例の甲走つた、斷音の哄笑ひやうを爲た。

スベラアンスキイは、尙且笑ひながら、公爵アンドレーに自分の和かな白い手を與へた。「善くおいでくださいつた、公爵」と、彼は云つた。「一寸……」と、彼は、マグニイツキイの物語を遮ぎつて、その方に振り向いた。「今日は吾々は約束を爲しました、これは、祝日の食事なので、用件は一言も云はんといふのです。で、彼は再話者に振り向いて、再笑つた。

不思議な氣のする、悲しい醒覺の感で、公爵アンドレーは、スベラアンスキイの哄笑を聞き、笑つて居る彼を見た。それは、スベラアンスキイで無く、誰か他の人であつたやうに、公爵アンドレーには思はれた。これまで、スベラアンスキイのことで、神祕に、且懐かしく見えて居たものが、公爵アンドレーには、不意に平凡で、下ら無いものに見えたのだ。食事の時も、談話は寸刻も止ま無かつた、そして、それは、滑稽書の内容のやうなものばかりであつた。マグニイツキイが、物語を終はるや否や、他の紳士が直ぐ何か尙一層可笑しいことを話さうと云ひだした。物語は、大抵、公務そのものゝことで無ければ、顯要の位地に居る人々に關するものであつた。この連中の間では、さういふ高官な人々に對して執り得べき唯一の態度は、意地の悪く無い哄笑の態度だとせられて居た位、十分にさういふ高官な人々の無能なことが認められて居たかのやうであつた。

スベラアンスキイは、その朝の會議で、或る聾の紳士が、自分の意見を尋かれると、自分は同意見だと答へたことを人々に話した。ゼルグエーは、關係者全體の迂愚なことを好く表はして居る法典改修の種々な挿話を話した。ストライピンは、啞りながら、談話に加はつた、そして、談話を危険なものに爲さうであつたほどの熱心で、舊制度の弊害のことを話し始めた。マグニイッキイはストライピンの眞面目さをませかへしだした。ゼルグエーは、戯言を挟んだ、で、談話が前のやうな快活な調子に戻つた。勞苦の後で、スベラアンスキイは、自分の朋友の團居で、憩み、且つ面白がらせて貰らうのが好きであつたことは明白であつた、で、彼の朋友は彼の趣味を解して居て、そして、彼を面白がらすのは固より、自分たちも亦面白くやらうと骨折つて居た。が、公爵アンドレーには、斯ういふ快活さは、退屈で、少しも快活で無く見えた。

スベラアンスキイの高聲が公爵アンドレーには不快に聞えた、そして、高調子の假聲の間斷無しの哄笑が、何うしてだか、公爵アンドレーの感情を傷つけた。公爵アンドレーは、笑は無かつた、そして、自分は、その連中には適應は無いものだと感じられはしまいかと虞れた。誰も、彼が全體の快活さに對して彼が同情を持つて居無ことに氣が付か無かつた。誰も彼も、各自非常に面白がつて居るらしかつた。

公爵アンドレーは幾度も談話に加はらうと試みた、が、その度毎、彼の言語は、水の中の塞子のやうに、彼の口から出るや否や、何處かへ浮いて行つてしまつて、衆皆と戯言を交換することが能き無かつた。衆皆が云つたことに、間違つたこととか、奇異なことなどは、少しも無かつた。悉皆氣の利いたことで、面白くもあつた筈であつた、が、何か知ら——快活さの旨味を成して居るその何か知らが——缺けて居た、それに、誰あつて、さういふ所があるのを知つてさへ居無かつた。

食事が済むと、スベラアンスキイの娘と家庭教師が、卓子から起つた。スベラアンスキイは、娘の頭を彼の白い手で撫で、娘に接吻した。その身振りも、公爵アンドレーには、わざとのやうに見えた。

男連は、英吉利風に、ポルト葡萄酒を飲みながら、坐つて居た。西班牙でのナポレオンの行動に就ての談話が出た、そして一坐ことごとくナポレオンの行動を是認したのに、公爵アンドレーはそれを攻撃した。が、議論最中に、スベラアンスキイは、確に話題を變へるらしく、微笑みながら、それとは一向關係の無い物語を爲始めた。少時の間、誰も黙まつて居た。

衆皆が卓子に就て居る時に、スベラアンスキイは、葡萄酒の壘に塞子を爲して、『今日日では、

「良い酒は威張つて居る」と、云ひながら、それを家僕に渡して、起つた。

衆皆起つた、そして、尙且騒がしく話し合ひながら、客室へと行つた。スベラアンスキイは、特使の持つて来た、二つの封状を渡された。彼はそれを取つて、書齋へ行つた。彼が行つて了まうや否や、全般のはしやぎに小止があつた、で、客たちは低い調子で眞面目に話し合ひだした。

「さア、朗讀だ」と、スベラアンスキイは、書齋から出て来て、云つた。「驚くべき天才です」と、彼は公爵アンドレエーに云つた。マグニイツキイは直ぐ身構へを爲た、そして、自分がさまざまの知名の人々のことを書いた諷刺の滑稽な佛蘭西語の詩を朗讀しだした。幾度も、彼は、喝采の爲めに、遮ぎられた。朗讀が終はると、公爵アンドレエーは、暇乞を爲やうと、スベラアンスキイの傍へ行つた。

「何故さうお急ぎかね？」と、スベラアンスキイが云つた。

「或る夜會に行く約束を爲ましたので……」

二人はその上何にも云は無かつた。公爵アンドレエーは、自分の眼の傍にさう近々ある鏡のやうな、見透しがたい眼を眺めた、そして、スベラアンスキイや、彼に關係のある自分の一切の爲事から、少しでも何事かを自分が期待して居たのが可笑しく感せられた、で、彼は、何う

して自分はスベラアンスキイが爲て居た事に少しでも價値を措くやうなことを爲たものだらうかと、不思議で堪まら無かつた。そのカツキリした、可笑しさうに無い哄笑が、スベラアンスキイの家を出て後長いこと、公爵アンドレエーの耳の裡で響いて居た。

家に着くと、公爵アンドレエーは、彼得堡での此の四ヶ月の自分の生活を、それが何か新しい物でもあつたかのやうに、見始めた。彼は、自分の爲に努力や、自分が逢はうと試みた人人や、詮議を爲るといふことで受領られながら、他の計畫、極く杜撰なやつが、既に編まれて、皇帝の手許へ出されたといふので、握り潰されて了まつた自分の軍規改革の計畫の成り行きなど、を思つた。彼は、ベルグがその一委員になつて居た委員會の會議のことを思つた。彼は、さういふ會議で、會議その者の手續に關する各項に就て起つた綿密な長く掛つた審議や、彼等の眞個の任務に關する事は何でも手短かに片付けられたことを思つた。彼は、法典改修の自分の爲事や、自分が羅馬や佛蘭西の法典を綿密に露西亞語に翻譯したことを思つた、そして、彼は自分ながら耻ぢ入つて了まつた。

それから、彼は、現然とボグチャアロヴァや、田舎での自分の爲事や、リヤザアンへの旅行のことを思つた、彼は、自分の農夫どもや、村年寄のゾロンのことを思つた、そして、彼が條項に

分けた人権の部を彼等に適て、見て、彼は、自分が何うして其様に長くそれ程下ら無い爲事に掛つて居られたものなのか、實に不思議で堪まら無かつた。

## (十九)

次の日、公爵アンドレーエは、自分が前に尋ね無かつたさまざまの人々を訪問した、そして、その一つとして、彼が舞踏會で再交際を始めたロストオフ家をも尋ねた。ロストオフ家の訪問を必要にした禮儀の斟酌の外に、公爵アンドレーエは、自分の心に彼様な快よい追憶を残した彼の熱心な、自然な娘を家庭で見度かつたのであつた。

ナタアシャは、眞先に公爵アンドレーエを迎へたもの、一人であつた。ナタアシャは青い日常の衣服で居たのだが、公爵アンドレーエには、その方が、舞踏服の時よりも美しく見えたのであつた。ナタアシャも、家族ちうも、公爵アンドレーエを、古くからの朋友のやうに、眞率に親しげに取り扱かつた。公爵アンドレーエが嘗は酷しく批評した家内ちうが、今は、非常に好い、眞率な、親切な人々ばかりのやうに彼には見えた。彼得堡では殊に著るしく、懐かしかつた老伯爵の客待遇と、親切とが、公爵アンドレーエが食事に止まることを斷ることが能き無かつ

た程のものであつた。

『左様、これは、人の好い、實に面白い人々だな』と、ボルコオンスキイは思つた。『勿論、彼の人たちは、ナタアシャが何れほど財寶だか寸毫も知ら無い、けれども、彼の人たちは、生命に彼様なに充ちた、彼の實に好い娘の驚ろくべき詩的な姿に對して最も好い背景を爲して居る善い人々なんだ』

公爵アンドレーエは、ナタアシャのうちには、自分とは全く離れた、自分には知られ無い喜びの満ち溢れた特別な世界——オスツラアドノエの大路や、彼の月夜に於てすら、彼を羨ましがらせたその不思議な世界——が、あるのを知覺して居た。今はそれが彼を羨ましがらせ無かつた、それは最早別の世界では無かつた、今は彼自身がその裡へ踏み込んで、その裡で新たな快樂を見出して居るのであつた。

食事の後で、ナタアシャは、公爵アンドレーエの頼みで、翼琴へ行つて、謠ひ始めた。公爵アンドレーエは、婦人たちと談話を爲ながら窓の所で立つて、ナタアシャの謠うのを聞いて居た。歌の最中で、公爵アンドレーエは談話を止めた、で、自分に其様なことがあらうとは夢みもし無かつたのに、涙で咽喉が塞まるやうに不意に感じた。彼は謠つて居るナタアシャを見

た、と、新たな嬉しい何物かが、彼の心の裡で動いた。彼は幸福であつた、と同時に、彼は悲し  
かつた。彼は確に泣くべき何事も持つて居無かつた、が、彼は泣きさうになつて居た。何の  
爲めか？。彼の過ぎ去つた戀の爲めなのか？。小さい公爵夫人の爲めなのか？。自分の失つ  
た幻の爲めなのか？。將來に對する彼の希望の爲めなのか？。……さうでもあり、又さう  
でも無い。彼をして泣かしめやうと爲た重なる物は、彼の裡に有る無限に大きい、無制限な或る  
物と、彼自身も、ナタアシャでさへも、それであつた有限な物質的な或る物との間の、恐しい對  
照に、不意に現然と心付いたことであつた。

この對照が、彼の心を疼かした、が、同時に、ナタアシャが語つて居る間、彼を喜ばした。  
ナタアシャは、語り終はるや否や、彼の所へ行つて、自分の聲が好きか何うかと尋いた。ナ  
タアシャは斯う尋いて、そして、斯様なことを尋くのでは無かつたと氣が付いて、それを云つ  
てから、耻ぢ入つた。彼は、ナタアシャを見て、微笑んだ、そして、彼はナタアシャが爲る何  
でもが好きであつた通り、ナタアシャの語り方も好きなのだと言つた。

公爵アンドレーがロストオフ家を去つたのは、晩遅くであつた。彼は、唯だ何時もの習慣  
通りに、寢床へ入つた、が、直ぐ睡られ無いのを見た。彼は蠟燭を點けて、寢臺に坐つた、そ

れから起き、又それから、横になつたが、睡無いに拘はらず少しも疲れ無かつた、彼は、息の  
籠もつた部屋から戸外の日光へ出たかのやうに、心の裡に新たな喜悅を感じた。自分が、この小  
さいロストオフ家の娘に戀を爲て居るとは、彼の心には更に思ひ寄ら無かつた。彼はその娘の  
ことを考へては居無かつた。彼は、唯だ一人でその娘を心に描いた、と、さうするに従つて、人  
生の全體が新たな光明で、彼の前に立ち上がった。

「何故俺は彼此と抗くのだ？。何故俺は、人生が、その有らゆる喜悅と共に全人生が、俺  
の前に開けて横はつて居るのに、この狭い、窮屈な凡習の裡で惱まされるのか？」と、彼は、  
獨云つた。

で、甚く暫時ぶり、始めて、彼は、將來に對する幸福な計畫を立て始めた。彼は、自分の  
息子の教育の心配を爲て、傳教師を見付けて、それに、小兒を托すのが宜いと、決心した。そ  
れから、軍隊を退いて、外國へ行き、英吉利、端西、伊太利を見るのが宜いと思つた。

「俺は、自分の裡にこれほど多量の若さと力を持つて居るうちに、自分の自由を利用し無け  
ればいかん」と、彼は、自分に向つて云ひ聞かした。「ビエールが、人は、幸福にならうとするに  
は、幸福といふことの有り得べきことを信じ無ければいかん」と云つたのは、眞實だ、俺は今そ

れを信ずる。死んだものをして死んだものを葬らせて置かう、で、人は生きて居る間は、生きて、そして、幸福で無ければいけない」と、彼は思った。

(三十)

或る朝、ビエールには、莫斯科や、彼得堡のざらの人に對すると丁度同なし位のホンのついで通りの知り合であつた佐官アドルフ・ベルグが、ビエールを訪ねて来た。ベルグは、裁縫下しの制服を着て居、そして、皇帝アレクサンドル・バアゾヴィイチのやうに、装粉を撒つた前髪を額の上に立たせて居た。

「今、奥様の、伯爵夫人をお訪ねしたのですが、不幸にして、私のお願が協はんでした。貴下の方は、運好く行き度いと思ひますのですが、伯爵」と、彼は微笑んで、云つた。

「ご用は何ですか。何でも遠慮無く仰しやいませ」

「私は、今では最早、伯爵、私の新宅に全然落ち着いて了りました」と、ベルグは、この事實を聞くのは何うしても心持が好く無ければなら無いのだと、全く確信して居る態で、告げ知らせた、「それで、友人どもや、荆妻の爲めに小さい、夜會をやり度いと思ひますのです。(ハ

ベルグは尙一層ホヤ／＼微笑んだ。伯爵夫人と貴下に、茶を喫りに、それから……晚餐にお光來を願ひ度いのでしたが」

ベルグのやうな何でも無い者どもと交際するのを賤しいことだと考へて居た伯爵夫人エレエナ・ヴァシイリエヅナばかり、殘酷にもさういふ招待を断ることが能いたのであつた。ベルグはビエールが断り得ずに、行かうと約束した程瞭然と、何故、彼が、彼の新宅に小さい選り抜きの客を集めやうと思ふのか、何故、さうすることが彼に取つて心持が好いのか、何故、彼は骨牌やその他の害のある何でもで金錢を費ふのは惜しむのだが、善い人々と交際する爲めには費用を惜しま無いのか、を説明した。

「甚だ勝手ですが、伯爵、餘まり遅くおなりになりませんやうに。勝手ですが、八時に十分前に。吾々はポストンの仲間を拵らへませう。私どもの將官が來られます、將官は私には極く親切なんです。吾々は小さい晚餐を爲ませう、で、伯爵、私は光榮と存じます」

何時もの習慣とは反對で（彼は殆んど何時も遅れたのだが）、ビエールは、八時に十分前で無く、八時十五分前に、ベルグの家へ行き着いた。

ベルグ夫婦は、自分たちの小さい客に對して必要な有らゆる準備を爲た、そして、客たちの

来るのを待ち受けて居た。

ベルグと妻は、小さい胸像や、繪や、新しい道具の備はつた、新しい、清潔な、明るい書齋に坐つて居た。

ベルグは、新しい制服の扣鈕をチャンと掛けて、妻の傍に坐つて、人間は何時でも自分より上の人々と親しくすることが能きるし、又さうするのが宜い——何故だといふと、さうしてのみ、交際といふことが心持が好いだから——と妻に説明して居た。「さうすれば、何か知らず拾うことが能きる、何か知らぬ爲めに言葉を挟むことが能きる。先づ俺を見な、俺は随分低い位地で骨折つたんだせ（ベルグは、自分の生涯を年では無く、進級の數で數へたのだ）。俺の同僚だつた奴等は未だ何でも無いのに、俺は、今中佐だ。俺は、お前の夫たる幸福を持つて居んだ」彼は、起つて、ヴェーラの手に接吻した、が、その序に、裏返つて居た毛氈の隅を直した。「で、俺は何うして、總べて斯ういふ事になり得たのか？。重に、知己の選らび方を知つて居た爲めなんだ。勿論、人間は自分の任務を盡すのに、綿密に、正確で無ければならんことは云ふに及ばんことなのだがね」

ベルグは、唯だの弱い女に對する自分自身の優越の感覺で微笑んだ、そして、止まつて、彼の

此の美しい妻さへも、要するに、男の威嚴を構成して居る總てのことに達することの能き無い弱い女に過ぎ無いことを思ひ廻らした。

ヴェーラも又、それと同時に、ヴェーラの男子觀に従へば、總ての男は、非常に過つた人生觀を持つものであるやうに、未ださうである所の自分の綿密な優れた夫に對する自分の優越の感覺で微笑んだ。

ベルグは、自分の妻から判断して、有らゆる女を弱いもの、愚なものと考へて居た。ヴェーラは、自分の夫のみから判断し、彼に對する自分の觀察から概定して、總ての男は、常識といふものは自分等ばかりに有るものと思つて居るが、それと同時に、何事に對しても少しも了解力を持たずに、高慢で、自我的なもののだと、想像して居た。

ベルグは起つた、そして、彼が纏まつた金銭を拂つた笹縁の肩掛を潰さ無いやうに、注意深く妻を抱擁して、丁度唇に接吻した。

「この上唯つた一つの願があるんだ、吾々は餘まり早く小兒を持つちやア不可」と、彼は、自分でも氣が付か無かつた考想の續きを追つて、云つた。

「さうですわ」と、ヴェーラは答へて、「私それは寸毫も希は無いわ。私たちは、交際社會に



向つて生き無ければなら無いんですもの」

「公爵夫人ユスウボフが丁度さういふのを掛けて居たよ」と、ベルグは、嬉しさうな機嫌の好い笑顔で、肩掛を指しながら、云つた。

その途端に、彼等は、伯爵ベズウホフが到着したことを告げ知らされた。若夫婦は、各自この訪問の信用を自分のものだとし心の裡で主張しながら、満足の一瞥を交換した。

「知己の拵へ方を知つてゐる結果を見て呉れ」と、ベルグは思つた。「チャンとした身持の結果を見て呉れ」

「ですけれど、ねえ、私がお客さんを欺待してます間にはね」と、ヴェーラは云つて、「私の談話の腰を折つちやいけませんよ、私は、いろ／＼違つた人の集まりの間で、それ／＼何う欺待して宜いか、何ういふことを云つて宜いか、チャンと知つてゐるんですからね」

ベルグも微笑んだ。

「成る程、けれども、折々男は男の談話を爲なきやアならんからね」と、彼は云つた。

ヴェールは、小さい客室へ案内された、其所は、均齊と、きちんとして居ること、秩序とを破さず坐ることは何うしても能き無いやうになつて居た、で、それ故に、ベルグは上客

の爲めに肱掛椅子なり長椅子なりの均齊を破らうと寛大に思ひ立ちましたもの、それに就て明白に情け無い氣の爲る不決定な状態に漂つて居るので、選擇の問題の解決を客に委してしまふといふのは、全く道理な事で、不思議は無かつた。ヴェールは均齊を破つた、自分で椅子を引き寄せた、で、ベルグとヴェーラは、自分等の客を欺待さうといふ盡力で相互に遮り合ひながら、手早く彼等の夜會を始めたのだ。

ヴェーラは、自分の心の裡で、ヴェールは佛蘭西大使館の談話で欺待すべきだと決定したので、直ぐその話題に取り掛つた。ベルグは、男の談話が要るのだと決定して、埃地利との戦争の問題を持ち出して妻の言語を遮り、そして、その全般的な話題から何時の間にか飛んで、埃地利戦役に参加せぬかといふ相談に對する一身上の利害關係や、自分をしてそれを断はらした理由などに言ひ及んだ。

談話が非常に連絡の無いものであり、ヴェーラが男性的要素の邪魔に入るのを怒つたけれども、若い人々は兩方とも、客が唯だ一人であつたに拘らず、夜會が旨く始まつたこと、自分たちの夜會が、他の有らゆる夜會に對して——同なじ談話、茶、點もつた蠟燭を以つて——水の二滴が互に相似て居るやうに、似て居るのを、満足して感じた。

次ぎに来たのは、ベルグの前の同僚のポリイスであつた。ベルグやヴェーラに對するポリイスの容態には、何と無く二人を下目に見て、調子を下げて居るやうな所があつた。ポリイスの後から、聯隊長夫婦が來、それから將官自身、それから、ロストオフ家の連中が來た、そして、夜會は今他の有らゆる夜會と全く、争ひ難く、同なじになり始めた。

ベルグとヴェーラは、自分等の客室の裡の總ての斯ういふ動きの有様や、連絡無く饒舌る音や、袴だの會釋のそよぎに對して、嬉しさの微笑を殆ど制し兼ねた。

何も彼も、全く誰もが何時も爲つて居る通りであつた、特に將官が左様であつた、將官はベルグ家の部室を賞め、ベルグの肩を叩き、そして、親のやうな權威で、ポストンをやる爲めに卓子の位置を整のへやうと主張した。將官は、自分に次での主な客の伯爵イリヤ・アンドレエーヴィチの傍に坐つた。年取つた客同士は一緒に居、若い人々同士は又一緒に居、女主人は茶卓子に就て居、その卓子の上には、銀の菓子籠の裡にバニンンの夜會にあつたのと全く同なじ菓子が入つて居た。何も彼も、世間の誰もが持つて居たのと全く同なじものであつた。

## (三十一)

ビエールは、最も大切な客たちの一人として、老伯爵や、將官や、聯隊長とポストンを爲るために坐らなければなら無かつた。彼がポストンの卓子に就くといふと、丁度ナタアシャの眞向に居ることになつた、彼は、舞踏會の日以来ナタアシャの上につた不思議な變化に驚かされた。ナタアシャは黙まつて居た、舞踏會の時程美しく無かつたのみならず、顔に出て居た何物に對しても溫和に無頓着である様子さへ無かつたら、唯だ十人並といふに過ぎ無かつたらう。

『何うしたんだらう』と、ビエールは、ナタアシャをジロ／＼見ながら、訝かつた。ナタアシャは茶卓子で姉の側に坐つて居た、傍に居るポリイスに不承々な返答を爲て、彼を見無かつた。一揃の勝負を悉皆やつて、五つ巧く勝つて、自分の組を満足させた後、ビエールは、自分の勝つた牌を取つて居るうちに、挨拶の聲と、誰か入つて來た足音を聞いて、再ナタアシャを一寸見た。

『やア、何うしたんだらう?』と、彼は、尙一層の驚きで、心の裡で云つた。

公爵アンドレエーが、ナタアシャの前に立つて、顔に抑へ付けた優しさの表情を持つて、ナタアシャに何か云つて居た。ナタアシャは、頭を擧げて、眞赤になつて、ハア／＼いふ喘ぎになつ

て出て来る呼吸を抑へやうと明白に骨折りながら、公爵アンドレエーを見て居た。前には消されて居た或る心内の火の生々した光輝が、再ナタアシャの裡に燃えて居た。ナタアシャは全然變つた。十人並の娘から乍にして舞踏會の時のやうな美しい者に今一遍爲つたのであつた。

公爵アンドレエーはビエールの傍へ行つた、と、ビエールは朋友の顔に新たな若々しい表情を認めた。

ビエールは、勝負の間、時にはナタアシャに背を向けて坐り、時にはナタアシャに面して、幾度も坐を變へた、そして、六回の三番勝負の間、始終ナタアシャと自分の朋友との様子を觀て居た。

『何か極く重大なことが彼の二人の間で起つて居るんだな』と、ビエールは思つた、と、喜悅と悲苦の同時の感情が、彼をかき亂し、勝負を忘れさせた。

六回の三番勝負の後で、さういふ風の勝負では駄目だと云つて、將官が起つた、で、ビエールは自由になつた。ナタアシャは、部室の一方の側でソオニヤやポリニスに話を爲て居た。ヴェーラは、微弱な笑顔で、公爵アンドレエーに何か云つて居た。

ビエールは朋友の所へ行つた、で、二人は内談では無いのかと尋いて、傍へ坐つた。ヴェー

ラは、ナタアシャに對する公爵アンドレエーの注意に氣が付いて、夜會では、殊に眞の夜會では、優さしい感情に關する優美な物語があるのが絶對に必要なと感じた、で、公爵アンドレエーが獨りで居る機會に乗じて、感情全般のことや、特に自分の妹のことに就て、彼と談話を始めた。ヴェーラは、自分が認めて居た公爵アンドレエーのやうな智力の高い客に對しては、自分の今やるべき爲事には自分の有ゆる實際的訓練を盡き無ければならぬと感じたのだ。

ビエールが二人の所へ行つた時に、彼は、ヴェーラは、落着き拂つてドン／＼話して居て、公爵アンドレエーの方が——滅多に無いこと——モチ／＼して居るやうであつたのを認めた。

『貴下何う思召すの?』と、ヴェーラは、意味ありげな微弱な笑顔で云つて居た。『公爵、貴下は、非常に洞察力がお有り、直ぐに人の性格を見透しておしまひなされるんですがね。貴下、ナタリイを何う思召しますか?』彼女は愛情が變らずに居ることの能る娘でせうか?。彼女は、他の女のやうに『ヴェーラは自分を指したのだ』一度男を愛すれば、何時までもその人に眞實になつて居ることが能る娘でせうか?。私はさういふのが眞實の戀愛だと思ふんでございますがねえ。貴上何う思召しますの、公爵?』

『私はお妹御を未ださう知つては居りませんから』と、公爵アンドレエーは、自分のモチ／＼

して居るのを、皮肉な笑顔で隠さうと爲て、云つて、「さういふ大切な問題を決定することはできません、それに、私は、女は、人好きのし無い者ほど、一層眞實なものだと認めて居るんです」と、彼は云ひ添へて、その時二人と一緒に立つたビエールを見た。

「え、それは仰しやる通りでございます、公爵。此頃では」と、ヴェーラは續けた（少い智力の人々が、自分たちは時代の特徴を發見し且評價し得たと想像し、又人間の特徴が時代と共に變るものだと思像して居て、大抵の場合さう云ふのが好きである通りに、その「この頃の」ことを云ひながら）「この頃では、娘の兄は、やい／＼云はれることの嬉しさの爲めに自分の心の裡のさういふ感情が往々抑へ付けられて了まう位十分な自由を持つて居るんですよ。ナタリイも、眞實を申せば、その方では随分動き易い方なんですわ」

ナタアシャのことへ再斯う返つて行つたことが、公爵アンドレーエをして、不快さうに眉を顰めさせた。彼は起たうと爲た、が、ヴェーラは、尙一層意味ありげな笑顔で話し續けた。

「凡そ彼の娘つ位人様に附け廻られるのは、先づござんすまいよ」と、ヴェーラは續けて、「ですが、極く此頃までは、誰も、彼の娘に大した印象を與へたことは一度もありませんよ。勿論、ねえ、伯爵」と、ビエールに振り向いて、「實はね、優しい感情の國へ、極く、極く、深入

を爲て居た私どものあの好い従兄のポリイスでもね……」。ヴェーラは、その時分流行つた戀の地圖のことを云はうと爲たのであつた。

公爵アンドレーエは顔を顰めた、そして、黙まつて居た。

「ですけど、勿論、貴下はポリイスの信友でいらつしやるでせう？」と、ヴェーラは彼に云つた。

「左様、彼の人は知つて居ります……」

「彼の人は多分ナタアシャに對する自分の小兒らしい戀のことを、貴下にお話したでせうね？」

「へえ、彼の人たちの間に、小兒らしい戀が有つたのですか？」と、公爵アンドレーエは、顔を不意に思はず赤くして、尋いた。

「左様なんですよ。従兄妹同士の間では、親密な交際が屢く戀になるのですからねえ。従兄妹同士油断のならぬ隣同士なんですせう、ね」

「いや、それは相違無し」と、公爵アンドレーエは云つた、そして、不意な、わざと氣な快活さで、ビエールに向つて、ビエールも、莫斯科に居る従姉たち——五十歳の婦人たち——に

對して、用心し無ければ不可と押搦ひ始めた、で、さういふ戲言の最中に、起つて、ビエールの腕を摺つて、彼を側へ伴れて行つた。

「で、何だね？」と、不思議さうに朋友の昂奮に氣を付けて居て、彼が、起ちあがりながら、ナタアシヤの方に向けた一瞥を認めたビエールは云つた。

「僕は是非、僕は是非君に話を爲度いことがある」と、公爵アンドレエーは云つた。「ねえ、女の彼の手袋（彼は、自分の愛する女に托せよと云つて、新に入つた組合員に與へらるゝ、共済組合の手袋のことを云つたのだ）。「僕は……否、何れ又話さう……」で、眼には奇異な咲笑を持ち、舉作は何だかソワソワした態で、公爵アンドレエーは、ナタアシヤに近寄つて、その側に坐つた。ビエールは、公爵アンドレエーがナタアシヤに何か尋ねて居ると、ナタアシヤは、眞赤になつて答へて居るのを見た。

が、その途端に、ベルグがビエールに近寄つた、そして、西班牙の事態に關して將官と聯隊長との間に起つた議論の間へ加はつて呉れと頼んだ。

ベルグは満足して、嬉しさうであつた。喜悅の微笑が一度も彼の顔を去ら無かつた。夜會は非常な成功であつた、そして、彼が見た他の夜會と全く同なじであつた。何も彼も全く同なじ

であつた、婦人たちの上品な談話も、骨牌も、骨牌の後で聲を揚げた將官も、沸茶器も、茶菓子も、悉皆さうであつた、が、未だ、ベルグが何時も方々の夜會で見て、摸ね度いと思つて居た物が一つ缺けて居た。未だ、紳士たちの間の何時もの聲高な談話や、何か眞面目な智力上の問題に關する議論が、缺けて居た。將官がさういふ談話の口を切つた、そして、ベルグがビエールをそれに引張り込んだ。

## (三十二)

次の日、公爵アンドレエーは、伯爵イリヤ・アンドレエーヴィイチの招待にまかせて、ロストオフ家へ食事に行つた、そして、家の人々と一緒に終日費やした。

その家の誰もが、誰の爲めに公爵アンドレエーが來たのか覺つて居た、そして、彼は、あからさまに終日ナタアシヤと一緒に居やうと爲た。

ナタアシヤの——怖けた、然し、幸福な、熱心な——心の裡のみならず、家内ぢうにも、畏怖の感情、何か知らず非常に重大な事が起る筈になつて居るといふ感情があつた。悲しさうな、そして、嚴格に眞面目な眼で、伯爵夫人は、ナタアシヤに話し掛けて居る公爵アンドレエーを見、

そして、彼が自分の方を見返へる度毎に、耻かしさうに、強て、彼と何か知らずも無い談話を始めやうと試みるのであつた。ソオニヤはナタアシヤの傍を離れるのが恐かつた、が、又自分が二人の傍に居れば、邪魔になりはしまいかと虞れた。ナタアシヤは、少時でも公爵アンドレーと指し向ひにされる度毎に、期待する狼狽で蒼くなつた。公爵アンドレーのウヂウヂして居るのが、ナタアシヤに印象を與へた。ナタアシヤは、彼が、自分に何かしら話し度いことがあるのだが、いよゝの所まで來ることが能き無いで居るのを感じた。

公爵アンドレーが晩になつて歸つて了つた時に、伯爵夫人はナタアシヤの傍へ行て、叫いた。

『えい？』

『母上様、後生ですから、今は何にも尋か無いで、ください。これは何うと云つて話しやうが無いんですもの』

が、此の返答に拘らず、ナタアシヤは、眼で前を見据えて、交り／＼昂奮したり、恐れたりして、長いこと母親の寢床に居た。ナタアシヤは彼が自分を褒めたことや、彼が外國へ行く積りだと云つたことや、彼がロストオフ家では何處で夏を送るか尋いたことや、彼がポリイスのこと

とを自分に尋いたことを、母親に話した。

『だけど、此様な、此様な心持……私今まで一度もしたことは無いのよ』と、ナタアシヤは云つた。『唯だ私彼の人は恐いわ、私何時も彼の人は恐いわ。何うしたことなんでせうね？。それが眞正のことだからと云ふんでせうかねえ。母上様、貴女寢たの？』

『いゝえ、お前、私だつても彼の人は恐いわ』と、母親が答へた。『さ、おやすみ』

『何うしても、私睡ちやア不可いわ。睡るなんて何て馬鹿なことせう。母上様、母上様、此様な心持は私今まで一遍もしたことが無いわ』と、ナタアシヤは、自分が自分の心の裡に認められた感情に對して驚き且恐れて、云つた。『夢にだつて見やア爲無かつたわよ……』

ナタアシヤは、オツラアドノエで始めて見た時に公爵アンドレーを戀したのだ、といふやうな氣がするのであつた。ナタアシヤは、その時でさへ最早自分のものとして選んで居た(ナタアシヤは、實際さう選んだのだと固く信じて居た)その人が——その同なじ人が、今再自分たちに出會つて、而も、自分に對して何うも無關心で無いらしいといふ此の不思議な、思ひ掛け無い幸福に對して、云はゞ恐れたやうになつて居た。

『何も彼もわざ／＼さう爲たかのやうぢや無いの——私たちが此所に居る間に、丁度彼の人

「彼得堡へ来るなんて、ねえ。それから、彼の舞踏會で逢ふなんて。何も彼も運命だわよ。確に運命よ、運命が何も彼も此所まで導いて来たんだわ。あの時でさへ、私、彼の人を見ると直ぐ何だか平常とは全然違つてる心持がしたんですもの」

「彼の人は何様なことを貴女に云つたのかい？彼の詩は何う云ふんだつたの？讀んでご覧……」と、公爵アンドレーエがナタアシャの書畫帖に書いた韻文のことを指して、母親は考へ込みながら云つた。

「母上様、彼の人が鰥夫なのが都合の悪いことでもあるんですか？」

「これ、其様な事を、ナタアシャ。神様にお祈りなさい。結婚は天で拵へられるものです」と、伯爵夫人は、佛蘭西の俚諺を引いて、云つた。

「母上様、貴女、私眞個に貴女を愛するのよ。私眞個に幸福だわよ」と、昂奮と幸福の涙を濺ぎ、母親を抱き締めながら、ナタアシャが叫んだ。

それと全く同なじ時に、公爵アンドレーエは、ビエールに向つて、ナタアシャに對する自分の戀愛と、その娘と結婚しやうといふ極まつた決心とを、話して居た。

その晩伯爵夫人エレーナ・ヴァシイリエヴナは夜會を爲た、佛蘭西の大使や、此の頃伯爵夫人の所へ極く度々訪ねて來だした皇族や、其他の身分の立派な婦人や紳士が集まつた。ビエールは其所へ下りて來て、部室々々をさまよつて、集中して考へ込んだ、陰鬱な顔容で、客たちを驚かした。

ビエールは、舞踏會から此方、引續いて自分を襲つて居た神經的な氣鬱の攻撃を感じて居る所であつて、それに負けてしまふまいと烈しい努力を爲て居るのであつた。彼の妻が皇族と密事を行ひだしてから、ビエールは、意外にも、侍従に任せられた、で、それ以來引續いて宮庭の連中の裡での退屈や耻辱の感觸を感じて居た、そして、人生の有らゆる物が空であるといふ彼の往時の考想が、だん／＼度々返つて來だして居た。

彼が、この頃、自分の被保護者のナタアシャと公爵アンドレーエとの間に或る感情があるのを認めたことが、自分自身の位地と朋友の位地との間の對照に因つて、彼の氣鬱を増したのであつた。彼は、又、自分の妻のことや、ナタアシャや、公爵アンドレーエのことも、考へることを避けやうと骨折つた。再有らゆる事が永遠に較べては無意義に見えた、再「何の爲めか？」といふ疑問が彼の前に立ちあがつた。

で、夜と無く、晝と無く、さういふ悪靈を追ひ拂はうと思つて、共済組合の爲事に強て身を委ねた。ビエールは、夜半に伯爵夫人の部屋から出て来た、そして、見すばらしい寝衣で、自分の天井の低い、烟で黒くなつた二階の部屋の卓子に就て、蘇格蘭の共済組合員との長い交通書類を寫して居た、と、誰かその部屋へ入つて来た。それは公爵アンドレエーであつた。

「やア、君か」と、ビエールは、考へ込んだ、不満な態で云つた。「今爲事中だ、ね」と、彼は、不幸な人々が自分の爲事を見る、人生の災害から遁れやうとするその顔容で、書寫帳を指しながら、云ひ添へた。

公爵アンドレエーは、新な生に充ちた、晴々した歡喜の顔で、ビエールの前に立つた、そして、他を顧み無い幸福の顔容で、ビエールの陰鬱な顔に氣が付かずに、彼に向つて微笑んだ。

「おい、君」と、彼は云つて、「昨日話さうと思つたんだがね、今日いよく話しに來たよ。僕は、此様な心持のすることは今までに一度も無いね。僕は、戀をして居るんだ」

ビエールは不意に深い溜息を吐いた、そして、公爵アンドレエーの側の長椅子の上へ自分の重い身體をドタリと下した。

「ナタアシヤ・ロストオフに、えゝ？」と、彼は云つた。

「左様だ、左様だ、極まつて居らあね。何だか虚偽のやうな氣が爲る、けれども、僕には到底堪へ切れ無いほど強い感情なんだ。昨日僕は甚く苦しかった、苦痛だつた、が、此の世の何物ともその苦痛を交換やうとは思は無いね。僕は今まで一度も眞個に生きたことは無かつたんだ、でも、僕は彼の女無しには到底生きて居られ無いよ。けれども、彼の女は僕に戀してるか知ら？……僕は彼女には年取り過ぎて……何故、君は何とも云は無いんだい？……」

「僕？。僕？。僕が何と云つたね？」と、ビエールは、不意に立ちあがつて、部屋の裡を歩きながら、云つた。「僕は何時も左様思つて居た……彼の娘は實だ……彼女は實に珍らしい娘なんだ……おい、君、頼むから、惻巧過ぎることを爲て呉れ給ふ勿、疑つちや不可、結婚し給へ、結婚し給へ結婚し給へ……さうすれば、君より幸福な人は誰も無いことになる、僕は受合ふね」

「でも、彼の女は？」

「彼女は君に戀して居るよ」

「愚事云つちや不可……」と、公爵アンドレエーは微笑みながら、ビエールの顔を見て、云つた。



「彼女は君に戀して居る、僕は知つてる」と、ビエールは腹立たしさうに叫んだ。

「いや、聞いて呉れ給へ」と、公爵アンドレーエは、ビエールの腕を摺つて、引き留めて、云つた。「僕が何ういふ状態なのか君は知つてるかね、僕は何うしても誰か知らに、此の物語を爲すには居られ無いんだ」

「うん、うん、どん／＼話し給へ、僕は大きい喜んで聞くよ」と、ビエールが云つた、そして、彼の顔が眞個に變つた、額の心配の筋が延びて無くなつた、で、彼は、喜ばしさうに、公爵アンドレーエの物語を聞いた。彼の朋友は全く異つた、新な人のやうに見えた、のみならず、全くさういふ人であつた。彼の倦怠、人生に對する彼の蔑視、彼の醒覺は何處へ行つたらう？。彼が全く遠慮無く話を爲る氣になり得るのは一人ビエールに對してのみであつた、が、ビエールに對しては、彼は自分の心の裡にある有らゆるものを打明けた。易々と、大膽に彼は迥然の將來に涉る計畫を立てた、彼は、父親の氣まぐれに對して自分の幸福を犠牲には爲得られ無いと云ひ、彼は、父親をして、何うでも斯うでも、結婚に同意させ、その女を好くやうに爲せるか、で無くば、父親の承諾を初から請はぬことに爲るか、何方かに爲ると云ひ、それから、彼は、自分の心を占領した感情をば、自分とは離れた、獨立した、不思議な物だとして、

驚いて居た。

「何様な人が、前に、僕が斯様なにまで戀を爲ることが能きのだと僕に云つたにしても、僕は何うしてもそれを信じ無かつたらうと思ふね」と、公爵アンドレーエは云つた。「僕が嘗て持つたことのある感情とは全然異つたものなんだ。世の中が、僕に取つては、二つの部分に割られて了まつたんだよ、一つは——彼の女で、其所では何も彼も幸福で、希望で、光明なんだ、所が、今一つの部分は——彼の女の居無い部分全體で、其所では何も彼も失意と暗黒なんだ……」

「暗黒と、陰鬱」と、ビエールは繰り返した、「左様だ、左様だ、僕にも解かる」

「僕は光明を愛せずには居られ無い、それは僕の咎ぢや無いんだ、で、僕は甚く幸福なんだ。君僕を理解して呉れるかね？。僕は君が僕の爲めに喜んで呉れるのを知つてるよ」

「左様だ、左様だ」と、ビエールは、優しさと悲しさの満ちた眼で朋友を見ながら、肯つた。彼の心の前に、公爵アンドレーエの運命の繪が花やかであればあるほど、ビエール自身の繪はますます暗く見えたのであつた。

結婚するのには、父親の承諾が要るのであつた、で、これを得る爲めに、公爵アンドレエーは父親に逢ひに、出發した。

父親は、息子の談話を、表面は平氣で、腹では怒つて、受け取つた。彼は、誰にしても何うすれば、人生が自分に取つて夫れ程終末に近づいて居るのに、彼の生活を變へ、その裡へ新しい物を入れやうと爲る氣に爲れるものなのか、その量見が實に解から無かつた。

「俺が思ふやうに、俺の生涯を終らせて呉れさへすれば、それから、何うしやうとも奴等の勝手なんぢやが」と、老人は一人で云つた。が、息子に對しては、彼が大切な場合には何時も用ゐるのであつたその外交手段を用ゐた。落着いた調子を裝つて、彼は公平に問題全體を調べた。

第一に、この結婚は、嫁の里の門地、財産、若くは、官職の點から觀ると、立派なものとは云へ無かつた。第二に、公爵アンドレエーは最早さう若くは無く、身體も弱かつた（老人はこの點に特に重きを置いた）、そして、先の娘は極く若かつた。第三には、公爵アンドレエーには息子があつて、ホンの少娘にそれを托すのは慇懃なのであつた。第四、即ち、最後に」と、父親は、息子を皮肉な顔容で見て、云つて、「何卒一年延すことに爲て呉れんかい、外國へ出て、

身體を善くして來いよ、お前の思ふやうに、公爵ニコライの爲めに獨逸人を探しておいで、それで、お前の戀、お前の情欲、お前の頑強——何とでもお前の善い方で宜いのぢやが——それがそれ程強いのであつたら、其所で結婚するが宜いわ。で、これが私の最後の言語ぢや、宜いか、最後ぢやよ……」と、老公爵は、何物も彼の決定を變へしめることが能き無いことを示す調子で、結論した。

公爵アンドレエーは、老人が、彼の感情か、彼の結婚者の感情かが、一年の試験に堪へ無いか、彼、即ち、老公爵自身がそのうちに死ぬるかであれば宜いのだと、思つて居るのを明白に見た、で、彼は、父親の意見通りに爲やうと決定した。即ち、結婚を云ひ込んで置いて、式を擧げることを一年後に延ばすことに爲やうといふのであつた。

ロストオフ家に對する最後の訪問から三週間経つて、公爵アンドレエーは、彼得堡へ歸つた。

母親と話を爲た次の日、ナタアシャは、ボルコオンスキイを待ち設けながら終日を送つた、が、彼は來無かつた、その次の日も、三日目も、尙且同なじであつた。ビエールもやつて來無かつた、ナタアシャは、公爵アンドレエーが父親に逢ひに行つたことを知ら無かつたので、彼の來

無い理由が分から無かつた。

さういふ風で三週間過ぎた。ナタアシヤは、何處へも行かうと云は無かつた、家の裡を、何にも爲無いで、ぶら／＼と影のやうにさまよつた、夜は人知れず泣いた、そして、晩にも母親の所へ行か無かつた。ナタアシヤは始終顔を赤くし、甚く腹を立て易かつた。ナタアシヤは、誰も彼も自分の當ての違つたのを知つて居て、自分を笑ひ、自分を憐んで居るやうな氣が爲た。心の裡の悲痛の如何にも烈しかつたに拘はらず、虚榮心に與へられた傷が悲しさを一層増したのであつた。

ナタアシヤは、或る日伯爵夫人の所へ入つて来た、何か云はうと試みた、が、不意に泣きだして了まつた。その涙は、何故罰せられたかその理由を知ら無い怒つた小兒の涙であつた。

伯爵夫人はナタアシヤを慰めやうと試みた。最初はナタアシヤは母親の言語を聽いて居た、が、不意にそれを遮ぎつた――

「最早止して頂戴よ、母上様、私彼の人のことは最早思は無いわ、最早思ひ度は無いのよ。でも、始終来て居て、最早來無くなつたのよ、來無くなつたのよ……」。ナタアシヤの聲は震へた、泣きさうになりだした、が、直ちに元へ戻り、落ち着いて、續けた――

「私最早結婚なんぞ寸毫も爲度く無いわ。私彼の人は恐いんですもの、私最早眞個に、眞個に其様な事なんぞ何でも無くなつたわ……」

この談話のあつた後の日、ナタアシヤは、朝それを着た時に履行つた巫山戯遊と特に聯想のある古い衣服を着て、早朝から、舞踏會以來止めて居た前の生活振を又やりだした。朝の茶の後、高い反響があるので、殊に好きであつた大廣室へ行つて、ソル・ファの練習を歌ひ始めた。最初の練習を了つた時に、ナタアシヤは尙且部室の眞中に立つて居て、殊に自分の氣に入つて居た一つの樂節を繰り返した。ナタアシヤは、響き渡つて、大きい部室の空虚な裡を満たし、それから緩々と消えて行くさういふ樂調の快さを、それが自分に取つて新しいものででもあつたかのやうに、嬉しがつて聞いて居た、そして、全く不意に快活な心持を感じた。

「何故、彼のことばかり其様に考へるんだらう、世の中はこのまゝだつて面白いんぢや無いの」と、ナタアシヤは自分に向つて云つた、で、足を唯だ反響する寄木細工の上には下さずに、一步毎に踵から爪尖へと足を曲げ（ナタアシヤは殊に好きであつた或る新しい靴を穿いて居た）、そして、自分の聲の響を聞いたと同なじな快味を以て、踵の規則正しい叩く音や、爪尖のキユウ／＼いふ音を聞き澄ましなから、部室の裡を彼方へ行つたり、此方へ行つたりして、歩

いて居た。鏡の傍を通りながら、ナタアシヤはその裡を覗いた。

『左様、彼は私よ』と、ナタアシヤの顔の表情は、自分を見て、云つて居るやうに見えた。『あゝ、眞個に善いわ。誰も私を要ら無いわ』

家僕が部室の何かを掃除しに入つて来やうと爲た、が、ナタアシヤはそれを入らせ無かつた。その男の後に戸を閉め、部室の裡の逍遙を續けた。ナタアシヤは、その朝は自分を愛し、自分のことに歡喜する、自分の好きな氣分に立ち返つて居たのであつた。

『彼のナタアシヤは何て美しい奴だらう』と、ナタアシヤは、第三者として、一般の男性として話しながら、自分のことを、さう云つた。

『美しくつて、聲も好し、若くもあり、そして、誰の邪魔にもなら無い、唯だ静にさせて置いてやるが宜い』が、何れほど静にさせて置かれても、ナタアシヤは最早静にして居ることは能き無かつた、そして、ナタアシヤは直にそれを感じた。

玄關で、廣室の戸が開いた、誰かが尋いて居た――

『お宅かね?』そして、足音が聞こえた。ナタアシヤは、鏡で自分を見て居た、が、最早自分が見え無くなつた。玄關の音を聞いたのだ。自分を見ると自分の顔が蒼かつた。

それは『彼の人』であつた。ナタアシヤは、開いた戸口で彼の聲を聞いたのみであつたが、確にさうと知つたのであつた。

ナタアシヤは、蒼くなつて、狼狽して客室へと飛んだ。

『母上様、ボルコオンスキイが來ましたよ』と、ナタアシヤは云つた。『母上様、これは恐いわ、堪まら無いわ……私厭だわ……苦しめられるのね。何うしたら宜いのよ?』

伯爵夫人がそれに答へる間隙の無いうちに、困まつたやうな、眞面目な顔で、公爵アンドレーエーが客室へ入つて來た。ナタアシヤの顔を見るや否や、彼の顔は嬉しさで輝いた。彼は、伯爵夫人とナタアシヤの手に接吻し、そして、長椅子の側に坐つた。

『随分暫時お目に……』と、伯爵夫人が云ひださうとしたが、公爵アンドレーエーは夫人の云はうと爲て居た問題に答へ、又、自分が云はうと爲て居ることを云ふのを如何にも急いで居るらしい態で、伯爵夫人に二の句を次がせ無かつた。

『父に逢ひに行つて居たものですから、暫時あがりませんでした、父に極く大切な談話を爲て置か無ければなら無かつたものですからね。私は昨夜歸つたばかりなんです』と、彼は、ナタアシヤをジロリと見ながら、云つた。『貴女にお話爲度いことがあるのですが、伯爵夫人』

と、彼は寸時黙まつて居てから、云ひ添えた。

伯爵夫人は、深い溜息を吐いて、眼を落した。

「何でも仰しやつてくださいませよ」と、伯爵夫人は、口を切つた。

ナタアシヤは自分が去るべきだと知つた、が、さう爲ることが能き無かつた、何かが咽喉をギユッと扼んだやうな気がした、で、禮儀を忘れて、見開いた眼で、公爵アンドレーエを真正面に見詰めた。

「直ぐにか知らず……今か知らず……いゝえ、左様な筈は無いわ」と、ナタアシヤは、考へて居た。

彼は再ナタアシヤを一寸と見た、と、その一瞥が、ナタアシヤの考想の違つて居無いことをナタアシヤに確信させた。左様、直ぐに此の刹那にナタアシヤの運命は決せられるのであつたのだ。

「早く彼方へおいでなさい、ナタアシヤ、今に呼んであげますからね」と、伯爵夫人が叫びた。

怖けた、懇願する眼で、ナタアシヤは、公爵アンドレーエと、自分の母親とを見て、そして、

出て行つた。

「私は、伯爵夫人、貴女のお娘御をお貰らひ申し度くつて参りましたんですが」と、公爵アンドレーエは云つた。

伯爵夫人の顔が眞赤になつた、が、夫人は何とも云は無かつた。

「貴下のお申し込みは……」と、伯爵夫人は、落着き拂つて、到頭云ひ始めた。公爵アンドレーエは黙まつて坐つて、伯爵夫人の顔を見て居た。「貴下のお申し込みは……（夫人はドギマギして躊躇つた）私どもには喜ばしうございます、で、私は承知いたします、私は喜びます、夫も……多分……ですが、彼の娘次第でございますから」

「貴女が、ご承諾をお與へくださるのでしたら、私から直接にお話しませう。ご承諾をお與へくださいますか？」と、公爵アンドレーエは云つた。

「諾」と、伯爵夫人が云つた、そして、手を彼にさし出した、で、厭悪と優しさとの混つた感情で、伯爵夫人は、公爵アンドレーエが、自分の手に接吻しやうと軀を曲めて居る間に、彼の額に接吻した。伯爵夫人の希ひは、彼を息子として愛さうといふのであつた、が、伯爵夫人は、彼が自分とは全然違つた人であるのを感じ、そして、自分が彼を恐れて居るのを感じたの

だ。

「夫が承諾しますことは、私お請け合ひをしますです」と、伯爵夫人は云つた、「でも、貴下の父上様が……」

「父には、この考案を話しました所が、結婚を一年後で無ければし無いといふ特別の條件で、承知しましたのです。これも、貴女にお話する筈でしたが」と、公爵アンドレーエが云つた。「成る程ナタアシヤは極く若いには違ひございませんが、でも——其様に先でございませんと……」

「何うもこれだけは已むを得ません」と、公爵アンドレーエは、溜息して、云つた。

「彼女を此方へよこしますから」と、伯爵夫人は云つた、そして、部屋を出て行つた。

「主よ、われ等を憐み給へ」と、伯爵夫人は、娘を探しながら、繰返し續けた。

ソオニヤが、ナタアシヤは寢室に居ると夫人に知らせた。ナタアシヤは、蒼い顔で、乾いた眼で、自分の寢臺の上に坐つて居た、聖書を見詰め、急いで自分の身體に十字を切りながら、一人で何か呟いて居た。母親を見ると、跳びあがつて、その方へ飛んで行つた。

「え、母上様……え、？」

「おいで、彼の人の所へおいでなさい。彼の人はお前を貰ひに来たんですよ」と、伯爵夫人は、ナタアシヤには冷然と見えた態度で、云つた。「左様……おいでなさい……」と、母親は、娘が駆けて行く時に、深い溜息を爲て、悲しさうに、残念さうに、呟いた。

ナタアシヤは何ういふ風にして客室に行き着いたか、自分でも分から無かつた。戸口を入つて、公爵アンドレーエの姿が眼に入ると、ビツタリ立ち止まつた。

「この他人が今私に取つて有らゆる物になるのか知ら？」と、ナタアシヤは、自分自身に向つて尋いた、そして、直ぐ答へた、「左様、有らゆる物だわ、今は最早此の人ばかりが、世の中の何様な物より私に取つては可愛いんだわ」

公爵アンドレーエは、伏目になつて、ナタアシヤに近寄つた。

「私は、初めてお目にかゝつた刹那から貴女を戀して居ました。好いお返答が伺へませうか？」

彼は、ナタアシヤを一寸と見た、と、ナタアシヤの眞面目な、情の籠つた顔容に驚ろかされた。その顔は、「何故お尋きなさるの？。何うしても貴下が知つて居るに違ひ無い事柄を何故疑がうのよ？、感じて居る事柄が何様な言語でも言ひ表はせ無い場合に、何だつて話を爲るの

よ』と、云つて居るやうに見えた。

ナタアシヤは、彼の傍へもつと近く来た、そして、止まつた。彼は、その手を撃つて、それに接吻した。

「貴女は私を愛しますか？」

「左様よ、左様よ」と、ナタアシヤは、殆ど怒つたやうに見える態で、云つた。ナタアシヤは深い溜息を爲た、今一つ爲た、呼吸がだん／＼速く爲つた、そして、嘔泣りあげだした。

「何です？。何うしました？」

「あゝ、私眞個に嬉しいわ」と、ナタアシヤは、涙のなか／＼微笑んだ。彼の上へもつと近く身を屈め、有り得ることかと怪んで居るかのやうに、寸時考へた、それから、彼に接吻した。

公爵アンドレーは、ナタアシヤの手を撃つて居て、その眼を見た、が、自分の心の裡には、ナタアシヤに對するこれ迄の戀の痕跡をも見出すことが能き無かつた。何か急な反動が彼の心の裡で起つて居たやうに思はれた、慾望の詩的な神秘的な快味は少しも其所に残つて居無かつた、唯だ、その代りに、ナタアシヤの女らしい、小兒らしい弱さに對する憐愍と、ナタアシヤの獻身や、信じ易いことに對する恐怖と、永久に自分をナタアシヤに結び付ける義務の、面倒な、

然し快い觀念とが、其所にあつた。斯ういふ實際の感情は、これ迄の感情ほど嬉しい詩的なものでこそ無けれ、もつと本氣で、もつと深かつた。

「一年経た無ければ不可いといふことを母上様からお聞きでしたかね？」と、尙且ナタアシヤの眼を凝視めながら、公爵アンドレーは云つた。

「これが（人が履く私のことを云つた）幼娘の私なんだらうか知ら？」と、ナタアシヤは考へて居た。「眞個に、今この時から、私が、父上様さへ尊敬なさるやうなこの何だか分から無い、好い、學門のある人と對等な妻になるのか知ら？。眞實だらうか知ら？。最早實際に人生を遊戯に爲て居ることは能き無いか知ら、私は成人になつたのか知ら、最早何の言語にも擧作にも、責任が私の上に置かれるやうになつたのか知ら？。あら、何を尋かれたのか知ら？」

「いゝえ」と、ナタアシヤは答へた、が、公爵アンドレーの問が解から無かつたのであつた。

「宥してくださいよ」と、公爵アンドレーは云つて、「だが、貴女は眞個に未だ若い、私の方は、人生の經驗を随分多く持つて居ますよ。私は貴女の爲めに恐れて居ます。貴女は未だ貴女自身を解して居ませんね」

ナタアシャは、彼の言語の意味を捉まへやうと骨折りながら、集中した注意で聞いて居た、が、解から無かつた。

『私の幸福を延期するの一年が、私に取つてはなかく、辛いのですが』と、公爵アンドレーは續けて、『それ迄には、貴女は自分のことを確にお知りなさるでせう。私は、一年経てば私を幸福に爲てくださることを願ひします、が、貴女は自由です、吾々の婚約は秘密に爲て置きませう、で、若し貴女が私を愛して居無いのだとお氣が付きましたら、或は又、貴女の愛が他へ……』と、公爵アンドレーは強て微笑みながら、云つた。

『何故其様なことを仰しやるのよ？』と、ナタアシャは遮ぎつた。『貴下が始めてオツラアドノエへいらしたその日から、私は貴下を愛して居たちやありませんか』と、ナタアシャは、眞實のことを云つて居るのだと固く信じて、云つた。

『一年経つうちに、貴女は御自分のことがお解りになるやうになりませう……』

『まるく一年なの』と、ナタアシャは、今始めて、結婚が一年延ばされるのだといふことが解つて、不意に叫んだ。『だけど、何故一年なのよ……何故一年なのよ……』公爵アンドレーは、この延引に對する理由をナタアシャに、説明し始めた。

『で、何うにも無ら無いんですか？』と、ナタアシャは尋いた。公爵アンドレーは、何の返答も爲無かつた、が、彼の顔がこの決定を變へることの不可能を言ひ表はした。

『眞個に厭だ。あ、眞個に厭だ、厭だ』と、ナタアシャは不意に叫んだ、そして、再啜泣あげだした。『二年待つうちに、私死ぬか知れ無いわ、駄目よ、あ、厭だ』。ナタアシャは戀人の顔を一寸見た、と、其所に同情の苦痛と當惑の様子を見た。

『いゝえ、いゝえ、私何でも爲るわ』と、不意に涙を止めながら、ナタアシャは云つた。『私眞個に嬉しいわ』

父親と母親がその部屋へ來た、そして、結婚同士へ祝儀を與へた。その日から、公爵アンドレーは、ナタアシャの結婚の戀人として、ロストオフ家を訪問し始めた。

## (二十四)

ボルコオンスキイとナタアシャの結婚に就ては、儀式的の結婚も披露も無かつた、公爵アンドレーがそれを主張したのであつた。彼は、結婚を延期した責任は自分にあるのだから、自分はその重荷全體を負ふべきだと云つた。彼は、自分の言語を何時までも守るべきであるが、ナ



タアシャをそれで縛ることを欲し無いから、全然自由な位地にナタアシャを置いて置き度いと云つた。ナタアシャは、若し、もう六月のうちに、彼を愛して居無いと感するのであつたら、彼を断る全くの自由を持つて居るといふのであつた。

ナタアシャも、ナタアシャの両親も、其様いふことがあるといふことを承知し無かつたのは、殆んど云ふまでも無いことだ、が、公爵アンドレーエーは自分の意見通りに爲やうと主張した。公爵アンドレーエーは、ロストオフ家へ毎日やつて来た、が、彼はナタアシャと約婚して居るやうには擧作は無かつた、彼は、ナタアシャには他人行儀な言語で話し掛けた、そして、ナタアシャの手にはばかり接吻した。

結婚の申込みを爲た日から、ナタアシャに對する公爵アンドレーエーの關係が、その前に二人の間にあつたものとは全く違つたものになつた、二人の關係は卒直で親しかつた。二人はそれまで相互に知り合つて居無かつたとも云ひさうに見えた。兩方とも、二人が何でも無かつた時分、相互に何ういふ風に考へ合つて居たかを、憶ひ起すのが好きであつた。今は、雙方とも前とは全然違つた者だと感じた——その時分には氣取つて居たが、今は、卒直で、誠實であつた。最初は、家内には、公爵アンドレーエーに對して、窮屈な感があつた。彼は他の世

界から来た人のやうに見えた、で、ナタアシャは、長いこと、自分の家の人々に公爵アンドレーエーを理解させやうと骨折つて居た、公爵アンドレーエーは他の人と甚く違つて居るやうに見えるのみで、實際は誰とも同なじであるといふことや、自分は彼を恐れて居無いし、又誰も彼を恐れるには及ば無いといふことを、ナタアシャは、得意で誰にも彼にも話したのであつた。

二三日経つと、家内の他の者も、公爵アンドレーエーを見馴れて、公爵アンドレーエーを加へて、自分たちの何時もの生活を平氣でやるやうに爲つた。公爵アンドレーエーは、伯爵には領地の管理方のことを、伯爵夫人やナタアシャには衣服のことを、ソオニヤには書畫帖や刺繡のことを、といふ風に、それ／＼話し方を知つて居た。時々、ロストオフ家の人々同士、或る時は、公爵アンドレーエーの前でも、さういふことが起つて来た道筋や、あからさまにさうなることの前途であつたやうな事件に對する驚愕を言ひ表はした、公爵アンドレーエーがオツラアドノエへ来たことや、自分たちが彼得堡へ来たことや、公爵アンドレーエーが初めて尋ねて来た時に、年取つた乳母が氣が付いたナタアシャと公爵アンドレーエーが似て居ることや、千八百〇五年に、アンドレーエーとニコライの出會つたことや、其他、今のやうになることの前途であつた種々な事

件が、家の人々に依つて話された。

家は、約婚した二人の居るのには何時も伴うところの倦怠と沈静のその詩的雰圍氣が満て居た。衆皆一緒に坐つて居る時に、屢誰も黙まつた。時々、他の者たちは起つて去つてしまつた、と、約婚の二人は、差し向ひに取り残されて、尙且黙まつて居た。二人は滅多に自分たちの將來の生活のことを話し合は無かつた。公爵アンドレーエは、その談話を爲るのが可怖く、又耻かしかつた。ナタアシャは、公爵アンドレーエの總ての感情を何時も見透して、それと同じ感情になるやうに、此の感情をも同にしたのであつた。一度、ナタアシャは、公爵アンドレーエに、彼の息子のことを尋き始めた。

公爵アンドレーエは顔を赤くした——それは、その時分彼には屢あつたことで、ナタアシャはそれを見るのが甚く好きであつた——そして、自分の息子は自分等とは一緒に居るやうにはなら無からうと云つた。

「何故なの？」と、ナタアシャは、吃驚して、云つた。

「彼の祖父から彼を取る事が能き無いんです、それに……」

「私何れほど可愛がつて上げるでせう」と、ナタアシャは、直ぐ彼の考想を見透して、云つ

た、「ですが、貴下は吾々が非難される原因になることを何でも避けやうとなさるんだわねえ……」

老伯爵は時々公爵アンドレーエの側へ来て、彼に接吻し、そして、ベエティヤの教育や、ニコライの位地に就ての或る問題に對する意見を尋ねた。老伯爵夫人は二人を見て、溜息を吐いた。ソオニヤは、始終二人の邪魔になることを虞れた、で、二人が二人限りになり度く寸毫も無い時にさへ、二人切りにして置て行かうとする語柄をこしらへやうと何時も骨折つて居た。公爵アンドレーエが話を爲る時には——彼は非常に善く物を叙するのであつたが——ナタアシャは得意で聞いて居た。ナタアシャが話を爲る時には、彼が自分を凝乎と吟味するやうな眼容で凝視して居るのに氣が付いて、ナタアシャは嬉しくもあり、可怖くもあつた。ナタアシャは、思ひ迷つて、自分自身に向つて、斯う尋いた「私の裡で此の人が搜して居るのは、何だらうか知らう。彼様な眼容で、搜して居るのは何なんだらう？」

時には、ナタアシャは、自分の持ち前の物狂しいやうな活快な氣分に落ち、又、その次には、公爵アンドレーエが笑ふのを見たり聞いたりするのが、甚どく好であつた。彼は滅多に笑は無かつた、が、笑ふ時には、彼は哄笑に全く身を委ねるのであつた、で、ナタアシャは、その哄

笑の爲めに彼にグツと近く引寄せられるやうに感じた。ナタアシャは、だん／＼近づいて来る別れといふ考察が自分を恐れさせたので無かつたら、全く幸福であつたに違ひ無かつた。公爵も亦、唯だそのことを思つたゞけでも、蒼く、寒くなつた。

彼得堡を去る筈であつた前日、公爵アンドレエーは、舞踏會の日以來、ロストオフ家へ來無かつたビエールを伴つて來た。ビエールは憤然して、モチ／＼して居た。彼は主に伯爵夫人に談話を爲た。ナタアシャはソオニヤと將棋盤に就て居て、其所へ一緒になれと、公爵アンドレエーを招いた。彼は二人の傍へ行つた。

「貴女古くからベズウホフを知つて居ませう、さうでせう？」と、彼は尋いた。「貴女彼の人好ですか」

「左様よ、彼の人は極く好いの、だけど、馬鹿々々しい人ですわ」

で、ナタアシャは、人々がビエールのこと、云へば何時もやるやうに、彼の放心の逸話、實は、彼に就て拵らへられた逸話を話し始めた。

「ねえ、私は彼の男に吾々の秘密を打明けたんです」と、公爵アンドレエーが云つた。「私は小兒の時から彼の男を知つて居ます。彼の男は黄金のやうな心を持つて居るんです。何卒、ね

え、ナタリイ」と、不意に眞面目になつて、彼は云つて、「私は直き旅に出る積です、この先何様なことになるか分りません。貴女も變るかも知れ無い……いや、それを云つちやア不可のでしたね。唯だ一つ——若し、私の居無い間に、貴女の身に何か起るのであつたら、……」

「何か起る氣遣が有つて？」

「何か困ることが出來たら」と、公爵アンドレエーは言語を追つた。「何卒、ね、マドモアゼル・ソフイ、若し何か起りさうであつたら、彼の男だけに行つて、助言と助力を頼んで下さい、決して他の者に頼んでは不可ませんよ。彼の男は、極く憤然した、偏人です、が、最も誠實な心を持つて居るんです」

父親も、母親も、ソオニヤも、公爵アンドレエーも、別離がナタアシャに與へる結果を先見することは能き無かつた。ナタアシャは、自分の前にある事柄を寸毫も知ら無いかのやうに、終日、赤くなり、昂奮し、涙無しで、家の裡をさまよつて居た。ナタアシャは、公爵アンドレエーが、それを最後として、ナタアシャの手に接吻したその時さへ泣か無かつた。

「去かずに居て下さいな」と、ナタアシャは云つたばかりであつた、が、その聲は、公爵アンドレエーをして、實際去かずに居ては不可のか何うか疑はせるやうな聲で、彼は、その聲

を長い後まで記憶えて居た。

彼が去つてしまつても、ナタアシヤは尙且泣か無かつた、が、五六日間、泣かずに、然し、何に對しても興味を持たずに、自分の部屋に坐つて、唯だ時々斯う云つて居た――

『あゝ、何故去つたらう？』

が、彼が發つてから二週間目に、ナタアシヤは、精神上の弱りから回復して、周囲の人々を皆な驚かした、そして、精神上の人相に於て、長い病氣の後の小兒の顔で見らるゝやうな變化を持つただけで、再元の自分になつたのであつた。

## (二十五)

公爵ニコラアイ・アンドレエーチ・ボルコンスキイの健康と性格が、その年の間、息子が彼の所を出た後で、著るしく弱くなつた。彼は一層腹立やすくなつた、そして、理由も無い奮激の爆發の衝撃を大抵何時も堪へたのは公爵嬢マリイアであつた。彼は、能きるだけ強く残酷な傷を公爵嬢に被らせるやうにと、公爵嬢の意識の中の一を感じ易い總ての箇所を一生懸命に捜し當てやうと爲て居るやうであつた。

公爵嬢マリイアは二つの情、故に、二つの喜びを持つて居た、それは、甥のニコルウシカと、宗教とであつた、そして、兩方とも老公爵の攻撃と嘲弄の何時もの主題であつた。何を云つて居るにしても、彼は、老嬢たちの迷信とか、小兒等を可愛がつて甘やかすこととかへ、談話を持つて行くのであつた。

『お前は彼（ニコルウシカ）を、お前自身と丁度同なじ老嬢に爲やうといふのぢやな。公爵アンドレエーは息子が欲しいので、老嬢は要らんのぢや』と、彼は云ふのであつた。

で無くば、マドモアゼル・ブウリヤンヌに話し掛けて、彼は、公爵嬢マリイアの前で、ブウリヤンヌは吾々の僧や聖畫が好きか何うかと尋き、そして、さういふ物を嘲弄するのであつた……。

彼は、始終公爵嬢の感情を傷けて居た、が、娘は彼を宥るすのは何の努力も要さ無かつた。彼は彼が公爵嬢に向つて爲た何事に對しても非難され得られやうか？、總べてさういふことに拘らず、自分を愛して居ることの公爵嬢には知れて居る父親が不公平であり得やうか？。それに實際公平とは何だ？。公爵嬢マリイアは、『公平』といふその誇らしい言語のことを決して考へもし無かつた。人生の有らゆる複雑な法規が、公爵嬢に取つては、一つの明瞭な、簡単な法規――

彼自身神でありながら、その愛の爲めに人間の爲めに苦しんだ「人」が定めた愛と献身の法則——に締め上げられて居たのだ。公爵嬢は、他の人々の公平や不公平などに何の交渉があらう？。公爵嬢が爲すべきことは、苦しみ、そして、愛する、唯だそれだけであつた、そして、公爵嬢はさう爲たのであつた。

冬、公爵アンドレーは荒涼丘へ来た、公爵嬢マリイヤには此所何年かの間覺えの無いほど、彼は、快活で、温和しくつて、愛情深かつた。公爵嬢は、彼の身に何事かが起つたことを感じたが、彼は妹に自分の戀のことは何にも云は無かつた。發つ前に、公爵アンドレーは父親と長く談話を爲た、そして、公爵嬢マリイヤは、二人が相互に不満らしく別れたことを認めたのであつた。

公爵アンドレーが去つて了まつた直き後、公爵嬢マリイヤは、荒涼丘から彼得堡に居る自分の朋友で、自分の兄と結婚するのだと——娘たちが何時も夢みるやうに——公爵嬢マリイヤが夢みて居たジュリイ・カラアギンへ手紙を遣つた。その女は、その時分、土耳其で殺された兄弟の爲めの喪に服して居たのだ。

「悲哀がお互の運命のやうです、私の好い優しいお朋友のジュリイ。

貴女のご不幸は、非常に恐いもので、それは、貴女がたをして、貴女や、貴女の較らべる者の無い善い母上様を、鍛へてくださる神のお恩寵の特別の表徴だと思ふより他、私には思ひ解くことができません。

あ、貴女、宗教がそして、宗教ばかりが——吾々を慰めるとは云ひませんよ——絶望から吾々を投つて呉れることが能きなのです。宗教ばかりが、その援助が無ければ人が悟ることの能き無い事柄を吾々に説き明して呉れることが能きのです、何の爲めに、又何ういふ理由からして、他の人を害さ無い、他の人が幸福になる爲めには欠くべからざる、そして、自分の幸福を見出すことの能き、善い高尚な人々が神のお手許へ喚び去られて、他の人を害し、自身に取つても、他の人に取つても、重荷である所の悪い者や、無用者が生かして置かれるのか、これは宗教で無ければ解から無いのです。

私が見た、そして、私が決して忘れ無い最初の死——私の親愛な小さい兄嫁の死——は、私に丁度同なじ印象を與へました。丁度貴女が運命を疑がひ、貴女の氣高いご兄弟が何故死な無ければなら無かつたのかとお尋きなざるやうに、私も、何ういふ理由で——誰にも一寸した

害一つ爲たことの決して無い、親切で無いことは考想一つでも持ったことの決して無い——小さい天使のやうなリザが死んだのが、不思議でなら無かつたのでした。それでも——ねえ、貴女——それから最早五年経ちました、で、智慧の無い私でさへ、今では、何故彼の女が死ぬのが必要であつたのか、何ういふ案配にその死が創造主の無限の恩寵の表現に他なら無かつたのか、瞭然と理解し始めたのです、神のお所業は皆な残らず、大抵は吾々には覺れ無いのですけれど、彼が造り給ふた者に對する彼の無限の愛の表現に外なら無いのですからね。

私は屢考へますの、彼の女は、母親の義務を悉皆爲すだけの力を持つには餘り天使のやうなあどけなさを持ち過ぎて居たのでは無いか知らなくて。若い妻としては、彼の女は非の打ち所は無かつたのですが、母親としてはさうまで行か無かつたかも知れません。さういふ風で、彼の女は、吾々に、殊に公爵アンドレーに、最も純潔な記憶や哀惜の情を残したばかりで無く、尙又、何うしても、私などが行くことは思ひも寄ら無いやうな位地を彼方で貰らつて居るのでせう。が、彼の女の方ばかりで無く、その天い恐しい死は、吾々の甚い悲痛に拘らず、私や兄の上に最も幸な影響を持つて居るのです。

私どもの不幸の時分、その刹那には、私は斯ういふ考想を持つことはできませんでしたが、その時には、斯ういふ考想が縦合起つたにしても、必然慄然として拂ひ除けましたでせう、けれども、今はその考想は明瞭で争ひ難くなつて居るのです。私は、私に取つては人生の主義になつて居ます福音の眞理を貴女に確信させ度いばかりに、斯ういふことを書いてあげるのですよ、吾々の髪の毛一本だつて、神の御意で無ければ落ちはしません。そして、神の御意の根本の主義は、吾々に對する神の無限の愛ばかりです、で、何様な事が吾々の上に落ちて來やうとも、悉皆残らず吾々の利益になることなのです。

貴女は、吾々が莫斯科で次の冬を送るか何うかとお尋きですが、貴女にお目にかゝり度いのは山々ですけれど、私はさう能きさうでも無し、又さう爲やうとも思ひませんの。そして、それがポナバルトのお蔭ですと云つたら、貴女は嘸ぞ吃驚なさいませうね。理由は斯うなのです、父の健康が眼に立つて弱くなりました、反對論を堪へることが能き無くつて、何でも直ぐ腹を立てるのです。申すまでも無く、政治問題だとそれが一番甚いのです。父は、ポナバルトが歐羅巴の有ゆる君主、殊に大カテリイナの孫の吾々の君主と同等の位地で交際して居るといふことを堪へることが能き無いのです。ご承知の通り、私は政治のことなんか一向氣に留め無いのですけれど、父からも聞き、父とミハイル・イヴァノヴィチとの談話からでも、世間で起

つて居ることを悉皆知つて居ます、そして、ボナバルトに與へられた名譽を悉皆聞きましたのです。今では、この地球上で、ボナバルトが大人物として——佛蘭西皇帝としては尙の事——認められ無いのは荒涼丘が唯一箇所あるばかりのやうなのですよ。

で、父は、此頃の事態を容して置くことが能き無いです。父は、主に自分の政治上の意見の爲めと、誰にも遠慮無く、自分の説を自由に口外する自分の習慣から多分面倒が起ると自分でも先見して居る爲めとで、莫斯科へ行き度く無いやうに、私には思はれるのです。莫斯科で醫者に掛かつて徳を爲るだけを其儘全然、ボナバルトに關する避け難い議論の爲めに、損を爲てしまひますでせう。何方にしても、莫斯科行きのこととは何れ直きに何とか極まりませう。

私どもの家庭生活は、兄のアンドレーエが留守なのを除けると、昔の通りで行はれて居ます。前の手紙で申しました通り、兄は此の頃大變に變りました。兄が不幸の打撃から全く回復したやうに見えますのは、やつと此の頃、今年になつてからの事です。兄は再、丁度私が彼を知つて居ます小兒の時の、人の善い、優しい、私は誰にも見たことの無いやうな善い心の人になりました。兄は、今は、人生が自分に取つて未だ終はつたのでは無いと感じて居るやうに、私には見えます。ですが、斯ういふ精神上の變化と一緒に、肉體上には甚く弱くなりました。ます

ます瘠せて、一層神經質になりました。私は心配でなりませんの、ですから、お醫者たちが餘程前から勧めて居た外國旅行を今兄がやつて居ますのを喜んで居ます。何うぞそれで身體が直つて呉れば宜いと思つて居ますわ。

貴女のお手紙では、兄は、彼得堡では、最も有爲な、教育のある、智慧のある若者の一人だといふ噂ださうですね。家族の自慢を宥してくださいますし——私は決してそれを疑ひませんでした。兄が此所で誰でも——彼の農夫どもから地方の貴族に至るまで——に爲て遣つた善い事は數へ切れ無いです。彼得堡へ行つて、兄は、價値通りに迎へられたのです。

何うして、斯う直ぐ噂が彼得堡から莫斯科へ飛んで行くのでせう、殊に、貴女のお手紙にあるやうな、兄が小さいロストオフ家の娘と約婚したさうだといふやうな、ホンの想像の、根も葉も無い噂なんぞは、眞個に可訝しいではありませんか。私には、兄が誰かと結婚しやうとは想像できませんわ、縦介爲るにしてからが、何うしても、ロストオフの娘なんぞとはありませんよ。その理由を此所で云ひませうか。第一、兄は故の妻のことを滅多に云ひはしませんけれど、それを失した兄の悲痛は、兄の心の裡で、その妻の後繼者を造り、小さい天使に繼母を與へる氣になるには、餘り深く蝕ひ込んで居過ぎるんです。第二には、私の確め得た限りでは、

その娘は、兄のアンドレーエーを引付けることの能き種類の女たちの一人では無いからなんです。私は、アンドレーエーがその娘を妻として選んだとは信じません、そして、私は、有りやうに云ひますが、私は、其様なことを願ひませんわ。

ですが、随分書きましたね、二枚目が最早やがておしまひですよ。左様なら、私の親愛なお朋友、神が彼の神聖な力強い注意の下に貴女をお保にならんことを祈ります。私の親愛な友のマドモアゼル・プウリヤンヌが貴女に接吻を送ります。

マ  
リ  
イ

(二十六)

夏の最中に、公爵嬢マリイヤは、瑞西に居た公爵アンドレーエーから手紙を受取つて、吃驚した。その中で、彼は、彼の不思議な、意外な通知を語つて居た。彼は、自分が若いロストオフと結婚したことを、妹に知らせた。その手紙全體が、約婚者に對する戀愛の熱心と、妹に對する優しい打明けた愛情で満ちて居た。彼は、自分が今戀して居るやうに、人を戀したことは決して無いこと、自分が人生の價値と意味を悉く見たのは唯だ今ばかりだといふことを書いた。彼は、父親には云ひながら、自分の計畫のことを、荒涼丘を最後に見舞つた時に、何とも

妹に云は無かつたのを宥して呉れと、頼んだ。

彼は、公爵嬢マリイヤは、さうと知つたら、自分で行つて、承諾を與へて呉れと父親に頼んで、その目的を達し得ずに、父親を怒らして、公爵嬢自身の上で父親の不快の全重荷を引受けることになるといふことを恐れて、公爵嬢には何にも云は無かつたのだ。

然かし、事件は、その時は未だ、今のやうに全く極まつては居無かつた、と彼は書いた。「その時には、父上様は一年延ばせとご主張なすつた、所が、今は六箇月、極められた時期の半分が過ぎて居る、そして、私の決心はますます固いのだ。醫者が此所の温泉に居ると云ふのだから爲方が無いのだが、それさへ無かつたら、私は露西亞に歸つて居たに違ひ無い、が、さういふ譯なので、歸るのは今三箇月先方へ延ばさなければなら無いのだ。お前は、私を知り、又父上様と私の關係を知つて居るだらう。私は父上様から何にも貰はんで宜い。私は、これまで獨立であつた、そして、何時までもそれで居やうと思ふのだ、が、父上様の意に反した事を爲るとか、最早長くは吾々と一緒に居まいと思はれるのに、その怒を起させるとか、いふことは、私の幸福の半分を破壊してしまふことなのだ。私は今父上様にも手紙を上げる、で、お前は、好い時を選んで、その手紙を上げてお呉れ、そして、何うか、父上様がこの事件を一體何う見て



おいでなのか、又は、三月だけ時期を早めることに同意して下さる希望が少しでもあるのか  
何うか、私に知らしてお呉れ」

長い躊躇と、疑念と、祈禱との後で、公爵嬢マリイアは、父親に手紙を渡した。次の日、老  
公爵は公爵嬢に穩かに云つた――

「私が死ぬるまで待てと、兄様に書いてやつて呉れ……さう長く待つには及ぶまい。直ちに  
自由にしてやるからな」

公爵嬢は何か返答を爲やうと爲た、が、父親は、何にも云はせ無かつた、だん／＼聲高にな  
つて、言語を續けた。「結婚するなら爲ろ、結婚するなら爲ろ、おい、貴様……善い親類だ……  
俐巧な奴等だ、えい？金持だ、えい？。うん、左様だ、ニコルウシカにやアえらい宜い繼母に  
なるぢやらうよ。明日でも結婚するが宜いと書てやつて呉れ。ニコルウシカにその女を繼母に  
してやつて了まうが宜い、私は小さいブウリヤンヌと結婚してやる……は、は、は、で、奴にも繼  
母をこしらへてやるわい。が、唯つた一つ、私は、これより上に女を家へ入度く無いのぢや、彼奴  
は結婚して、自分で何處へでも行つて暮らすが宜いのぢや。多分お前も出て行つて彼奴と一緒  
に暮らすぢやらうな？」彼は、公爵嬢マリイアに振り向いた、「大に結構ぢや、ご機嫌克う」

この破裂の後、公爵は再とその問題を口に爲無かつた。が、息子の氣の利か無い所業に對す  
る彼の壓へた怒が、娘に對する取り扱ひの中に漏らされたのであつた。彼は娘を嘲弄し、困ま  
らせるこれまでの問題に、新たなもの――繼母の話とマドモアゼル・ブウリヤンヌに對する艶  
事――を加へた。

「彼女に私が結婚せまいものか？」と、彼は娘に云ひ／＼した。「立派な公爵夫人になるわい」  
で、其後は、公爵嬢マリイアは、當惑し且驚いたことには、父親が實際その佛蘭西女にだん  
だん親しく接近し始めて居るのに、氣が付きだした。公爵嬢マリイアは、公爵アンドレーに  
手紙を遣つて、父親が何ういふ風に前の手紙を取つたかを知らせた、が、父親の氣が折れる希  
望はあるのだと云つて、兄を慰さめた。

ニコルウシカと、その教育と、兄のアンドレーと、宗教とが、公爵嬢マリイアの喜悅で、そ  
して、慰籍であつた。が、さういふものから離れて、公爵嬢マリイアは、誰でも個人々々の希  
望を持つて居無ければなら無いものであるのだから、自分の心の最も奥な秘密な所に於て、公  
爵嬢の生涯の重な慰籍の根源であつた隠れた夢や希望を抱いて居た。この慰籍の夢や希望は、  
公爵嬢の「神の人々」――公爵には知れずに、公爵嬢を訪ねて来る狂人染みた豫言者だの、巡

禮たち——に依つて與へられたのであつた。

公爵嬢マリイヤは、長く生きて居れば居るほど、人生に對する經驗や觀察が増せば増すほど、ますます、此所の此の世で快樂を覺め、その有るべからざる、幻想的な、罪の深い幸福を得やうとして、勞し、苦み、努め、互に害し合ふ人々の近視的であるのに驚くのであつた。公爵アンドレーは妻を愛した、その妻は死んだ、彼はそれで足れりとし無かつた、彼は、今一人の女に自分の幸福を結び付けやうと爲た。彼の父親は、アンドレーに對しては、もつと身分が高いか、さも無くば、もつと金持の家から嫁を貰ひ度かつたので、アンドレーの結婚を好ま無かつた。さういふ風で、彼等は、悉皆、利那の間しか續か無い幸福を得んが爲めに、努め、苦み、あがき、自分たちの心、自分たちの永遠の靈魂を汚して居るのであつた。

吾々ばかりがそれを知つて居るのでは無かつた。神の子、基督が、地の上に降つて、この人生は唯だ利那のもの、唯だ試煉に過ぎぬものと、吾々に告げられたのだ、それでも尙吾々はこの人生にかじり付き、その裡で幸福を見出さうと思つて居る。「誰もそれに氣が付か無いのは何うしてだらう？」と、公爵嬢マリイヤは怪しんだ。「公爵の眼に觸れることを——酷い目に逢ふからといふのでは無く、罪を犯すやうに公爵を誘惑してはならぬと思つて——恐れて、裏階

段から私の所へ來る、行囊を肩にしたあの卑められた神の人々の他、誰もさうで無い。家や、故郷を捨てること、浮世の幸福を全く思ひ捨てること、何物にも縋らずに、人に少しも害を爲すに、自分たちを追ひ拂ふ人々の爲めにも、自分たちを救つて呉れる人々の爲めにも、同なじやうに祈りながら、各自名を變へて、手織りのスモック服で、諸方其れから其れへと漂泊行くこと——その眞理やその生活より高いところの眞理や、生活は、世の中に一つも無い」

三十年以上も、跣足で鎖を引きながら、漂泊して居る、痘痕のある、五十歳の、物靜な、小さい、フエドシウシカといふ巡禮があつた。公爵嬢マリイヤは、その女が殊に好きであつた。或る日、暗い部屋で、聖畫の前の燈ばかりの光の裡に坐つて居る時に、フエドシウシカは自分の履歷を公爵嬢に話した。公爵嬢マリイヤは、不意に、フエドシウシカが人生の眞正の道を發見した唯だ一人の人だといふことをば、公爵嬢自身巡禮に出やうと決心した位、強く感じたのであつた。フエドシウシカが寢に行つて了まうといふと、公爵嬢マリイヤは、その事を長い間考へた、そして、到頭——何れほどそれが奇異な事にしても——何うしても巡禮に出やうと決心した。公爵嬢は自分の了簡を、教父アキンファイといふ修道士だけに打ち明けた、その僧は、公爵嬢の企畫に賛成した。巡禮たちに贈り物を爲る爲めだと云ひこしらへて、公爵嬢は、巡禮の支

度悉皆——スモック服、編んだ靴、袴付きの上衣、黒い頭布——を調べた。公爵嬢は度々、さういふ物を入れて置いた秘密な箆筒の所へ行つて、自分の計畫を實行する機會が来たか、來無いか、決し兼ねて立つて居た。

巡禮たちの物話を聞いて居るうちに、屢、その單純な言語——彼等に取つては機械的になつて居るのだが、公爵嬢の耳には、最も深い意義に満ちて居るやうに聞こえた——が、公爵嬢が幾度も、何も彼も投げ捨て、家から逃げ出し度く思つたほどまで、公爵嬢を動かしたのであつた。想像の裡では、公爵嬢は最早、フエドシユシカと一緒に、粗いスモック服を着て、行囊を負ひ、杖を突いて、美望の心を離れ、この世の愛を離れ、有らゆる慾望を離れて、聖から聖へと辿る巡禮に出て、埃だらけの路をテク〜歩いて、そして、到頭、悲哀も無く、嘆息も無く、永久の喜悅と幸福のある彼所へと行く自分を見て居たのであつた。

『私一つの場所へ行つて、其所で祈つて、其所に慣れ、其所を愛するやうになる間も待た無いで、前方へと行くわ。それで、私脚が利かなくなつて了まうまで行つて、何處かで倒れて、死んで、到頭、悲哀も嘆息も無い彼の靜な永遠の港へ行つて了まうわ……』と、公爵嬢マリイヤは思つた。

が、それでも、父親を見ると、小さいニコルウシカを見ると尙一層、公爵嬢の決心がぐら付いた、人知れず泣いた、そして、自分は罪人だ、自分は神よりも父親や甥をもつと愛して居るのだと感じた。

## 第四章

## (一)

聖書の傳説が吾々に語るところに依れば、爲事の無いこと——怠惰——が、墮落し無い前の最初の人の幸福の一状態であつたといふのだ。怠惰を愛する心は、墮落した人の裡にも尙且同なじであるのだ、が、咒咀は未だ人間の上に重く掛かつて居る、で、吾々は各自の額に汗して食は無ければなら無いからばかりで無く、尙又、吾々の道徳上の資質からして、吾々は情けて平和で居ることは能き無い。祕密な聲が、吾々は情けて居ては悪いと、吾々に告げるのだ。若し、人が、情けて居ながら、役に立ち、自分の義務を爲つ、あるのだと、感じ得るやうな状態を發見することが能きたのであつたら、その人は、原始的幸福の一面に達したのであらう。で、さういふ義務的の、立派な怠惰の状態が、一つの大きい階級——軍人階級——に依つて享有せられるのだ。軍人の勤務の主な誘致力が、これまで何時も成り立ち、又、今後何時も成り立つであらうと思はれるのは、その義務的な立派な怠惰に於てゝある。

ニコライ・ロストオフは、千八百〇七年以來、デニソフのであつた中隊の長として、バヴログラアド聯隊に居る間、この幸福な特權を十分に享有して居た。

ロストオフは、自分の同僚や、部下や、長官には愛され尊敬されて、自分の生活には十分満足して居たけれども、莫斯科の往時の知人たちには何方かと云へば無作法だと思はれたらうと思ふやうな、卒直な、人の好い男に爲つて居た。この頃——千八百〇九年——は、家から手紙の裡で、家の財政状態がだん／＼悪くなつて行くので、今が老親の心を喜ばせ慰める爲めに歸るべき丁度その時なのだといふ母親からの訴へを、だん／＼度々見出したのであつた。

さういふ手紙を読む度に、ニコライは、人生一切の紛糾から自分を區劃つて、其様に靜に平和に生活して居る境遇から、家の人々が自分を引きすり出し度がつて居るのを見て、恐怖の苦痛を感じるのであつた。彼は、干與はら無ければなら無い種々な面倒なことや、用務のある、用人の計算のある、種々の喧嘩や計略のある、種々な縁故のある、社交界のある、ソオニヤの戀と、その女との約束のある、人生のその渦中へ早晚再跳び込ま無ければならぬのだと感じた。さういふ一切のことは、恐しく面倒で込み入つて居た、で、彼は、家へ歸へる考へなどこのことは一切云はずに、『我愛する母』で、始まつて、『貴女の従順な息子』で終る、定式通りの

佛蘭西語の冷淡な手紙で、母親の手紙に答へた。

千八百十年に、彼は、ナタアシャがボルコンスキイと結婚したことや、老公爵が承諾し無いので、結婚は一年先きへ延すことを知らせる家からの手紙を受け取った。この手紙がニコライを悲しませ、心痛させた。第一、彼は、自分が家族の誰もより可愛く思つて居たナタアシャを家から失つて了まうのを悲しんだ。第二には、彼は、自分の驃騎兵の見地から、自分にして家に居たものなら、ボルコンスキイと縁を結ぶのが決してそれ程大した名譽では無いといふことや、若しボルコンスキイにして是非ナタアシャを貰ひ度いのなら、狂人染みた年取つた親父の承諾なんぞ得無いでも一向差し支への無い筈だといふことを、このボルコンスキイといふ男に思ひ知らせてやらうものをと、自分がその時家に居無かつたのを残念がつた。

寸時、彼は、ナタアシャを見る爲めに賜暇を請はうかと躊躇つた、が、その時、機動演習が丁度近寄つて居た、それに、ソオニヤのことや、世間の七面倒なことが、憶ひ出された、で、彼は再歸ることを延ばした。

が、同なし年の春、彼は、父親に知らせずに書いた母親からの手紙を受け取つた、その手紙は彼にいよゝ決心させた。母親は、ニコライが歸つて、事を見無ければ、領地全部公賣になつて了まつて、家ぢうを食になると書いて来た。伯爵は眞個に弱く、ミイランカに全然信任し、眞個に人が好いのだから、誰も其所へ附け込むので、事態はだん／＼いけなくなるといふのであつた。「お願ひです、お前が、私や家ぢうを不幸にさせ度く無いとお思ひなら、何うぞ、直ぐ歸つて来てください」と、伯爵夫人は書いて居た。

その手紙はニコライに効力が有つた。彼は、彼の義務が何であつたかを彼に示すやうな、中庸者の常識を持つて居た。

今彼は、義務として、軍隊から退か無いにしても、責めて賜暇を得て家へ歸るだけのことは爲無ければなら無かつた。何故歸ら無ければならぬのか、それは何とも云ひ得無かつた、が、午食後の晝睡の後で、彼は、長いこと乗つたことの無い癖馬の、水青の牝馬に鞍を置くことを命じた。

彼は馬に汗泡をか、せて歸つて来た、そして、ラヅルウシカ——彼は、デニソフの古い侍僕を續いて使つて居たのだ——や、その晩來合せた同僚たちに、彼が賜暇を願つて、そして、歸省することを話した。彼に取つては、自分が、大尉に進められたか何うか、又は、(自分に取つては大切な事件であつた) 聖アンナ勳章をその直ぐ前の機動演習に對して授けられたか何う

か、司令部から聞かずに、行つてしまふといふのが、不思議なことであり、且、信じ難いことであつた。伯爵ゴルウホフスキイが直切倒して買はうと爲て居た彼の三匹の茸毛馬を、その波蘭の伯爵に賣らずに、斯ういふ風に去つてしまふのが、彼に取つては、思へば、不思議であつた。ロストオフは、その馬悉皆で二千留は得られるといふ賭を爲たのであつた。驃騎兵が、彼等の最負の美人マダム・ボルゾオフスキイの爲めに舞踏會を催した槍騎兵を壓倒する爲めに自分たちの最負の波蘭美人、マダム・プシヤステツキイの爲めに催さうと爲て居た舞踏會が、ロストオフ自身が居無くつて、何うして催され得るのか不思議で堪まら無かつた。が、彼は、有らゆるものが馬鹿々々しく、そして、込み入つて居る所へ行く爲めに、一切の物が、善く、そして、明瞭であるこの世界を去らなければならぬことを知つて居た。

一週間経つと、休暇が許された。彼の同僚は——同じ聯隊のものばかりで無く、全旅團の連中まで——ロストオフの爲めに、一人前十五留の會費の宴會を開いて呉れた。二つの樂隊が樂を奏し、二つの合唱が歌つた、ロストオフは少佐バツフとツレバクを踊つた、酔拂つた將校たちは、彼を空へ投げ上げ、彼を抱き、彼を下した、第三中隊の兵卒たちが今一遍彼を肩上げた、そして、萬歳を唱へた。それから、彼等は、ロストオフを橋に載せて、途中の最初の驛亭まで

見送つた。

行旅の最初の半分、クレエメンチユグからキイフまでの間、ロストオフの總ての考想が——旅客には有り勝である通り——彼が後に殘したもの——彼の中隊——の方へばかり向いて居たが、旅程の最初の半分の揺られて了まうと、彼は、自分の三匹の茸毛馬や、給養係のドジョイヅエイキイを忘れ始め、オツラアドノエへ着いたら何ういふことを見出すかと不安心になり始めて居た。家へ近くなればなるほど、彼の家に對する考想が、ますます強く、眞に一層強くなるのであつた（宛然、心的感情も、距離の二乗に反比例をなす加速度の法則に従ふのであるかのやうに）。オツラアドノエに一番近い驛亭で、彼は、櫓の馭者に三留の酒料を遣つた、そして、小兒のやうに、家の昇降段を息をも續がす駈けあがつた。

最初の出會の昂奮の後で、期待の後での失望の不思議な感情——『尙且前と同じだ、俺は何故彼様なに急いだのだ？』といふ感情——の後で、ニコライは、家の元の世界に落ち着き始めた。父親も母親も、唯だ少し年取つたばかりで、尙且前と同じであつた。彼等に於て新しかつたことは、前には決して彼等の間に見たことの無かつた或る不安と、時々意見の違ふこととであつた。そして、彼は直ちにそれは彼等の位地の困難である爲めだと知つた。

ソオニヤは今彼れ此二十歳であつた。最早その上奇麗にはなるまい、その上好くなる望みは無かつた、が、今有るだけで結構であつた。ソオニヤは、ニコライが歸るや否や、戀と幸福で満ち溢れて居た、そして、彼に對するこの娘の忠實な堅固な戀が、ニコライの心を喜ばした。

ベエティヤとナタアシャが、家ぢうの誰よりもニコライを驚かした。ベエティヤは、最早聲變りの爲掛けて居る十三歳の大きい奇麗な少年であつた、彼は、快活と氣の利いた惡戯とに満ちて居た。ニコライは、ナタアシャに對しては、暫時の間驚きが止ま無かつた、そして、ナタアシャを見ては、笑つて居た。

「お前は全然變つたねえ」と、彼はナタアシャに話した。

「何う？。縹緞が悪くなつて？」

「いゝや、全くその反對だ、が、何といふ位が能きたことだらう。全く公爵夫人だね」と、彼はナタアシャに呷いた。

「左様よ、左様よ、左様よ」と、ナタアシャは、はしやいで、叫んだ。

ナタアシャは、公爵アンドレエーの戀や、オツラアドノエへ訪ねて來たことの、物語を全然

ニコライに爲た、そして、公爵の最近の手紙を彼に見せた。

「で、貴下喜んでるの？」と、ナタアシャは云つた。「私今は眞個に落ち着て居て、幸福なですよ」

「大に喜んでる」と、ニコライが答へた。「彼の男は實に立派な男だ。では、お前は非常に戀してるのかね？」

「何う云つたら宜いでせうね？」と、ナタアシャは答へた。「私は、ポリイスにも、吾々の先生にも、デニソフにも、戀してよ、だけど、今度のはそれとは全然違ふのよ。私靜な、落ち着いた心持なの。私彼の人より善い人は世の中に一人も無いことを知ってるんですわ、それで、私今は落ち着いて、満足なんですわ。往時にあつた事とは全然違つてるの……」

ニコライは、結婚が一年延ばさるゝのに對する自分の不満を云ひ出した。が、ナタアシャは、憤然となつて、彼に掛つて行つて、それより他に爲方の無いこと、父親の意に反して家族の間へ入つて行くのは、恐しいことだといふこと、それから、自分はさういふことは承諾し無いことを、ニコライに向つて證明した。

「貴下には少しも、少しも、解から無いことだわ」と、ナタアシャは云ひ續けた。

ニコライは寸時止まつた、それから、彼もナタアシャに同意すると云つた。  
兄は、ナタアシャを見ては、屢驚いた。ナタアシャが自分の戀慕つて居る約婚の戀人と別れて居る娘であるとは、何うしても信せられ無いやうに思はれた。ナタアシャは、落ち着て、物静で、何時も少しも變らず快活であつた。これが、ニコライを驚かし、そして、ボルコンスキイとの約婚を少し懷疑的に見させたのであつた。彼は、ナタアシャが公爵アンドレーと一緒に居る所を未だ一度も見無かつたから、尙更、ナタアシャの運命が最早全然極まつたものは、信じ得られ無かつた。彼には、未だ此の申込まれた結婚には何だか眞實で無い物があるやうに思はれたのだ。

『何故、延すのだらう？ 何故二人は正式に約婚し無いんだらう？』と、彼は思つた。

或る時、妹のことを母親に話して居て、彼は、母親も、心の底では、時々彼と同じやうに、その結婚を懷疑的に見て居ることを發見して、驚くと共に、幾らか満足も爲たのであつた。

『そらね、斯ういふ文面だわね』と、すべての母親が、自分の娘の結婚上の幸福に對して持つ彼の慾張つた肚の裡の感情で、公爵アンドレーからの手紙を息子に見せながら、母親は云つた、『十二月までは歸ら無いと云つて来て居るんです。歸れ無いといふ理由は一體何でせうね？』

病氣、必然さうなんでせう。身體が極く弱いんです。ナタアシャに云つてはいけませんよ。彼女が勢が好いと云ふんで、間違へてはいけませんよ、あれは、彼女が娘として持つ最後のはしやぎなんだよ、手紙を見る時の彼女の様子は、私には善く分つて居るんだからね。でも、まあ神様のお蔭で萬事都合好く行くだらうと思ふんです』と、母親は何時も結論した、『彼の人は眞個に立派な人なんだからね』

## (二)

家に居る始めのうちは、ニコライは、眞面目で、そして、ぐつたりと爲て居ることさへあつた。彼は、母親が、監理させる爲めに彼を喚んだ馬鹿々々しい用件に干與はら無ければならぬことが、五月蠅つて爲方が無かつた。成るべく早くその重荷を下してしまはうと、彼は、歸つてから三日目に、何處へ行くのかといふ尋ねには何とも答へずに、佛然して家を出て、顔を擧めて、ミイテンカの住居へ入つて行つて、總勘定を出せと言ひ付けた。總勘定とは何ういふものであつたのか、ニコライは、狼狽して當惑したミイテンカほども知つて居無かつた。談話と、ミイテンカの勘定とは長くはかゝら無かつた。住居の入口で待つて居た村長や、村



會議長や、村の書記は、恐怖と面白さで、最初は、間斷無くだん／＼調子高になつて行く若伯爵の聲の烈しい轟と、次ぎには、續げざまに投げ掛ける恐しい罵詈の言語とを聞いた。

「盜賊。思知らずの獸類。……犬のやうに擲つてやるぞ。……父上様を相手にするのたア違うぞ……強盜……」といふ風に。

それから、同なじやうな恐怖と面白さで、それ等の人々は、若伯爵が、赤い顔で、血走つた眼で、頸筋を捉まへて、ミイテンカを引摺り出し、言語の間の適當な時毎に、非常に巧く蹴りながら、『出て行け。二度と俺の眼に觸れんやうな所へ行つちまへ、悪黨』と、怒號つて居るのを見た。

ミイテンカは、眞逆さまになつて、入口の六段を跳び降り、灌木林へと逃げ込んだ。この灌木林は、オツラアドノエの罪人たちの避難所として有名であつた。ミイテンカ自身も、町から酔拂つて歸つて来て、その灌木林に隠れたことがあるし、オツラアドノエの住人で、ミイテンカから隠れ度い場合に、その灌木林の救助力のお蔭を蒙つたものが少く無かつた。ミイテンカの妻と、義妹とが、怖ぢけた顔で、てか／＼した茶沸器が沸いて居、用人の高い寢臺に綿の入つた綴仕立の蒲團が掛つて居るのが立つて居る部室の戸口から、廊下を覗いて居た。

若伯爵は、さういふ者どもを見返りもせず、大息を吐いて、ドシ／＼歩いて、傍を通り過ぎて、家へ入つた。

伯爵夫人は、直きに、女中たちの口から、用人の住居で起つて居た事件を聞いた、そして、一方では、今自分たちの状態が好くなるだらうといふ考想に慰められたもの、他方では、又、その喧嘩が自分の息子に及ぼす影響に就て、不安を感じたのであつた。

伯爵夫人は、幾度も足を爪立て、息子の部室の戸口へ行つて、彼が煙管を續けて飲み換へて居る間、様子を覗がつて居た。

次の日、老伯爵は、息子を片隅へ引張つて行つて、おど／＼した笑顔で、彼に、『だが、ねえ、お前、彼様な怒る理由は寸毫も無かつたのぢや。……ミイテンカから全然聞いたのぢやがね』

「俺にも解つてる」と、ニコライアイは思つた、『此様な狂人染みた世界では、俺には何事も判断することが能きつこは無い』

「お前は、この七百八留が記入して無いので怒つたといふでは無いか。だが、それ、これは、復讐記ちやから、前方へ送つてあるのぢや、お前は、次の頁を見んかつたのぢや」

「父上様、彼奴は悪黨で、盜賊ですよ、私受け合ひます。それに私の爲たことは、最早爲ち

まつたことですから、今更、何うとも爲やうがありませんよ。ですが、貴下のお氣に召さんといふのなら、私は彼奴には何にも云はんで置きませう』

『いや、お前』老伯爵はどきまぎした。彼は、自分が妻の財産の管理を誤つて、小兒等に氣の毒なことを爲したのは、承知して居た、が、彼は、その状態を何う直せば宜いかといふ考案は少しも持つて居無かつた』いや、何卒、是非やつて呉れ、私は年を取つたからな。私は……』

『いや、父上様、私の爲たことが若しお氣に召さ無かつたら、ご免なさいまし。私は、此様な事は貴下よりも知らんのですから』

『此様な農夫どもだの、錢のことだの、複記だの、其様なものは皆七里けつばいだ』と、彼は思つた。『前には、骨牌の勘定は解つたこともあつたけれども、複記の簿記なんて到底俺に解る氣遣無しだ』と、彼は自分自身に向つて云つた、そして、その時から、彼は、家の事の處分には其上更に手を出さ無かつた。が、或る日、伯爵夫人が、息子を自分の部屋へ喚んで、自分が二千留に對するアンナ・ミハアロヴナの約束手形を持つて居ることを彼に話し、そして、それを何う爲るのが一番宜いと思ふか、ニコライに尋いた。

『え』と、ニコライは答へて、『貴女は私次第だと仰しやるんですね。私はアンナ・ミハ

ロヅナは嫌です、ポリイスも嫌です、けれども、彼の人たちは吾々の朋友です、そして、彼の人たちは貧乏です。だから、私は斯う爲るんです』で、彼は手形を引裂いた、そして、さう爲て、伯爵夫人を嬉し涙で歎歎あげさせた。

それから、若rostオフは其上何等の事務にも手を出さ無かつた、唯だ、老伯爵の領地で大規模で始終やられて居た狩獵に關する有らゆることへ、熱烈な興味を以て、身を委だねたのであつた。

## (三)

冬の天氣が最早來かけて居て、朝の霜が秋の雨で濡らされた地面を堅くした。最早草が、諸方へ班に塊まりだした、そして、それが、家畜に踏み付けられた鶯色の冬の穀畑の断片や、夏の穀畑の薄黄色い刈株や、蕎麥の赤い地帯に對して、瞭然した緑色に抜け出して居た。八月の末には未だ、冬の穀類を播くばかりに鋤かれて居た黒い野の間の緑色の島々であつた高所や、小森や、刈株が、瞭然した緑の秋の穀類の海の中の黄金色や、凄まじい赤の島々になつてしまつた。灰色の野兎は最早毛を半分變へてしまひ、狐の仔は親を離れだして居、若い狼は犬より大き

かつた。一年のうちの狩獵の最好時期であつた。ロストオフのやうな熱心な若い狩獵家の犬は狩獵に好適の状態に今丁度なつたばかりの所であつた、だものだから、狩獵家たちの共同の會議で、犬に三日の休息を與へて置いてから、九月の十六日に、未だ一度も狩つたことの無い狼の巢のあるヅウブラヴィイを手始めとして、狩獵を始めやうと、決定した。

さういふのが、九月十四日の状態であつた。

その日終日犬も家に置いて置かれた。それは、寒さの肌染みるやうな、霜の多い天気であつた、が、晩近くなると、空がヒタヒタと曇つて、霜解がしだした。九月十五日の朝、ロストオフが、寢衣で、窓から見た時には、彼は、狩獵にはこの上無しの朝を見たのであつた。宛然、空が、溶けて、そよとの風も無く、地面へ沈み下りて来るかのやうに見えた。空気のなかの唯だ一つの物動きは、濕氣若くは霧の極微な粒の和かな落ちて来る動きであつた。庭の裸の小枝には、この頃落ちた葉の上に滴る透明な露が、懸つて居た。畑の地面は、罌粟の花の露の中央のやうな、キラキラする、濕つた、黒い色を爲て居て、少し前方では、霧の濕つた、靡な幕の裡へ溶け去つて居た。

ニコライは、濡れた泥だらけの昇降段へ出て行つた。腐つて行く木の葉や、犬の臭氣がし

て居た。背部の廣い、黒い、黄褐色の牝犬の……ミイルカは、大きい、飛び出した、黒い眼で、自分の主人を見付け、起きて、後脚を伸し、野兎のやうに臥たが、直ぐ、不意に跳びあがつて、主人の鼻や口鬚を真ともに舐めた。今一つの兎犬は、瞭然とした色の路から、自分の主人を見付けて、背部を高くし、昇降段へと驀地に飛んで来て、後尾を舉げて、ニコライの脚へ身體を擦り付けた。

『お、はい』。ニコライは、その途端に、最も深い低音と最も強い次中音を一緒にした真似の能き無い、狩獵の掛聲を聞いた。と、角を廻つて、獵人で、獵犬係の、ウークレエナ風には髪を圓く刈り付けた、半白の皺くちやの男のダニイラがやつて来た。彼は手に曲がつた鞭を持つて居た、そして、彼の顔は、獨立と、世の中の有らゆる物に對する輕蔑の——獵人のみに見られる——彼の表情を持つて居た。彼は、主人に向つて自分のサアカシア帽を脱つた、そして、主人を輕蔑した風で見た。その輕蔑は、主人には腹の立つ風のものでは無かつた。ニコライは、有らゆる物を侮蔑し、何物にも優つて居るこのダニイラが、それでも自分の忠實な家來であり、自分の獵師であることを知つて居た。

『ダニイラ』と、この狩獵の好天氣や、犬や、獵師を眼の前に控へて、情婦の前の戀人のや

うに、人が前から持つて居た了簡を全然忘れて了まうやうな、彼の抵抗し難い狩獵の情熱に自分か壓せられ掛けて居たのを、耻かしく感じながら、ニコライアイが云つた。

「何のご用ですか、閣下」と、補祭長には持つて来いといひさうな、掛聲で呷れた、低音の聲が尋いた、そして、ギリリとする黒い一對の眼が眉の下から黙まつて居る若主人をジロリと見上げた。「堪てえられ無えでがせうね」と、その二つの眼が尋いて居るやうに見えた。

「好い天氣だなア、え、え、？。馬に乗つたり、狩獵に出るには持つて来いといふ天氣だ、なア？」と、ニコライアイは、マイルカの耳の後を掻きながら、云つた。

「ダニイラは、瞬きしたばかりで、何とも返答し無かつた。」

「曉明に様子を見にウヅアルカをやつたでがす」と、彼の低音が、寸時黙まつて居てから、轟いた。「彼奴がオツラアドノエの獵場へ移つたと云つて来たでがすよ、其所で遠吠が聞こえたさうでがす」(「彼奴が移つた」といふのは、二人が知つて居た母狼が仔を幾匹か伴れて、二露里程離れた小さい獵區であつたオツラアドノエの森へ移つたといふ意味であつた)。

「行かうか、え、え、？」と、ニコライアイが云つた。「ウヅアルカを伴れて来いよ」

「畏まりました」

「では、彼奴等に餌をやることを止めるよ」

「宜しうがす、旦那様」

五分経つと、ダニイラとウヅアルカが、ニコライアイの大書齋に立つて居た。ダニイラは背が高く無かつたけれども、部室の裡で彼を見ることは、人が、馬か、熊か、家具や人間の其他の品物の裡に立つて居るのを見る時に、持つやうな印象を、人に與へるのであつた。ダニイラは自分でもそれを感じて居た、で、何時ものやうに、戸口へピッタリ附着て居て、成るべく低音で物を云ひ、主人の坐敷の何かを破はしては大變だと思つて、動か無いやうに爲て居た。彼は、成るべく早く、再野天へ、天井の下から空の下へ、出ることが能きるやうに、何も彼も云ふだけのことを速く云つて了まはうと能きる限り骨折つて居た。

種々尋いて見て、犬は大丈夫だといふ承認をダニイラにさせてから(ダニイラ自身が行き度かつたのだ)、ニコライアイは、馬に鞍を置くと二人に云ひ付けた。が、ダニイラが出て行かうとして居た丁度その途端に、ナタアシャが、年取つた乳母の大きい肩掛にくるまり、未だ着換を爲すに、髪を亂したまゝで、部室へ駆け込んで来た。ベエタイヤも一緒に駆け込んで来た。「行くんぢや無いの？」と、ナタアシャは云つた。「知つてるわ、行くんでせう。ソオニヤは、

貴下が行くんだつて云つてよ。斯様な日に貴下が行か無いで居られるもんですかよ」

「うん、行くんだ」と、ニコラアイは不承々に答へた。彼は、思ひ切つた狩獵を爲る積りであつたので、ナタアシャやベエティヤを伴れて行き度く無かつたのだ。「出かけるんだ、でも、狼狩だけなんだ、お前たちにやア面白く無からうよ」

「あら、私それが大好きぢや無いの」と、ナタアシャは云つた。「いけないわ——自分ばかり行く積りで、馬を出させることに爲て、私たちには一言も云は無いんだもの」

「何物か露西亞人の路を遮ぎらん」と、ベエティヤが朗讀口調で云つた、「行かうぢや無いか」「でも、いかんぢや無いか、母上様がお前は行つちやいかんと仰しやつたせ」と、ニコラアイはナタアシャに云つた。

「いゝえ、行きます、何うしても行きます」と、ナタアシャは斷乎と云つた。「ダニイラ、私の馬に鞍を置かせてお呉れ、それからね、ミハアイラに私の犬を伴れて來いと云つとくれ」と、ナタアシャは、獵師に云つた。

唯だ部屋に居るだけでも、ミハアイラには、五月蠅い、適應は無いことのやうに思はれた、況して、若い女主人と少しでも交渉を持つなどは到底思ひ寄りぬことのやうな氣が爲た。彼は、

眼を下げて、自分の關係すべきことでは決して無いとでも云ひさうな態で、何うかしたことで若い女主人に突き當りでもして、その場で何か怪我でも爲せてはと、大事を取つても居るかのやうに、その部屋を大急ぎで出て行つた。

(四)

何時も大規模の獵の備を持つて居た老伯爵は、今は、それを全然息子の監理の下に譲つて了まつたのであつたが、その日、即ち九月の十五日には、非常な元氣であつたので、その狩獵に加はる支度を爲た。

一時間のうちに、全團體が、玄關前に揃つた。ナタアシャやベエティヤがニコラアイに何か云つたけれども、彼は、下ら無いことに費す間暇は少しも無いことを見せるやうな、嚴かしい、眞面目な顔で、傍を通り過ぎて了まつた。彼は、狩獵に關する有らゆる物を監督し、一群の獵犬と獵師たちを、後から狼の逃路を塞ぐやうにと前へやり、自分はドン産の馬に乗つて、自分の犬に向つて口笛吹きながら、穀打場を横斷つて、オツラアドノエの獵區に續いた野へ出て行つた。老伯爵の馬——ヴィフリヤアンカと呼ばれた、鬣と尾の白い、栗毛の去勢馬——は、伯爵

の馬丁に引かれて居た、伯爵自身は自分が立つことに極まつて居た場所へ真直に軽い二輪馬車を驅る筈であつた。

五十四匹の獵犬が、六人の犬方と馬丁の監理の下に引かれて居た。正當に云ふと、獵師の裡には、家の者で無いのが八人、狩獵に加はつて居た、そして、四十匹の餘の鋭眼獵犬がその後を驅けて居た、それで、革紐で繋いだ獵犬と一緒にすると、百三十四匹の犬と、馬に乗つた二十人の人があつたのだ。

何の犬も自分の主人と、自分に對する呼聲を知つて居た。狩獵に加はつた何の人も、自分の爲事や、立場や、自分に充てられた役割を知つて居た。

垣を通り越すや否や、彼等は、オツラアドノエの森へ行く路や野に沿ふて、長く延ながら、衆皆、騒ぎも、話も爲無いで、動いた。

馬は、時々路を横斷る時に水溜へビシヤリと踏み込みながら、野の上を、和かな敷物の上を行くやうに、歩いた。霧深い空は、尙且、地面へとホンの少しづつ、だん／＼降りて来るやうに見えた、空氣は静で、暖であつた、そして、時々、獵師の口笛や、馬の鼻風や、鞭の音や、その居場から後へ落ちた犬の鳴聲の外、何の音もし無かつた。

一霧里行つた時分に、犬を伴つた五人の馬に乗つた人々が、ロストオフ家の人々に出會ひに、霧の裡から現はれて來た。その眞先の人、大きい白い口鬚のある勢の好い奇麗な老人であつた。

「今日は、「伯父さん」と、老人が自分へと乗り付けて來た時に、ニコライが云つた。

「宜しい、進め。……何うも左様思つたて」と、「伯父」と呼び掛けられた人は云ひ始めた。

この人は實際ロストオフ家の伯父では無く、この近所に小さい領地を持つて居る遠縁の者に過ぎ無かつたのだ。

「何うも君等は堪えられ無かつたらうと思つたんぢや、宜く出かけておいでぢやね。宜しい、駆け足」これが「伯父さん」の口癖であつた。直ぐ君等の獵區を攻撃するのが宜いせ、私のギルチイクの報告では、イラアギン家の奴等が獵犬を伴つてコルニイキイへ出るといふんぢや、何うかすると、奴等が君等の鼻前で獲物を引奪くつて了まうからな」

「え、丁度其所へ行くところですよ。犬と一緒に爲たら何うです？」と、ニコライが尋いた。

獵犬は一群に合せられた、そして、「伯父さん」とニコライは列んで乗り進んだ。

肩掛に纏まつて居たが、熱心な顔と、輝つた眼は隠れ無いナタアシャが、自分の傍を離れ無いで居たベエティヤや、ナタアシャに氣を付けて居ると云ひ付けられて居た獵師で馬丁であつたミハアイトと一緒に、ニコラアイと『伯父さん』の傍へ乗り附けて来た。ベエティヤは笑ひながら、自分の馬を鞭つて、しやくつて居た。ナタアシャは、上品な姿で、落ち着て、自分の眞黒なアラブチイクに乗つて自由な確乎した手でそれを取つて居た。

『伯父さん』は不賛成さうにベエティヤとナタアシャを見た。彼は、狩獵のやうな本氣な爲事に、戯談半分なことを混へるのを好ま無かつた。

『今日は、『伯父さん』、私たちも狩獵に行くんですよ』と、ベエティヤが叫んだ。

『今日は、今日は、ッが、犬を踏み殺さ無いやうに爲てお呉れ』と、『伯父さん』は、厳しく云つた。

『ニコオレンカ、ツルウニラは何て面白い犬なんでせう。私を知つてるのよ』と、ナタアシャは自分の氣に入りの犬のことを云つた。

『第一、ツルウニラは、唯だ犬では無くつて、狼獵犬なんだ』と、ニコラアイは思つた。彼は、その刹那に於ての自分とナタアシャとの間の位置の懸隔を感じさせやうと、妹をジロリと

見た。ナタアシャはそれを理解した。

『私たちは誰の邪魔も爲る氣遣は無くつてよ、『伯父さん』』と、ナタアシャは云つた。『私たちはチャンと極まつた場所に居て、其所から寸毫も動か無いわ』

『夫りや感心ぢやな、小さい伯爵嬢』と、『伯父さん』が云つた。『夫りや宜いが、馬から落ちなささん勿』と、彼は、云ひ添へた、『何うしても再乗れんからな——さア宜し、駆足ッ』

二百五十馬彼方に、緑色のオオシスの、オスツラアドノエ獵區が見えだした。ロストオフは、何の點から犬を掛けるのが宜いか、『伯父さん』との相談を終つて、ナタアシャに立つて居るべき場所——何にも逃げ出て来る氣遣の更無い場所——を指し示めした、そして、自分は、溪の上の後の方から取り圍かうと廻つて行つた。

『さア、甥、お前は老狼の跡を蹤け込んだのぢやぞ』と、『伯父さん』が云つた、『氣を付けて、逃さんやうに爲ろよ』

『場合次第です』と、ロストオフは答へた。『カラアイ、ほおい』と、自分の犬に對するこの呼聲で、『伯父さん』の注意に答へて、彼は叫んだ。カラアイは、自分一匹で老狼を攻撃したので名高い、年取つた、身體の曲がつた、泥色の獵犬であつた。

衆皆各自の立場に就いた。

狩獵に對する自分の息子の熱心を知つて居た老伯爵は、後れまいと急いだ、で、犬方どもが場所へ達したか達し無いか位な時分に、伯爵イリヤ・アンドレエーチは、快活な顔で、赤くなつた、震えて居る頬部で、彼にと充て、あつた場所へと、緑色の野を越えて、二頭の黒馬で、駆けて來た。毛皮外套を眞直にし、獵具を着けて、彼は、自分と同一に白くなり掛けて居た、スラリとした、肥つた、静な、機嫌の好いヴィフリアアンカに乗つた。伯爵イリヤ・アンドレエーチは、心からの狩獵家でこそ無けれ、狩獵の有らゆる規則を善く心得て居た。彼は、灌木の森の縁へと乗つて行つて、その後方に立ち、手綱を取りあげ、緩然と鞍に身體を据え、そして、自分が用意して居ることを感じて、微笑みながら、四邊を見廻した。

彼の傍には、今は鞍の上で重くなつて居るけれども、手練の乗馬者の、彼の侍僕のセエミヨ・チエークマルが立つて居た。チエークマルは、革紐で繋いで、特種の種の三匹の狼獵犬を引いて居た、さういふ犬は、尙且彼等の主人やその馬と同じに肥つて居たけれども、勢の強い獵犬であつた。もう二匹の鋭い老犬が、その傍に、革紐無しに、臥て居た。百歩離れて、森の縁に、伯爵の今一人の馬丁の、向ふ見すの馬乗者で、熱烈な狩獵家の、ミトカが居た。伯爵

は、狩獵を始める前に、香を付けた火酒を銀の酒盃に入れて飲む古い慣例を守つて居た、彼は、軽い中食を爲、その後で、好きなポルドオを半壺飲んだのであつた。

伯爵イリヤ・アンドレエーチは、酒を飲んだのと、馬車を驅けさせたので、大部カッとなつて居た、眼は、濕氣に蓋はれて、殊にキラ／＼して居た、そして、毛皮外套に纏まつて鞍に乗つて居る所は、馬車で外へ伴れ出された幼児のやうであつた。

自分の役目を悉皆調べてから、チエークマルは、瘡せた顔と、落ち込んだ頬部とで、三十年の間甚く仲善く暮した主人の方を見た。主人が機嫌の好いのを認めて、彼は、愉快な談話を豫期した。今一人の人が——必然さう注意されたのであらうが——緩然と森から乗り出して來て、伯爵の後方で、馬を止めた。この人は、女の長上衣と、高い、峯形の帽子を着た白鬚の老人であつた。これは、道化者のナスタアシャ・イヴァアノヅナであつた。

「おい、ナスタアシャ・イヴァアノヅナ」と、彼に向つて眼胸を爲て、伯爵が呟いて、「お前は獲物を驚かして逃がすだけぢやよ、ダニイラに目を見せられるぞ」

「私だつて昨日生れたんぢやア無いですよ」と、ナスタアシャ・イヴァアノヅナが云つた。

「シッ」と、伯爵が、云つて、セエミヨンに振り向いた。「ナタアリヤ・イリイニチナを見掛



けたかね?』と、彼はセエミオンに尋ねた。「彼の女は何處かい?」

「彼の方はビョートル・イリイチと一緒に、ザアルヴリイの高い草の蔭にお居ででございます」と、セエミオンが、微笑みながら、答へた。「ご婦人ですが、狩獵は甚くお好きでございますな」

「それに、馬術の達者なのにやア驚くだらう、セエミオン……え、え?」と、伯爵は云つて、「男にしても、拙くは無いね」

「驚かんものがございますものかね。彼の通り大膽で、敏捷くつてお居ですから」

「それで、ニコラアシャは何處かい? リヤドオフスキイ丘かね、え、え?」と、尙且呟語で、伯爵が尋ねた。

「左様でございます。若旦那は一番好い立場をご存じでございます。狩獵のことは實にお精しいんで、ダニイラや、私は時々甚く驚く位でございますわい」と、主人を喜ばす方法を知つて居たセエミオンは云つた。

「彼者は、好い、伶俐な、狩獵家ぢや、え、え?。馬術は何うちやの?」

「全くお見事で、此の間、ザアルジンスキイ森から狐を追出したお手際なんてえも

のは實にございませんでしたなア。雌から駆け下していらしたのですが、實に見物でございませしたなア——馬は千留の名馬、乗者は有らゆる價值も及ばるのでございますな。左様、若旦那に肩を並べる位のもは、世間に容易にあるものではございませんよ」

「容易には無い……」と、セエミオンの言語が、其様々に早く経つて了まつたのがさも残念らしい態で、伯爵は繰り返した。「容易には」と、彼は上衣の裾を、引つ繰り返して、鳴煙草函を捜しながら云つた。

「何日かは、彼の方々が、非常に立派な風で祈禱會から出ていらしたのですが、その時、ミハアイル・シドリイチが……」

セエミオンは、閑然とした空氣の裡で、獵犬の群の突進する——その中の二三匹以上が知らせの鳴聲を揚げて居る——音を瞭然と聞いて、言語をバタリと斷つた。頭を傾げて、彼は、主人に向けて注意の指を振りながら、聞き澄ました。

「獸を鳴ぎ付けまして……」と、彼は呟いた。「リヤドオフスキイ丘の方へ眞直に参りましてございませ」

伯爵は、尙且、微笑を顔にたゞよはせながら、路に附いて、自分の前方を眞直に見て、そし

て、手に携つて居た嗚烟草函から一摘も取ら無かつた。獵犬の叫聲に直ぐ續いて、ダニイラの角笛から出た、狼の狩り聲の低音の調子が聞こえた。群が最初の三匹に合した、そして、獵犬どもの聲々が、彼等が狼を追つて居ることを表はす事になる奇異な調子で、聲限りの叫聲に於て、聞こえて来た。獵犬方は最早追聲を出しては居無かつた、が、『ウリユウリユウ』の叫聲で、犬を勵まして居た、そして、總ての聲の上に、ダニイラの、深い調子から、鋭い甲聲に移つて行く聲が、高く聞こえた。ダニイラの聲は、森ちうに満ち、それを突徹し、そして、廣野の遠方へと反響して行くやうであつた。

黙まつて數秒聞き澄してから、伯爵と馬丁は、確に獵犬が二群に分れたなと感じた、一つの、大きい方のは、殊に烈しい叫聲で、遠方へ行きつゝあつた、群の他の部分は、伯爵の傍を通り越して、森に附いて動いて居た、そして、犬を勵まし進めて居るダニイラの聲が聞こえたのはこの群と一緒にあつた。兩方の群からの音が一つに溶け合ひ、又分れた、が、兩方とも、だんだん遠方へと行くのであつた。セエミヨンは溜息した、そして、若い犬が脚へからました草紐を直さうと屈んだ。伯爵も溜息した、そして、嗚烟草函を手に携つて居るのに氣が付いて、それを開けて、一摘取つた。

『後方へ』と、灌木の裡から頸を突出して居た犬に、セエミヨンが叫んだ。伯爵は愕然とした、そして、嗚烟草函を落した。ナスターシャ・イヴァノヴナは馬から下りた、そして、それを拾ひ上げ始めた。

伯爵とセエミヨンは彼を見て居た。往々ある通りに、全く不意に、吠へる犬やダニイラの聲が、直ぐ自分たちの所で爲るかのやうに、狩獵の音が、倏忽直ぐ間近で聞こえた。

伯爵は見廻した、と、右で、頭から突出しさうな眼で、伯爵を見詰めて居るミトカを見た。帽子を擧げて、彼は、他の側の前面を指した。

『ご用心』と、彼は、言語が、云ひ出して貰ひ度くつて、長いこと彼を苦しめて居たことを表はすやうな聲で、云つた。で、犬を放して置いて、彼は、伯爵の方へ駆けた。

伯爵とセエミヨンは灌木林から駆け出た、と、左の方に狼を見た。静かな、ゆらくした態で、それは、二人が今まで立つて居たその林をさして、二人の左の方を彼方へ、緩然した調子歩で、動いて居た。怒つた犬は鳴いた、そして、草紐から皆身を振り放して、狼を追つて、馬の蹄の側を飛んで去つた。

狼は止まつた、扁桃腺炎に罹つた人のやうに、窮屈さうに、犬の方に、重い額の頭を振り向

け、そして、同なじやうな静かな、ゆらくした態で、一躍、又二躍して、後尾を振つて、林の裡へ隠れて了まつた。

その途端に、嘆聲のやうな叫聲で、彼方の森の裡から、烈しい勢で、一匹の獵犬、續いて、第二、第三と、跳び出して來、それから、群全體が、開けた地面を横斷つて、狼が見え無くなつた丁度その地點の方へと飛んだ。灌木林が犬の後方で掻き分けられた、そして、汗で黒くなつたダニイラの栗毛馬が其所から現て來た。その長い背に、ダニイラは、高く止まつたやうに乗つて、前の方へゆらくと爲て居た。彼は、赤い、汗ばんだ顔の上に、亂れて揺れて居る白髪の上に、帽子を冠つて居無かつた。

『ウリユウリユウリユウ。ウリユウリユウ』と、彼は叫んで居た。伯爵を見付けるといふと、彼の眼に電光のやうな閃光があつた。

『馬……』と、烈しい亂暴な悪口を吐き、振り揚げた鞭で伯爵を赫しながら、彼は叫んだ。『彼を逃したね……それでも狩獵家かい』

で、顛動して、怖けた伯爵にその上言語を費すのを卑しむかのやうに、彼は、伯爵に與へる積りであつた總ての憤激で、自分の栗毛の去勢馬の濕めつた重い横腹を鞭うつて、犬の後を追

つて飛んで去つた。伯爵は答たれた人のやうに立つたが、四邊を見て、微笑んで、自分の困却に同情して貫らはうとセエミヨンを呼ばうと爲た。が、セエミヨンは其所に居無かつた、彼は森から狼の路を斷らうと、廻つて駈けて去つたのだ。鋭眼獵犬も、又、兩側を彼方此方と駈けて居た。が、狼は灌木林の裡へ逃げ込んで了まつた、そして、連中のうちで、それを見付け得た者は一人も無かつた。

## (五)

ニコライ・イ・ロストオフは、その間、狼を待ちながら、自分の立場に立つて居た。彼は、近く爲つたり、遠くへ行つたりする獵犬の群の突進から、その調子を彼が善く知つて居る犬の叫聲から、獵師たちの聲々の、近いこと、すつと遠くなること、不意に高まることから、必定何様なことが森の裡で起つて居るかを覺つた。彼は、森の裡に若い狼も老狼も兩方とも居ることを知つた。彼は、獵犬が二手に分れて、一か所では、狼に近づいて居るのだが、他の方では、何か旨く行か無いのだと、知つた。彼は、自分の傍に狼が出て來るのを、今かくと待ち設けた。彼は、何ういふ風に、又、何の地點へ狼が駈け出るだらうか、そして、自分は何ういふ風にそ

れにかゝるのだらうかと、實に種々な想像を描いた。希望が絶望に次がれた。

幾度も、彼は、狼が自分の方へ飛びかゝつて来るやうにと、神に祈つた。彼は、人が下ら無い原因から起る烈しい感情の刹那に於て祈る時の、熱烈と悔恨とのその感で祈つたのだ。

『もし、貴下に取つては』と、彼は神に向つて云つて、『私にこれを爲てくださるのが何でせう？ 私、貴下が大であつて、此様なことを貴下に祈るのは罪であることを知つて居ます、けれども、何卒、老狼を私の所へ來させて、そして、カラアイをして、此方を見て居る「伯父さん」の眼の前で、狼の喉に齒を極めさせて、それを噛み止めさせてくださいまし』

その半時間のうちに、實に幾度と無く、ロストオフは、凝然と見詰める、見張つた、不安な眼で、箱柳の下生の上へ二本の骨張つた大綱が立つて居る森の縁や、押冠ぶさつて居る岨の溪や、右の灌木の蔭から覗き出して居る『伯父さん』の帽子などに、氣を付けた。

『いや、その幸福は來無からう』と、ロストオフは思つて、『でも、神に取つては何でも無いことなんだがなア。さうなる筈は無いんだ。俺は何時も運が悪りい、骨牌でも、戦争でも、何でも彼でも』

アウステルリッツや、ドロオホフが、彼の想像の裡を、瞭然した然し速い連続で閃めいた。

『生涯に唯つた一遍で宜いから、老狼を殺し度い、それ限りで満足する』と、彼は、思つて、眼を見張り、耳を澄まして、左から右へ、再後へと、見廻し、犬の聲の一寸とした高低さへも聞き澄して居た。

彼は再右を見た、と、何か開けた地面を横断つて、自分の方へ駆けて來るのが見えた。

『いや、其様な筈は無い』と、ロストオフは、人が自分が長く待ち設けて居た物が來た時にやるやうに、深い呼吸を吐きながら、思つた。非常な好運が彼に來て居た、而も、眞個に簡單に、それを知らせる音も無く、騒ぎも無く、顯表も無く。ロストオフは、自分の眼を信ずることが能き無かつた、そして、この不確な状態が寸時續いた。狼は前へと駆けて居た、途中を横断つて居た溝を、無態に跳び越した。

それは、灰色の脊と、膨れた赤い腹の老狼であつた。見られる氣遣は無いと安心して居るらしい態で、急がずに駆けて居た。ロストオフは呼吸を塞めた、そして、犬どもを見返つた。彼等は、狼を見ず、その出て來たことは全然氣が付かずに、臥て居るのもあり、立つて居るのもあつた。年取つたカラアイは頭を後へ振り向けて、腰の所で、黄色い齒を噛み合せながら、腹立たしさうに蚤を探して居た。

「ウリユウリユウリユウ」と、ロストオフは唇を突出して、叫いた。犬は革紐の鐵輪を鳴らして、跳び起き、耳を突つ立てた。カラアイは、後脚を掻いて、起きて、耳を立て、毛皮の糾れた捲毛が垂れて居た後尾を振つた。

「放さうか？。それとも、放すまいか？」と、ニコライは、狼が森から自分の方に動いて来るうちに、一人で云つた。不意に、狼の顔容全體が變つた。彼は、自分の上に見据えられた人間の眼を——多分生れて最初であらうが——見て、愕然とした、そして、ロストオフの方へ少し顔を振り向けて、後へ戻らうか、行かうかと、疑つて、靜乎と立つて居た。

「何の。構うもんか、進め。……」と、狼は獨り云つて居るやうに見えた、で、見返らずに、速くは無く、緩然と、平氣な然し斷乎した舉動で、ドシ〜進んだ。

「ウリユウリユウ……」と、ニコライは自分ので無いやうな聲で叫んだ、と、彼の勇敢な馬は獨で真逆さまに坂を駆け降り、そして、狼の退路を塞ぐやうにと、谷川を跳び越した、犬は、尙一層速く突進して、馬に追ひ付いた。

ニコライは、自分の叫聲が耳に入ら無かつた、彼は、自分が駆けて居るといふ知覺が少しも無かつた、彼は、犬をも、自分も駆けて居る地面をも見無かつた。彼は、步調を速めながら

林中の路を横斷つて同なじ方向を執つて跳んで行きつゝ、あつた狼の他、何にも見無かつた。獵犬の一番先の奴は、黒い黄褐色の、背部の廣い牝犬のミイルカで、それが、狼に近づきつゝ、あつた。が、狼は、それに横瞥を呉れた、と、ミイルカは、何時もやるやうに狼に跳び付きはせずに、不意にビタリと止まつた、前脚を前へツンと突張り、後尾を立てたまゝで。

「ウリユウリユウリユウ」と、ニコライは叫んだ。

赤い獵犬のリユウビマが、ミイルカの後から跳び進んで、藪地に狼に跳び掛つて、後脚を噛み留めた、が、同時に慄へ上つて、横へ跳び退いた。狼は居坐つて、齒を噛み鳴らし、再起ち上がつて、二嗎程後から總ての犬に追蹤られながら、跳んで行つた、犬どもは、傍へ寄らうと爲無かつた。

「奴逃げちまうな、否、其様なことがあるものか」と、ニコライは、尙且噎れた聲で叫びながら、思つた。

「カラアイ。ウリユウリユウ……」と、今彼の唯だ一つの望であつた年取つた獵犬を捜しながら、彼は叫び續けた。

カラアイは、有らん限り自分の年取つた筋骨を伸し、狼を一生懸命に見詰めながら、狼の前

路を塞がうと、狼を離れて拙態に跳んで行くのであつた。が、狼の駆けるの、速さと、獵犬どもの緩さから見ても、カラアイの心積りの外れて居たのは明瞭であつた。

ニコライアイは、森が今自分の前に遠く無いのを見た。狼にして一たびそれに達せんか、彼は確に遁れおほせるであらう。が、前面に、狼の方に殆ど真直に跳び掛つて来る犬と人の群が出て来た。未だ望は有つた。ロストオフ家ので無い——ニコライアイには誰のとも分ら無かつた

——胴の長い若い獵犬が、前面から狼に真正面に跳び掛つた、そして、殆ど彼を叩き倒した。狼は非常に速さで起き返つた、そして、若い獵犬に跳び掛つた、彼の齒がカチリと鳴つた、と、獵犬は、横腹の傷から出る血にまぶれて、キャン／＼鳴きながら、地面へ頭を突つ込んだ。

『カラアイ。老爺さん』と、ニコライアイは、嘆くやうな聲で、云つた。

老犬は、もつれた毛の房を腰の上で震はせながら、狼が後れたお蔭で、その前路を塞ぐことができた、で、今狼の前面五歩ほどの所に居た。狼は、自分の危難を覺つたかのやうに、カラアイをジロリと盗み見た、そして、脚の間へ一層深く後尾を捲き込んで、歩調を速めた。が、その時——ニコライアイにはカラアイが何うか爲ただけしか見え無かつたが——その獵犬は直ぐ狼に跳び掛り、そして、狼と一緒に挽き合ふ一つの塊りになつて、その前の水路へ轉つた。

ニコライアイが、水路と、狼と争つて居る犬どもとを、見た時、犬どもの下に狼の灰色の毛皮や、踏み延した後脚や、恐怖で喘いで居る顔や、引きそばめた耳(カラアイが彼の喉に噛み付いて居たのだ)を見た時——ニコライアイが總てさういふものを見たその刹那は、彼の生涯の最も幸福な刹那であつた。彼は、最早下りて狼を刺さうと鞍頭を擡んで居た、と、不意に、狼の頭が犬の群の上に突き出され、續いて、前脚が水路の岸に掛つた。狼は齒を噛み鳴らした(カラアイは最早その喉に噛み付いて居無かつた)、窪所から後脚で跳び出した、そして、脚の間に後尾を捲き込んで、再犬どもから逃げて、前へ突進した。毛を突立たせたカラアイは、なか／＼水路から出られ無かつた、彼は、擦傷が出来たか、傷を受けたか、何方かであつた。

『あ、何うしたんだなア』と、ニコライアイは絶望して叫んだ。

『伯父さん』の獵師が、彼方側から、狼の前路を横断つて駆けた、そして、再彼の獵犬どもが狼を止めた、彼は再圍まれて了まつた。

ニコライアイや、その馬丁や、『伯父さん』や、その獵師が、ウリユリユウの叫聲で、狼の周圍を跳び廻つて、狼が居坐る度毎に、馬を下りやうと爲、狼が振り放して、自分が安全になり得る森の方へと動き出す度毎に、再前へ突進するのであつた。

この進撃の始に、ダニイラは、獵師たちの叫聲を聞いて、森から跳び出した。彼は、カラアイが狼を噛み留めたのを見た、そして、最早それで終局だと想像して、馬を止めた。が、獵師たちが馬を下りず、狼が振り放して、再逃げ出して居るのを見て、ダニイラは、狼の方へでは無くカラアイがやつたやうに、狼の路を斷る爲めに、森の方へ真直に馬を駆けさせた。この運動のお蔭で、彼は、『伯父さん』の犬どもが二度目に狼に後れた時に、狼の上に真正面に跳び掛つた。

ダニイラは、左の手に抜いた短剣を持ち、宛然連枷でもあるかのやうに、鞭で彼の栗毛馬のダク／＼して居る横腹を叩きながら、黙まつて駆寄つた。

ニコラアイは、ダニイラの喘いで居る栗毛馬が自分の直ぐ傍を飛んで行くまで、ダニイラを見もせず、聞きも爲無かつた、と、彼は、物の落た音を聞いた、そして、狼の背中に跨がつて、耳を取つて抑へ付けやうとしながら、犬どもの真中に横はつて居るダニイラを見た。最早それで終局であつたことは、犬どもにも、獵師たちにも、狼にも、明瞭であつた。狼は、恐怖で耳を引きそばめて居て、起きやうと爲た、が、犬が彼に噛み付いて居た。ダニイラは、起たうと爲て、躓づいた、で、腰を下して憩まうと爲るかのやうに、身體全體の重量で狼の上に轉がつた、そして、耳を撃つてそれを抑へ付けた。ニコラアイは、それを刺し殺さうと云つた、が、

ダニイラは叫いた――

『お止しなせえ、縛つちめえませう』で、自分の身體の位置を変えて、狼の頸を踏み付けた。人々は、狼の口へ棒を入れて、轡を箝めたかのやうに、犬の革紐でそれを結び着け、そして、兩脚を縛つた。ダニイラは、狼を二度ごろ／＼と轉がした。

幸福な、疲れ切つた顔で、人々は、大きい狼を生きたながら、それを見て驚いて、跳びあがつて、鼻嵐を吹いた馬の背に縛り付けた、そして、狼の後に列んで、吠て居る總ての犬を伴れて、衆皆が集まることになつて居た場所へそれを持つて行つた。

狼獵犬が、狼の仔を二匹、銳眼獵犬が三匹捉まへた。連中は、自分等の獲物を見せ、各自の物語を爲るために、一緒に集まつた、そして、誰も彼も大きい老狼を見に行つた、それは、下の方へ垂れて居る重さうな額の首で、齒の間に棒を啣へさせられて、周圍の犬や人の群を、大きい澄み切つた眼で見詰めて居た。人々が觸はるといふと、その縛られた脚が震えた、そして、彼は、衆皆を、物狂はしく、然かし、單純に見るのであつた。伯爵イリヤ・アンドレーチも傍へ行つて、狼に觸つた。

『やア、どえらい大きい獸ぢやなア』と、彼は云つた。『古い奴ぢやな、え、り』と、傍に立

つて居たダニイラに尋いた。

『へい、左様で、閣下』と、急いで帽子を脱つて、ダニイラが答へた。

伯爵は、自分が狼を逃した事、ダニイラが怒號り付けたことを憶ひだした。『お前はえらい短氣ぢやなう』と、伯爵が云つた。

ダニイラは何にも云はずに、耻づかしさうに小兒のやうな可愛らしい、愛嬌のある笑顔を見せた。

## (六)

老伯爵は家へ歸つた。ナタアシャとベエティヤは直きに後から歸ると約束した。未だ時間が早かつたので、狩獵の連中は先方へ進んだ。眞晝頃に、彼等はヒシ／＼と茂つて居る若い森で蓋はれて居る溪間へ獵犬を入れた。ニコライは、上の刈株の残つて居る地面に立つて居たので、自分の連中全體を見ることができた。

ニコライの正面の彼方側には、緑色の穀物の野があつた、そして、其所の胡桃林の影の窪地に彼の獵師が一人で立つて居た。獵犬が放さるゝや否や、ニコライは、自分が知つて居た

獵犬——ヴォルトオルン——が時々聲を揚げるのを聞いた、と、他の獵犬どもがそれに一緒になつて時々止めたり、再聲を合せたりした。寸時経つと、彼は、溪間から、獵犬が狐の蹤を付け出した叫聲を聞いた、そして、獵犬の群全體が一緒になつて、ニコライの彼方の緑色の穀物の方の出口へと行つた。

彼は、赤い帽子の獵犬どもが、木の茂つた溪間の縁に沿ふて馬を駆けて居るのを見た。彼は犬どもをさへ見ることができた、そして、緑色の穀物の間の彼方側に狐が見えて来るのを今か／＼と待ち設けて居た。

窪地に立つて居た獵師は跳び出した、そして、犬を放した、と、ニコライは、緑色の穀物の間を、太いモジャ／＼した後尾を地面に引擦るやうにして、急いで行く赤い奇異な形の狐を見た。犬どもはそれを追つ掛けて居た。で、今彼等はそれに近づいて居た、で、今狐は彼等の間を、だん／＼速く圈を畫きながら、そして、自分の周圍にボヤ／＼した後尾を引擦りながらぐる／＼廻り始めて居た、と、不意に、知ら無い白い犬がそれに飛び付いた、その後から黒い犬が来た、と、何も彼も混亂して了まつた、そして、犬どもは、少しも動かずに、頭を一緒に寄せ、後尾を突き出して、狐の周圍に星のやうな形を造つた。二人の獵師が犬へと馬を駆けさ



せた、一人は赤帽で、今一人は、緑色の上衣を着た知らない人であつた。

「何うしたんだらう？」と、ニコライアイは怪んだ。「何處から彼の獵師は飛び出したんだらう？。彼は「伯父さん」の方の者ぢやア無い」

獵師は狐を捉まへた、そして、鞍へそれを垂ら下げずに、長いこと徒歩のまゝで立つて居た。彼は、二人の直ぐ傍に立つて居る突出して居る輕勒の附いた馬と、臥て居る犬どもを、見ることが能きた。獵師たちは腕を振つて、狐で何か爲て居た。角笛が鳴らされた——爭論の場合にと極まつて居た合圖なのだ。

「彼やア、イラアギンの獵師が、吾々のイヴァンと何か喧嘩して居るんでございますせ」と、ニコライアイの馬丁が云つた。

ニコライアイは、妹とベエティヤとに自分の所へ来るやうにと、馬丁を喚びに遣つた、そして、獵犬方どもが獵犬を纏めて居た場所へと、並歩で乗つた。連中の中の五六人が喧嘩の場所へと馬を駆させた。

ニコライアイは下りた、そして、乗り附けて來て居たナタアシャやベエティヤと一緒に、爭論が何う決着したか聞かうと待ちながら、獵犬の傍に立つて居た。喧嘩して居た獵師が、鞞に狐を着けて、樹立の裡から乗り出して、若主人の方へやつて來た。彼は餘ほど遠方で帽子を脱り、そして、傍へ來ながら、恭々しく物云はうと試みた。が、彼は着くつて、呼吸がはづんで居、そして、顔は怒つて居た。一方の眼に傷が出來て居た、が、それには自分は氣が付いて居無いらしかつた。

「彼所で何が有つたんだ？」と、ニコライアイが尋いた。

「へい、奴は、吾々の獵犬の眞個の鼻頭で狐を殺さうと爲たんです。それを捉つたのは、私の牝犬——鹿色の奴——なんですせ。おいでなすつて、十分掛け合つて頂き度いんです。狐を持つてかうとするんですせ。狐で一つ打つ喰はせてやりましたんです。今は斯う鞍に着けて來ましたせ。お前これが食つて見度えのかい」と、未だ敵に云つてるやうな氣が爲るのであらう、獵小刀を指しながら、獵師は云つた。

ニコライアイは、その男に對して、言語を費さ無かつた、が、妹とベエティヤに待つて居ると云つて置いて、敵のイラアギンの獵犬や人々の一緒に集まつて居る場所へと乗つて行つた。

勝誇つた獵師は自分の仲間の間へと乗つて行つた、そして、其所で、同情あり、且聞き度がつて居る群集の中心に爲つて、自分の功績話を繰り返した。

要領は、ロストオフ家が何か諍ひを爲して、訴訟を起した間柄のイラアギンが、往昔からの習慣でロストオフ家に屬して居る場所で狩獵を爲して居て、そして、今、故意でもあつたかのやうに、ロストオフ家の人々が居た溪間へ、人をよこして、そのうちの一人に、他人の犬の下から狐を引奪らせるやうなことをさせたといふのであつた。

ニコラアイは一度もイラアギンに逢つたことが無かつた、が、彼はその隣人の喧嘩好きであること、頑冥なことを聞いて居た、で、彼が何時もやるやうに、判断と感情に於て極端へ走つて、彼は心からイラアギンを憎んだ、そして、彼を自分の最も烈しい敵と見て居た。昂奮して、怒つて、彼は、今、手に鞭を握つて、敵との交渉に於て最も手強い烈しい手段を取つてやらうと十分に用意して、イラアギンへと乗り附けて行つた。

森の背を未だ乗り越して了まうか、了まは無いうちに、彼は、綺麗な眞黒な馬に乗つて、馬丁を二人伴れて、自分の方へやつて来る海狸の帽子を冠ぶつた肥大した紳士を見た。

ニコラアイは、敵どころか、イラアギンに於て、若伯爵と懇親に非常になり度がつて居た堂堂たる風采の紳士を見出した。イラアギンは、ロストオフに近づきながら、海狸の帽子を脱つた、そして、彼が起つた事件を非常に残念に思ふといふことや、その當の男に罪を受けさせる

積りだといふことや、彼は伯爵と懇親を結び度く願ふといふことを云ひ、それから、自分の獵區を使つて呉れと申し出した。

ナタアシャは、兄が何か大變に恐しいことを爲はしまいかと心配して、何と無く昂奮して、兄の後から忽然離れて乗つて居た。敵同士が親しい挨拶を交換して居るのを見て、ナタアシャは二人の傍へ乗り附けた。イラアギンはナタアシャに向つて一層高く海狸の帽子を舉げた、そして、心持好く微笑みながら、伯爵嬢は、狩獵の甚く好きなこと並びに、彼が度々聞いて居た美しさに於て、全くディヤナであると云つた。

イラアギンは、自分の獵師の罪の印象を消さうと思つて、彼が自分の爲めに取つてある、野兎の非常に居るといふ、一露里ほど彼方の高所へロストオフに是非来いと、たつて勧めた。ニコラアイは承知した、そして、今その數が倍になつた連中全體が動き進んだ。

彼等は、その場所へ行くには、野の裡を乗り過ぎ無ければなら無かつた。獵師たちは列を爲して、乗り、紳士たちは一緒に乗つた。「伯父さん」も、ロストオフも、イラアギンも、對手に見られ無いやうに骨折リながら、各々の犬に勝ちさうな競争者を不安さうに捜しながら、各自の犬を竊然と見て居た。

ロストオフは、殊に、イラアギンの、鋼のやうな筋骨の、華奢な鼻の、突出した眼の、細そりした、黒と黄褐色の、純種の小さい牝犬の美しさに驚かされた。ロストオフはイラアギンの犬どもの狩獵方に就て聞いたことがあつた、そして、彼は、その美しい牝犬に於て、自分のミイルカに對する競争者を見た。

イラアギンが起した、その年の穀物の收穫に關する落着た談話の最中に、ニコラアイは黒と黄褐色の牝犬を指した。

「善い牝犬をお持ちですなア」と、彼は、無頓着の調子で云つた。「惻巧なんですか」

「彼ですか？。左様、善い犬です——野兎を捉ります」一年前に、耕奴の三家族を遣つて、隣人と交換に爲た牝犬のヨオルザのことを、イラアギンは、斯う無頓着に云つた。「で、奴等は穂を落すことを自慢しませんよ、伯爵」と、イラアギンは前からの談話をまた續けた。で、若伯爵の世辭に答へ返すのが當然禮儀だと感じたので、イラアギンは、ロストオフの犬どもを見渡した、そして、廣い背中が眼に着いたミイルカを選んだ。

「貴下の彼の黒と黄褐色は好いですが——なかく善い犬だ」と、彼は云つた。

「左様、彼奴は善いんです、なかく駄げます」と、ニコラアイが答へた。「好い大きい野兎

が野へ出て來無いかなア、さうすれば、犬の力をお前に見せてやるかなア」と、彼は思つた、で、彼は、自分の馬丁に振り向いて、誰でも野兎を追ひ出した者には一留遣ると云つた。

「私には解らんですね」と、イラアギンが續けて「他の狩獵家たちが、獲物や、犬を羨み合ふのは、何ういふ理由なのでせうか。私自身のことを申しますとね、伯爵。私は、ご承知の通り、狩獵は好きです、斯ういふご連中と一緒の狩獵は……これに越した面白いことはありません。彼は、再ナタアシャに向けて、海狸の帽子を揚げた、「けれども、獲つた皮の數を勘定することなんぞ——其様なことは何うでも宜いのです」

「いや、ご道理」

「又、私の犬が他の犬に負けた所で、決して何とも思はんですよ——私の目的は唯だ狩獵をものなんです、え、伯爵？。ですから、私の考では……」

「アツウ——エゾア」が、その途端に、馬丁の一人の口から引張つた呼聲で、響き渡つた。彼は、刈株の間の小高い所に、鞭を揚げて、立つて居た、彼は今一遍「ア——ツウ——エゾア」と、呼んだ。（この呼聲と、揚げた鞭が、自分の前に野兎が蹠がんで居るといふ合圖であつた。）「あ、野兎を見付けたな、さうらしい」と、イラアギンは、無頓着に云つた。「では、追つ

掛けませう、伯爵」

「えい、やら無ければ……でも、何うです、一緒ですか？」と、ニコライは、自分の犬を合はせる機会を持た無かつた二匹の競争者のヨオルザと「伯父さん」のルガアイを凝乎と見ながら、答へた。「奴等が俺のミイルカを最初から負したら何うしやう」と、彼は、「伯父さん」とイラアギンに並んで、野兎の方へと乗りながら、思った。

「大きいのか？」と、イラアギンは、それを見付けた馬丁の傍へ行きながら、自分のヨオルザに口笛吹いて、幾干か昂奮して、邊を見廻しながら、尋いた。……「で、貴下は、ミハアイル・ニコノオリイチ」と、彼は、「伯父さん」に云つた。

「伯父さん」は、怫然とした顔で、乗り進んだ。

「貴下がたと競争したつて何うなるのですかね。もし、貴下がたの犬は——貴下がたは、一匹を村一つ宛で買ったんぢやア無いか、何干といふ價格の犬なんぢや。貴下がたの奴同士競争させるが宜しい、私は見物ぢや」

「ルガアイ。な。な」と、彼は叫んだ。「ルガアイエウシカ」と、彼は、自分の愛情と、自分がその赤犬に置いた希望とを、この優しい小名で、我知らず、云ひ表して、附け足した。

ナタアシヤは、二人の年取つた人々と自分の兄とが隠して居た感情を見、且つ感じた、そして、自分もそれで氣が昂つた。小高い所に居る馬丁は、鞭を揚げて立つて居た、紳士たちは、並足で、それへと乗つた、獵犬の群は、地平線の縁に居て、野兎から反対の方へ動いて去つて居た、狩獵の連中の他の者たちも又乗り去つて居た。有らゆることが徐々に、緩然と爲された。

「何方に向いてるんだ？」と、ニコライは、馬丁の方へ百歩ほど乗つて行つてから、尋いた。が、馬丁が返答を爲る時間を待たぬうちに、次の朝下りる霜を地面で嗅いで居た野兎は、踞がんだ位置から跳びあがつた。革紐に繋がれて居た獵犬の群は、野兎の後から、吠えながら、下り坂を飛んだ、革紐に繋がれて居無かつた兎獵犬は、八方から、獵犬の方に、又は、野兎の後へと突進した。それまでは非常に緩然と動いて居た獵犬方どもは、「止まれ」の叫聲で、犬を纏めやうと、その邊を駆け廻り、獵師たちは、「アツウ」の叫聲で、犬の方向を指圖した。それまで非常に落着いて居たニコライも、ナタアシヤも「伯父さん」も、イラアギンも、何う爲るかとか、何處へ行くかとかいふことなどは少しも構はず、犬と野兎の他は何にも見ず、寸時でも狩獵の方向を見失なうといふことの他何をも慮れずに、前へと飛んだ。

野兎は、速い強い奴であつた。跳びあがつた時に、直ぐ駆け出しはし無かつた、唯だ、耳を